埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 355 集

さ い た ま 市

大木戸遺跡 Ⅰ

大宮西部特定土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

（第 1 分冊）

2 0 0 8

独立行政法人　都市再生機構
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・報告書作成の組織 …… 5
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 7
　1．地理的環境 …… 7
　2．歴史的環境 …… 7
Ⅲ　遺跡の概要 …… 15
Ⅳ　第1・5・7地点の遺構と遺物 …… 20
　1．概要 …… 20
　2．旧石器時代 …… 27
　3．縄文時代 …… 30
　4．近世 …… 77
Ⅴ　第2・3地点の遺構と遺物 …… 161
　1．概要 …… 161
　2．旧石器時代 …… 168
　3．縄文時代 …… 180
　4．近世 …… 191
Ⅵ　第4・6地点の遺構と遺物 …… 261
　1．概要 …… 261
　2．旧石器時代 …… 264
　3．縄文時代 …… 270
　4．弥生時代 …… 306
　5．近世 …… 322
Ⅶ　第8地点の遺構と遺物 …… 383
　1．概要 …… 383
　2．旧石器時代 …… 385
　3．縄文時代 …… 386
　4．近世 …… 393
Ⅷ　第9地点の遺構と遺物 …… 405
　1．概要 …… 405
　2．旧石器時代 …… 405
　3．縄文時代 …… 406
　4．近世 …… 413
Ⅸ　第10地点の遺構と遺物 …… 421
　1．概要 …… 421
　2．旧石器時代 …… 421
　3．縄文時代 …… 441
　4．近世 …… 455
Ⅹ　第11地点の遺構と遺物 …… 458
　1．概要 …… 458
　2．縄文時代 …… 458
　3．近世 …… 464
Ⅺ　調査のまとめ …… 468
　1．旧石器時代 …… 468
　2．縄文時代 …… 474
　3．弥生時代 …… 484
　4．近世 …… 488
引用・参考文献
写真図版

挿 図 目 次

〈第８地点〉
第284図　第８地点全体図……383
第285図　第８地点旧石器調査区……383
第286図　第８－１号石器集中……384
第287図　第８－１号石器集中・出土石器……385
第288図　第８－１号住居跡（１）……387
第289図　第８－１号住居跡（２）……388
第290図　第８－１号住居跡遺物出土状況……388
第291図　第８－１号住居跡出土遺物……390
第292図　土壙……391
第293図　土壙出土遺物……391
第294図　グリッド出土遺物……392
第295図　第８－１号掘立柱建物跡……393
第296図　土壙（１）……395
第297図　土壙（２）……397
第298図　井戸跡……398
第299図　土壙・井戸跡出土遺物……398
第300図　溝跡……401
第301図　溝跡・グリッド出土遺物……402
第302図　ピット……404
〈第９地点〉
第303図　第９地点全体図……405
第304図　第９地点旧石器調査区……405
第305図　グリッド出土石器……405
第306図　第９－１号住居跡出土遺物……406
第307図　第９－１号住居跡……406
第308図　第９－２号住居跡……407
第309図　第９－２号住居跡出土遺物……408
第310図　土壙……409
第311図　土壙出土遺物……410
第312図　グリッド出土遺物……412
第313図　土壙（１）……415
第314図　土壙（２）……416
第315図　土壙（３）……417
第316図　土壙（４）……418
第317図　溝跡……419
第318図　ピット……420
〈第10地点〉
第319図　第10地点全体図……421
第320図　第10地点旧石器調査区……422
第321図　旧石器時代全体図……422
第322図　第10－１号石器集中（１）……424
第323図　第10－１号石器集中（２）……425
第324図　第10－１号石器集中出土遺物（１）……426
第325図　第10－１号石器集中出土遺物（２）……427
第326図　第10－１号石器集中出土遺物（３）……428
第327図　第10－１号石器集中出土遺物（４）……429
第328図　第10－１号石器集中出土遺物（５）……430
第329図　第10－１号石器集中出土遺物（６）……431
第330図　第10－２号石器集中（１）……432
第331図　第10－２号石器集中（２）……433
第332図　第10－２号石器集中出土遺物……434
第333図　第10－３号石器集中（１）……435
第334図　第10－３号石器集中（２）……436
第335図　第10－３号石器集中出土遺物……437
第336図　第10－４号石器集中……438
第337図　グリッド出土石器……439
第338図　第10－１号住居跡……442
第339図　第10－２号住居跡……443
第340図　第10－２号住居跡出土遺物……443
第341図　第10－３号住居跡……444
第342図　第10－３号住居跡出土遺物……445
第343図　第10－４号住居跡……445
第344図　土壙（１）……447

第345図　土壙（2）……448
第346図　土壙（3）……449
第347図　土壙出土遺物……449
第348図　炉穴　……452
第349図　グリッド出土遺物（1）　……453
第350図　グリッド出土遺物（2）　……454
第351図　土壙（1）……455
第352図　土壙（2）……456
第353図　土壙・グリッド出土遺物　……456
第354図　ピット　……457
〈第11地点〉
第355図　第11地点全体図……458
第356図　土壙（1）……459
第357図　土壙（2）……460
第358図　土壙出土遺物（1）　……462
第359図　土壙出土遺物（2）　……463
第360図　グリッド出土遺物……463
第361図　土壙　……464
第362図　グリッド出土遺物　……465
第363図　大木戸遺跡出土旧石器　……469
第364図　土層断面図……472
第365図　土層断面と石器出土ヒストグラム　472
第366図　大木戸遺跡遺構出土土器　……475
第367図　周辺の遺跡遺構出土土器（1）　…476
第368図　周辺の遺跡遺構出土土器（2）　…477
第369図　大木戸遺跡縄文時代遺構分布図（1）
……482
第370図　大木戸遺跡縄文時代遺構分布図（2）
……483
第371図　大木戸遺跡出土弥生土器　……486
第372図　大木戸遺跡近世遺構分布図　……489

表 目 次

第１表　発掘調査・整理報告書作成工程表　… 4
第２表　周辺の遺跡一覧……13
〈第１・５・７地点〉
第３表　グリッド出土石器観察表　……29
第４表　出土石器観察表……76
第５表　掘立柱建物跡出土遺物観察表……103
第６表　土壙・井戸跡出土遺物観察表……117
第７表　溝跡出土遺物観察表　……143
第８表　ピット出土遺物観察表　……151
第９表　ピット計測表　……152
第10表　グリッド出土遺物観察表　……159
〈第２・３地点〉
第11表　第３－１号石器集中・出土石器観察表
……179
第12表　出土石器観察表　……190
第13表　掘立柱建物跡出土遺物観察表……193
第14表　土壙・井戸跡出土遺物観察表……229
第15表　溝跡出土遺物観察表　……249
第16表　ピット計測表　……251
第17表　グリッド出土遺物観察表　……259
〈第４・６地点〉
第18表　第４－１号石器集中・出土石器観察表
……269
第19表　出土石器観察表　……305
第20表　第４－２号住居跡出土遺物観察表
……313
第21表　第４－５号住居跡出土遺物観察表
……316
第22表　第４－６号住居跡出土遺物観察表
……317
第23表　第４－10号住居跡出土遺物観察表
……320
第24表　グリッド出土遺物観察表　……321
第25表　掘立柱建物跡出土遺物観察表……341
第26表　土壙・井戸跡出土遺物観察表……356
第27表　溝跡出土遺物観察表　……369

第28表　ピット計測表 ……371
第29表　グリッド出土遺物観察表 ……381
〈第８地点〉
第30表　第８－１号石器集中・出土石器観察表 ……385
第31表　出土石器観察表 ……392
第32表　土壙・井戸跡出土遺物観察表……398
第33表　溝跡・グリッド出土遺物観察表……403
第34表　ピット計測表 ……403
〈第９地点〉
第35表　出土石器観察表 ……411
第36表　ピット計測表 ……420
〈第10地点〉
第37表　第10－１～４号石器集中・グリッド出土石器観察表 ……440
第38表　出土石器観察表 ……454
第39表　土壙・グリッド出土遺物観察表……456
第40表　ピット計測表 ……457
〈第11地点〉
第41表　グリッド出土遺物観察表 ……465
第42表　遺構番号新旧対照表 ……466

図 版 目 次

巻頭図版１　遺跡全景
巻頭図版２　第５・７地点　調査区全景
　第２・３・４地点　調査区全景
巻頭図版３　第10地点　調査区全景
　第４－２号住居跡出土土器
巻頭図版４　第５－３号住居跡出土土器
　第８－１号住居跡出土土器
　第11－６号土壙出土土器
　第４－２号住居跡出土土器
図版１　第１－１号住居跡
　第１－２号住居跡
　第１－２号住居跡　炉跡
図版２　第５－１号住居跡検出状況
　第５－１号住居跡
　第５－１号住居跡　埋甕検出状況
図版３　第５－１号住居跡　埋甕（１）
　第５－１号住居跡　埋甕（２）
　第５－１号住居跡　埋甕（３）
図版４　第５－２号住居跡
　第５－３号住居跡（１）
　第５－３号住居跡（２）
図版５　第５－３号住居跡　敷石検出状況
　第５－３号住居跡　埋甕（１）
　第５－３号住居跡　埋甕（２）
図版６　第５－３号住居跡　埋甕（３）
　第５－３号住居跡遺物出土状況（１）
　第５－３号住居跡遺物出土状況（２）
図版７　第５－５号住居跡
　第５－６号住居跡
　第１－45号土壙
図版８　第１－34号土壙
　第１－48・49・54・55号土壙
　第１－50・51・52号土壙
図版９　第５－44号土壙
　第１－20号集石土壙
　第１－４号土壙
図版10　第５－１号集石土壙検出状況
　第５－１号集石土壙
　第５－２号集石土壙
図版11　第５－３号集石土壙検出状況
　第５－３号集石土壙
　第５－４号集石土壙
図版12　第５－５号集石土壙
　第７－１号炉穴
　第１－１号炉穴
図版13　第１－２号炉穴

第１－１号掘立柱建物跡
第１－２号掘立柱建物跡
図版14　第１－３号掘立柱建物跡
第１－４号掘立柱建物跡
第１－５号掘立柱建物跡
図版15　第５－７～９号掘立柱建物跡群
第５－１～５号掘立柱建物跡群
第５－５号掘立柱建物跡
図版16　第７－１号掘立柱建物跡
第７－２号掘立柱建物跡
第７－３号掘立柱建物跡
図版17　第７－３号掘立柱建物跡　炉跡
第１-35号土壙
第１-28号土壙
図版18　第１-28号土壙遺物出土状況
第１－１号井戸跡
第１－１～９号溝跡
図版19　第１-10～12号溝跡
第１-13号溝跡
第７－８～15号溝跡
図版20　第７－２・３・11号溝跡
第１地点　Ｌ８・Ｃ９ピット１遺物出土状況
第７地点　Ｌ８・Ａ８ピット１遺物出土状況
図版21　第５－１号住居跡出土遺物
第５－３号住居跡出土遺物
第５－３号住居跡出土遺物
第５-44号土壙出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版22　グリッド出土遺物
Ｌ８・Ａ１ピット１出土遺物
Ｌ８・Ｃ９ピット１出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版23　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
第１-23号土壙出土遺物
第１-28号土壙出土遺物
第７－１号溝跡出土遺物
第７－１号溝跡出土遺物
第５－１号溝跡出土遺物
図版24　第５－１号溝跡出土遺物
第５－１号溝跡出土遺物
第５－１号溝跡出土遺物
第５－１号溝跡出土遺物
第７－３号溝跡出土遺物
第７-10号溝跡出土遺物
第７-10号溝跡出土遺物
第７-17号溝跡出土遺物
図版25　第７-17号溝跡出土遺物
第７-17号溝跡出土遺物
ピット出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版26　第１地点　旧石器
第１－１号住居跡出土遺物
第５－１・２・６号住居跡出土遺物
図版27　第５－３号住居跡出土遺物
第５－３号住居跡出土遺物
第５－３号住居跡出土遺物
図版28　土壙出土遺物
土壙出土遺物
第５-44号土壙出土遺物
図版29　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版30　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物

グリッド出土遺物
図版31　グリッド出土遺物
掘立柱建物跡・土壙出土遺物
土壙・井戸跡出土遺物
図版32　溝跡出土遺物
溝跡出土遺物
溝跡出土遺物
図版33　溝跡・ピット出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版34　第３－１号石器集中遺物出土状況
第３地点　土層断面
第３地点　調査区北西側
図版35　第３－１号住居跡
第３－２号住居跡
第３－３号住居跡
図版36　第３－３号住居跡遺物出土状況
第２-18号土壙
第２-79号集石土壙（１）
図版37　第２-79号集石土壙（２）
第３－１号集石土壙（１）
第３－１号集石土壙（２）
図版38　第３－１号炉穴
第３－１号炉穴遺物出土状況（１）
第３－１号炉穴遺物出土状況（２）
図版39　第２－１・２号掘立柱建物跡・柵列
第２－１・２号掘立柱建物跡
第２－４号溝跡
図版40　第２－２号溝跡
第２地点　調査区南側土壙群
第３－１号炉穴出土遺物
図版41　第２－１号掘立柱建物跡出土遺物
第２-24号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
図版42　第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-71号土壙出土遺物
第２-87号土壙出土遺物
第２-90号土壙出土遺物
図版43　第２-90号土壙出土遺物
第２－４号溝跡出土遺物
第２－４号溝跡出土遺物
第２－４号溝跡出土遺物
第２－５号溝跡出土遺物
第２－５号溝跡出土遺物
第２-15号跡溝出土遺物
グリッド出土遺物
図版44　第３－１号石器集中出土石器
第３－１号石器集中出土石器
第３－１号石器集中出土石器
図版45　第３－１号石器集中出土石器
第３－１号石器集中出土石器
第３－３号住居跡出土遺物
図版46　第２-18・３－８号土壙出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版47　掘立柱建物跡・土壙出土遺物
土壙出土遺物
土壙出土遺物
図版48　土壙出土遺物
土壙出土遺物
土壙出土遺物
図版49　土壙・グリッド出土遺物
土壙出土遺物
井戸跡出土遺物
図版50　溝跡出土遺物

溝跡出土遺物
溝跡出土遺物
図版51　溝跡出土遺物
溝跡出土遺物
グリッド出土遺物
図版52　第４－１号石器集中
第６－１号住居跡
第６－１号住居跡　炉跡
図版53　第６－２号住居跡　炉跡
第６－３号住居跡　炉跡
第４-11号住居跡　炉跡断面
図版54　第４-12号住居跡
第４-13号住居跡
第４-14号住居跡
図版55　第４-15号住居跡
第４－３号土壙
第４－３号土壙遺物出土状況
図版56　第４－５号土壙
第４-10号土壙遺物出土状況
第４-31号土壙
図版57　第４-31号土壙遺物出土状況（１）
第４-31号土壙遺物出土状況（２）
第４-37号土壙遺物出土状況（１）
図版58　第４-37号土壙遺物出土状況（２）
第４-38号土壙
第４-15号集石土壙
図版59　第４－１号住居跡（１）
第４－１号住居跡（２）
第４－２号住居跡
図版60　第４－２号住居跡遺物出土状況（１）
第４－２号住居跡遺物出土状況（２）
第４－２号住居跡遺物出土状況（３）（貯蔵穴）
図版61　第４－２号住居跡遺物出土状況（４）
第４－２号住居跡遺物出土状況（５）
第４－２号住居遺物出土状況（６）
図版62　第４－２号住居跡遺物出土状況（７）
第４－２号住居跡遺物出土状況（８）
第４－２号住居跡遺物出土状況（９）
図版63　第４－２号住居跡遺物出土状況（10）
第４－３号住居跡
第４－４号住居跡
図版64　第４－５号住居跡
第４－６号住居跡
第４－７号住居跡
図版65　第４－９号住居跡
第４-10号住居跡
第４地点　掘立柱建物跡群全景
図版66　第４－１号掘立柱建物跡
第４－２～７号掘立柱建物跡群（１）
第４－２～７号掘立柱建物跡群（２）
図版67　第６－１・２号掘立柱建物跡
第４－１号溝跡
第６－３～６号溝跡
図版68　第４－３号土壙出土遺物
第４-10号土壙出土遺物
第４-31号土壙出土遺物
グリッド出土遺物
第４-37号土壙出土遺物
第４-37号土壙出土遺物
図版69　第４-19号土壙出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
図版70　第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
図版71　第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物

第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
図版72　第４－２号住居跡出土遺物
第４－２号住居跡出土遺物
第４－５号住居跡出土遺物
第４－５号住居跡出土遺物
第４－５号住居跡出土遺物
第４－５号住居跡出土遺物
図版73　第４－５号住居跡出土遺物
第４－６号住居跡出土遺物
第４－１号掘立柱建物跡出土遺物
第４－３号掘立柱建物跡出土遺物
第４－３号掘立柱建物跡出土遺物
第４－３号掘立柱建物跡出土遺物
図版74　第４-12号土壙出土遺物
第４－１号溝跡出土遺物
第６－３～６号溝跡出土遺物
第４－４号溝跡出土遺物
第６－４～６号溝跡出土遺物
第４－５号溝跡出土遺物
第４－５号溝跡出土遺物
第４－５号溝跡出土遺物
図版75　第４－１号石器集中出土石器
グリッド出土石器
第４-12号住居跡出土遺物
図版76　第４-13・14・15号住居跡出土遺物
土壙出土遺物
土壙出土遺物
図版77　土壙・集石土壙出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版78　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版79　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版80　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版81　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版82　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版83　掘立柱建物跡・土壙・井戸跡出土遺物
土壙・井戸跡出土遺物
溝跡出土遺物
図版84　溝跡出土遺物
溝跡出土遺物
溝跡出土遺物
図版85　溝跡出土遺物
グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版86　第８地点　調査区全景
第８地点　調査区全景
第８－１号石器集中
図版87　第８地点　旧石器出土状況
第８－１号住居跡
第８－１号住居跡遺物出土状況（１）
図版88　第８－１号住居跡遺物出土状況（２）
第８-11号土壙遺物出土状況（１）
第８-11号土壙遺物出土状況（２）
図版89　第８－１号掘立柱建物跡
第８－１号土壙
第８-12・13号土壙
図版90　第８－１号井戸跡
第８－１号井戸跡断面
第８－１号井戸跡遺物出土状況
図版91　第８－１号住居跡出土遺物
第８－１号住居跡出土遺物

第８－１号住居跡出土遺物
第８－１号住居跡出土遺物
第８－１号井戸跡出土遺物
第８－２号溝跡出土遺物
図版92　第８－２号溝跡出土遺物
第８－２号溝跡出土遺物
第８－６号溝跡出土遺物
第８－１号石器集中出土石器
第８－１号住居跡出土遺物
図版93　グリッド出土遺物
溝跡・グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版94　第９－１号住居跡　炉跡（１）
第９－１号住居跡　炉跡（２）
第９－２号住居跡　埋甕（１）
図版95　第９－２号住居跡　埋甕（２）
第９－２号住居跡　炉跡検出状況
第９-29～31・33～35・39・40号土壙
図版96　第９－２号住居跡出土遺物
グリッド出土石器
土壙出土遺物
グリッド出土遺物
図版97　第10地点　調査区全景
第10－１号石器集中（１）
第10－１号石器集中（２）
図版98　第10－２号石器集中
第10－３号石器集中
第10－１号住居跡
図版99　第10－１号住居跡　炉跡断面
第10－２号住居跡
第10－２号住居跡　炉跡断面
図版100　第10－３号住居跡
第10－３号住居跡・土壙群
第10－４号住居跡
図版101　第10－１号埋甕検出状況
第10－１号埋甕半截状況（１）
第10－１号埋甕半截状況（２）
図版102　第10－１号炉穴断面
第10－４号炉穴断面
第10－４号炉穴
図版103　グリッド出土遺物
第10－３号住居跡出土遺物
第10－１号石器集中出土石器
第10－１号石器集中出土石器
図版104　第10－１号石器集中出土石器
第10－１号石器集中出土石器
第10－２号石器集中出土石器
図版105　第10－３号石器集中出土石器
グリッド出土石器
第10－２号住居跡・土壙出土遺物
図版106　グリッド出土遺物
グリッド出土遺物
図版107　第11地点　土壙群完掘状況
第11－１号土壙遺物出土状況
第11－６号土壙遺物出土状況
図版108　第11－６号土壙出土遺物
第11-15号土壙出土遺物
第11－６号土壙出土遺物
第11-15号土壙出土遺物
第11－６号土壙出土遺物
グリッド出土遺物
図版109　土壙出土遺物
第10・11地点　出土遺物
図版110　第５－３号住居跡出土遺物展開写真
第８－１号住居跡出土遺物展開写真
第11－６号土壙出土遺物展開写真

Ⅶ　第８地点の遺構と遺物

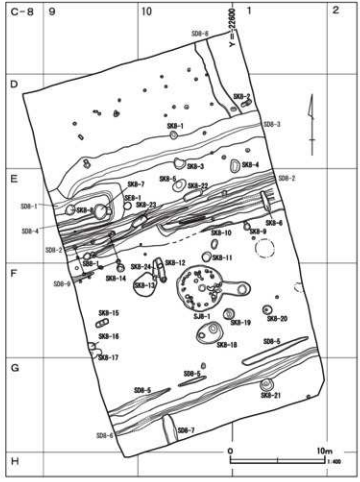
１．概　要

第８地点は遺跡範囲の南東部、一般国道16号バイパスの南側に位置する。

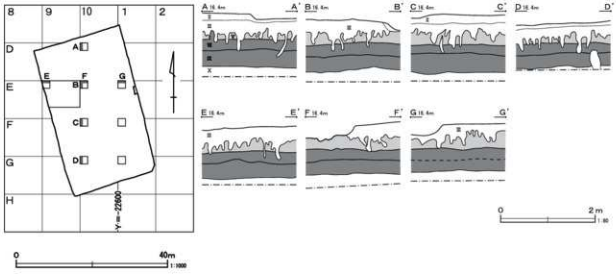
旧石器時代は、２×２ｍの小グリッドを８箇所設定し調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかったが、第８－３号溝跡の精査中に覆土からチャート製の剝片が何点か検出され、Ｎ８・Ｅ９グリッドに10×７ｍの範囲の調査区を設定した。その結果、石器集中１箇所が検出された。

縄文時代は、中期末葉から後期初頭の柄鏡形住居跡１軒と土壙２基が検出された。住居跡からほぼ完形の深鉢形土器と小形の両耳壺土器が出土した。

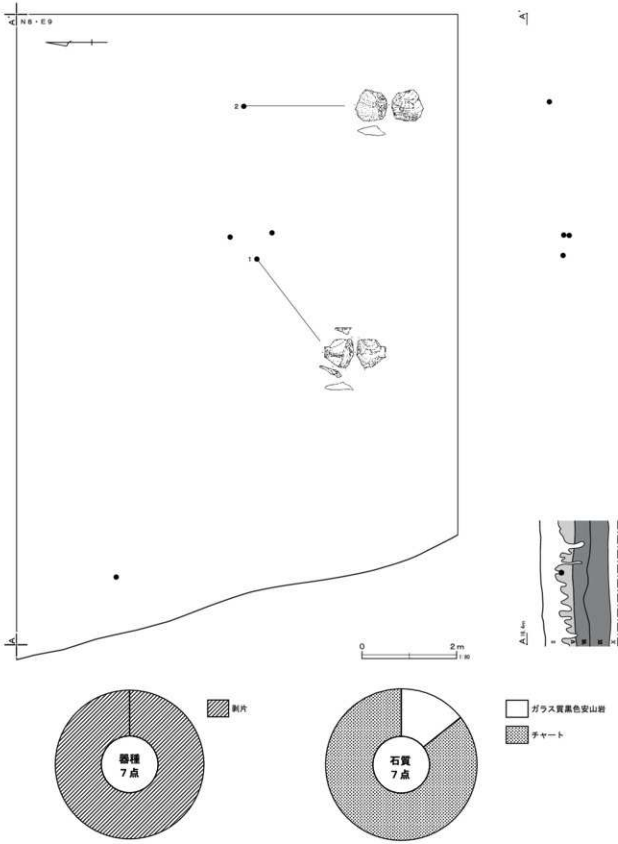
近世は掘立柱建物跡１棟と土壙22基、井戸跡１基、溝跡８条が検出された。



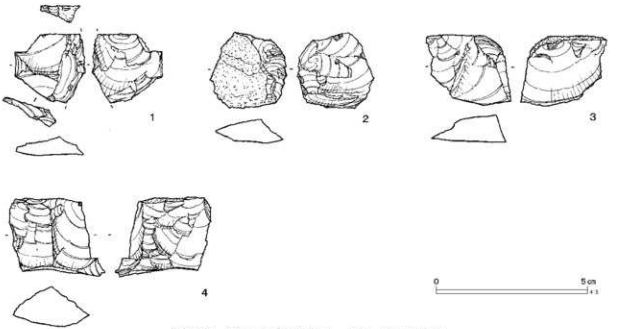
第284図　第８地点全体図



第285図　第８地点旧石器調査区



第286図　第８-１号石器集中



第287図　第８－１号石器集中・グリッド出土石器

２．旧石器時代

旧石器時時代の調査は、10mグリッドの北西杭を基準に２×２mの小グリッドを８箇所設定し、ローム層の掘り下げを行った。掘り下げグリッドから遺構・遺物は検出されなかった。しかし、第８－３号溝跡を精査中に、覆土からチャート製の剝片が数点出土したので、Ｎ８・Ｅ９グリッドに10×７mの調査区を設定した。その結果、石器集中１箇所が検出された。

ローム層の堆積状況は、南北・東西ラインとの殆ど水平堆積である。第Ⅲ層のソフトロームは第Ⅴ層第１暗色帯中まで達しており、第Ⅳ層は断面では確認できなかった。第２暗色帯は調査区西側で不明瞭であるが、殆どのグリッドは分離可能であった。

第８－１号石器集中（第286・287図）

Ｎ８・Ｅ９グリッドに位置する。遺物の分布範囲は南北約３m、東西約８mの範囲に５点が散漫に分布している。出土遺物はチャートとガラス質黒色安山岩製の剝片である。出土層位はハードローム層（第Ⅳ層）中であるが、定型的石器が無いため所属時期は不明である。

出土石器は１と２は、第８－１号石器集中から出土した。２点ともチャート製の剝片で二次加工は施されていない。

２と３は、第８－３号溝跡の精査中に検出された。１・２同様チャート製の剝片で二次加工は施されていない。

第30表　第８－１号石器集中・グリッド出土石器観察表

No.	遺構名	グリッド	遺物番号	北－南(m)	西－東(m)	標高(m)	層位	器種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	図版No.
5	８－１石器集中	Ｍ８・Ｅ９	5	3.58	8.60	16.04	Ⅲ	剝片	チャート	2.50	2.55	1.05	5.30	287－1
2	８－１石器集中	Ｍ８・Ｅ９	2	3.78	6.17	15.83	Ⅲ	剝片	チャート	2.30	2.35	0.75	3.90	287－2
1	８－１石器集中	Ｍ８・Ｅ９	1	1.58	1.20	15.86	Ⅲ	剝片	ガラス質黒色安山岩	(1.00)	2.40	1.00	2.60	
3	８－１石器集中	Ｍ８・Ｅ９	3	3.34	6.50	15.81	Ⅲ	剝片	チャート	(2.00)	(1.30)	0.80	1.90	
4	８－１石器集中	Ｍ８・Ｅ９	4	3.98	6.50	15.74	Ⅲ	剝片	チャート	(1.40)	2.70	0.70	2.20	
6	ＳＤ８－１	Ｍ８・Ｅ９	001					剝片	チャート	2.30	2.85	1.30	7.00	287－3
7	ＳＤ８－１	Ｍ８・Ｅ９	001					剝片	チャート	2.65	3.15	1.20	10.00	287－4

3．縄文時代

第８地点からは、縄文時代中期末葉から後期初頭の住居跡１軒と、土壙２基が検出された。調査区は遺跡の南端に位置し、住居跡も集落の南端に位置していたものと考えられる。

（1）住居跡

第８－１号住居跡（第288～290図、第291図）

Ｎ８・Ｆ10、Ｎ９・Ｆ１グリッドに位置する。縄文時代の土壙である第８－11号土壙は、北側に隣接して検出されている。平面形は柄鏡形で、東方向に柄部が張り出している。主体部はほぼ円形である。炉跡と柄部を基準とした主軸方向は、Ｎ－87°－Ｗをとる。主体部と柄部を含めた長径7.80m、短径4.90m、深さ0.25mである。柄部は長さ2.94m、幅1.50m、深さ0.22mである。

炉跡は主体部の中央部で検出された。平面形はほぼ円形で、長径0.78m、短径0.72m、深さ0.25mである。

ピットは、35本が検出された。壁に沿って巡るように配置されている。ピットは、重複や密集して検出されるため、建て直しが行われていたと考えられる。Ｐ23～28は入り口の対ピットに関連するピットであると考えられる。Ｐ35は柄部の先端に位置する、土壙状のピットである。

また、埋甕内からは第291図１の深鉢形土器がほぼ完形で検出された（第289図）。本来は住居跡の主軸上に位置したと考えられ、それからすれば、建て替え前の主軸方向は、北寄りであったと推定される。埋甕の長径0.48m、短径0.39m、深さ0.31mである。

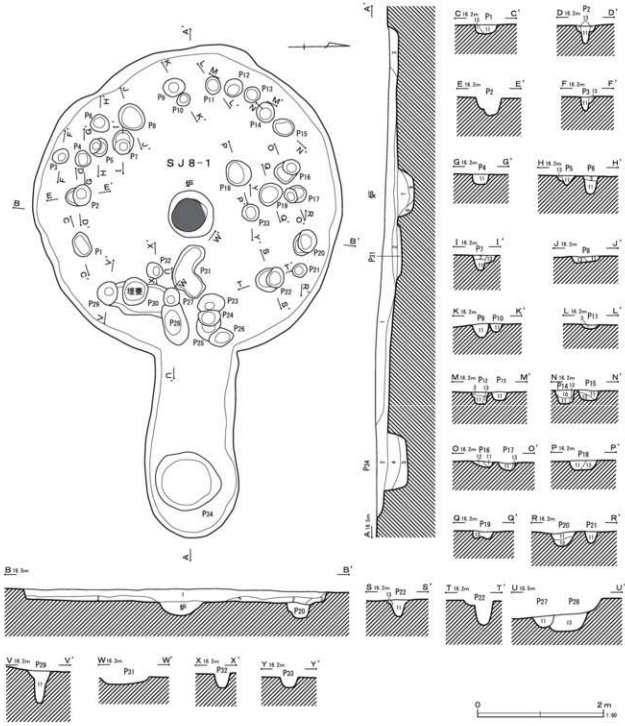
ピットの深さはＰ１＝0.14m、Ｐ２＝0.27m、Ｐ３＝0.22m、Ｐ４＝0.16m、Ｐ５＝0.15m、Ｐ６＝0.28m、Ｐ７＝0.24m、Ｐ８＝0.10m、Ｐ９＝0.20m、Ｐ10＝0.13m、Ｐ11＝0.06m、Ｐ12＝0.18m、Ｐ13＝0.14m、Ｐ14＝0.21m、Ｐ15＝0.15m、Ｐ16＝0.08m、Ｐ17＝0.09m、Ｐ18＝0.15m、Ｐ19＝0.12m、Ｐ20＝0.21m、Ｐ21＝0.18m、Ｐ22＝0.38m、Ｐ23＝0.23m、Ｐ24＝0.23m、Ｐ25＝0.21m、Ｐ26＝0.19m、Ｐ27＝0.17m、Ｐ28＝0.26m、Ｐ29＝0.51m、Ｐ30＝0.08m、Ｐ31＝0.12m、Ｐ32＝0.22m、Ｐ33＝0.16m、Ｐ34＝0.48mである。

第291図１～14は、住居跡から出土した遺物である。遺物は住居跡内から散漫に出土している（第290図）。柄部の付け根部分からは第291図２の土器が出土している。

第291図１は、ほぼ完形で出土した土器である。口縁部は４単位の波状口縁で、正面にはやや大きめの把手が貼付されると考えられる。口縁部は有段状に盛り上がっており、２列の刺突文が巡らされている。正面部分には段に沿って沈線が施文され、把手部分へと続いている。口縁部と胴部文様から、吉井城山類や岩坪類の影響を受けた土器と考えられる。胴上部は楕円形状などの区画文を４単位と、他の文様を１単位の５単位施文している。胴下部には逆Ｖ字状の文様を明確なもので４単位施文される。文様を描写する沈線は明確ではなく、下書き状の細い沈線文様も認められる。地文は胴上部の区画文内と胴下部の逆Ｖ字状文内に、撚りのゆるい単節ＬＲの縄文を文様の形状に合わせて充塡している。口径15cm、底径5.3cmである。

２は形状を復元することができた壺形土器で、狭い無文の口縁部を持つもので、胴部とは断面三角の微隆起状の隆帯で区画している。隆帯の上には浅い沈線文を沿わしている。隆帯には部分的に舌状に突起を作り出している。胴部は地文のみを施文している。地文は、単節ＬＲの縄文のみを縦から斜め方向に施文している。推定される口径24cm、底径８cmである。

３は、形状を復元することができた小型の両耳壺形土器である。無文の口縁部とは微隆起状の隆帯で胴部と区画している。隆帯から胴上部にかけて、把手を橋状に２ヶ所貼付している。把手の上



ＳＪ８－１

1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物粒子・焼土粒子若干
2　褐色土　ロームブロック・炭化物粒子少量
　　遺物の多くは1層と2層の境界から出土
3　黄褐色土　ロームブロック多量
4　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子微量
5　暗褐色土　ローム粒子微量　ロームブロック少量
6　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物粒子微量

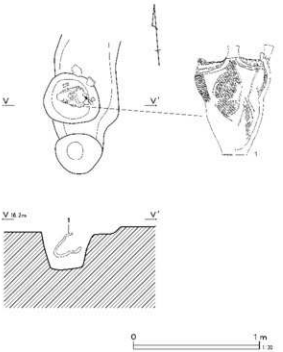
炉

7　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子少量
8　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多量　底面・側面は被熱による硬化顕著
9　黄褐色土　ロームブロック少量

ピット

10　暗褐色土　焼土粒子多量　ローム粒子少量
11　暗褐色土　ローム粒子少量
12　暗褐色土　焼土粒子少量　ローム粒子微量
13　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
14　黒褐色土　ローム粒子・炭化物粒子微量　焼土粒子多量
15　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子微量
16　暗褐色土　ローム粒子少量
17　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子微量

第288図　第８-１号住居跡（１）



第289図　第８－１号住居跡（２）

面にも地文を施文している。胴部には地文のみを施文している。地文は単節ＲＬの縄文を、胴部には斜め方向に施文している。口径は11cm、推定される底径は５cmである。

４は甕形土器を模した小型の土器で、注口土器であった可能性が高い。土器の両側には、紐などを通したと考えられる把手の一部分が、上部側のみわずかに残存している。図上では裏面にあたる部分に注口が存在していたと考えられる。傾斜する無文の口縁部は幅が狭く、胴部とは微隆起状の隆帯で区画している。図上の正面には、口縁部区画の隆帯上に円形の突起を施文し、胴部に隆帯を垂下させている。胴部には沈線文が施文されるが、欠損部分が多く、文様の全容は不明で、単位文も不明である。底部には低い台が付けられている。口径4.5cm、台の底径４cmである。

５～８は深鉢形土器の破片である。５は口縁部で、胴部とは沈線文を１条巡らして区画している。口縁部分には、磨消されているが単節ＬＲの縄文を横方向に施文されている。６～８は胴部の破片である。６は文様を沈線で施文するものである。７・８は同一個体の土器で、間を磨り消す２本１組の微隆起線状の隆帯で、文様を施文するものである。地文として、単節ＬＲの縄文を施文している。

９～11は両耳壺などの壺形土器の破片である。９は頸部から胴部の破片である。口縁部と胴部は微隆起線状の隆帯で区画されている。胴部には地文が施文されている。地文は単節ＬＲの縄文である。10は口縁部から頸部の破片で、口縁は無文で口縁部と胴部は断面三角形の、微隆起線状の隆帯で区画している。11は胴部の破片で、地文のみが施文されている。地文は撚りのゆるい単節ＬＲの縄文で、横方向に施文している。

12～14は出土した石器や石製品である。

12は縁辺に、刃潰し状の痕跡が認められる剝片で、スクレイパーとして使用されていたと考えられる。

13は石皿の破片で、表面は使用のためやや窪み、器面は滑らかになっている。裏面には漏斗状の凹部が複数認められる。

14は軽石製で、板状に加工が施されるもので、石製品と考えられるものである。

遺物の時期は、出土した土器から中期末葉から後期初頭で、加曽利ＥⅣ式の新段階であると考えられる。

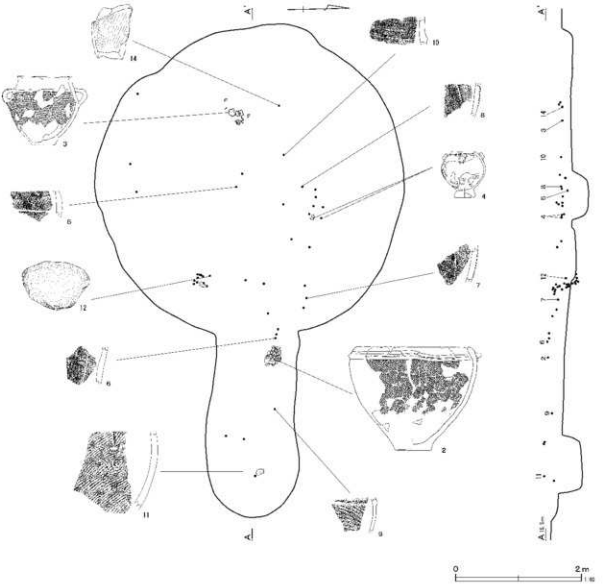
（２）土壙

第８－５号土壙（第292図・第293図１）

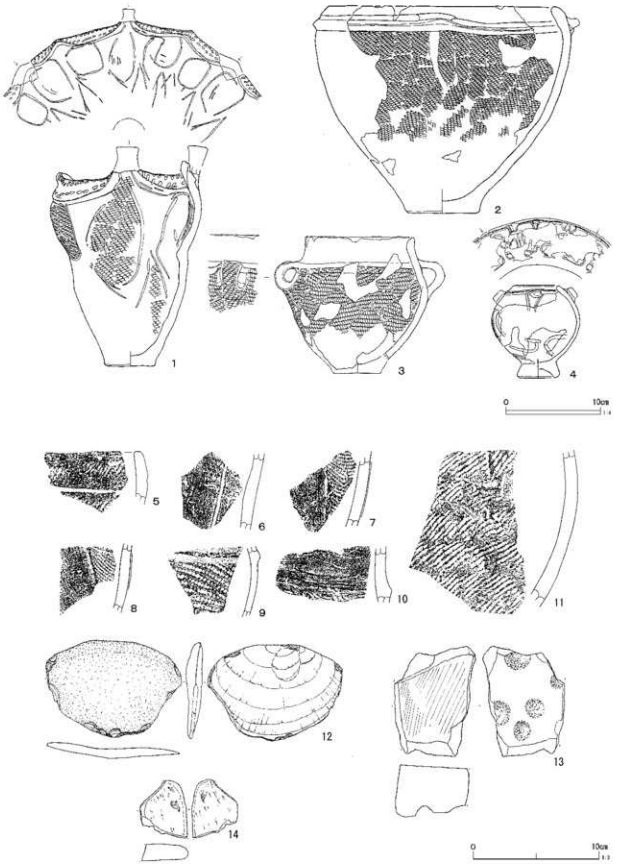
Ｎ８・Ｅ10グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.55m、短径1.05m、深さ0.62mである。

第293図１は、出土した深鉢形土器の胴部破片である。微隆起状の隆帯を施文する岩坪類の土器で、地文は単節ＬＲの縄文を、縦方向に施文している。

遺物の時期は中期末葉から後期初頭で、加曽利ＥⅣ式である。



第290図　第８－１号住居跡遺物出土状況



第291図　第８－１号住居跡出土遺物

第８-11号土壙（第292図・第293図２～７）

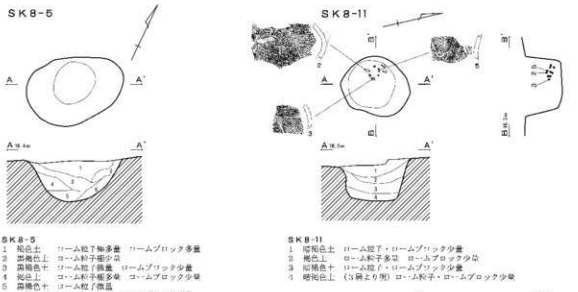
Ｎ８・Ｅ10グリッドに位置する。第８-１号住居跡の南側に隣接して検出された。平面形はほぼ円形で、長径1.10m、短径0.97m、深さ0.67mである。

第293図２～７は出土した土器で、主に３層内から検出されている（第292図）。

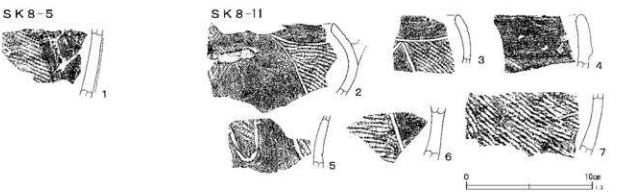
２～６は深鉢形土器で、２～４は口縁部、５・６は胴部の破片である。４以外は文様を沈線文で施文するものである。２・３は同一個体と考えられる土器で、波状口縁を持ち波頂部には橋状把手などが貼付されるものである。狭い無文の口縁部と胴部は沈線によって区画される。胴上部には沈線によって、Ｖ字状文が施文されると考えられ、文様内には単節ＬＲの縄文を充塡している。５は胴部くびれ付近で、沈線による波状文の波底部分が認められる。６は胴下部で、逆Ｖ字状文の一部が残存している。地文はいずれも単節ＬＲの縄文である。４は岩坪類の口縁部と考えられる。

７は両耳壺などの壺形土器の胴部破片である。地文のみが施文される。地文は撚りのゆるい単節ＬＲの縄文である。

遺物の時期は中期末葉から後期初頭で、加曽利ＥⅣ式である。



第292図　土壙



第293図　土壙出土遺物

（3）グリッド出土遺物

出土土器（第294図）

第Ⅲ群土器（第294図１～９）

加曽利ＥⅣ式で、中期末葉から後期初頭と考えられる土器群である。

１～７は深鉢形土器の破片である。１・２は口縁部から胴部の破片である。１は口縁部直下に微隆起状の隆帯を巡らし、隆帯上には部分的に舌状の突起を貼付している。胴部には２本１組で文様が施文されている。地文は単節ＬＲの縄文である。２は口縁部に幅が狭い無文帯を持つもので、胴部とは微隆起状の隆帯で区画している。地文は単節ＲＬの縄文である。３～７は胴部の破片で、３は沈線文で、４・５は微隆起状の隆帯で文様を施文している。地文として３は単節ＬＲ、４・５は単節ＲＬの縄文である。７・８は地文のみ施文されるもので、撚りのゆるい単節ＬＲの縄文を地文としている。

８・９は両耳壺などの壺形土器の破片で、無文の口縁部と胴部は微隆起状の隆帯によって区画されている。地文として８は撚りのゆるい単節ＬＲ、９は単節ＲＬを施文している。

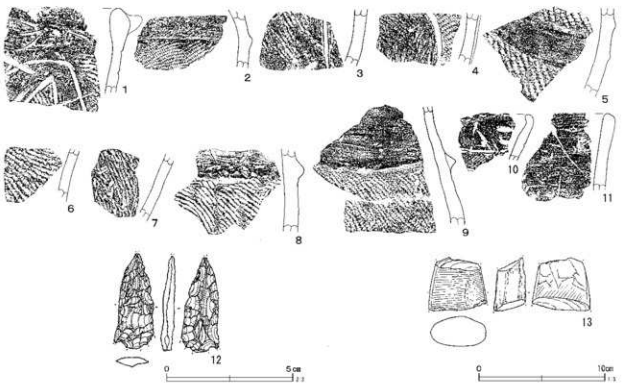
第Ⅳ群土器（第294図10・11）

称名寺式土器で、後期初頭であると考えられる。10・11は深鉢形土器の口縁部の破片で、10は地文として単節ＬＲの縄文を施文している。

出土石器（第294図12・13）

12は有茎の石鏃である。基部の先端と、逆刺の先端は欠損する。

13は磨製石斧の基部側の破片である。



第294図　グリッド出土遺物

第31表　出土石器観察表

図版No.	出土遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第291図12	第８－１号住居跡	剝片	砂岩	7.60	10.60	0.80	107.7	
第291図13	第８－１号住居跡	石皿	安山岩	(8.70)	(6.45)	(4.38)	268.9	
第291図14	第８－１号住居跡	軽石	軽石	(4.60)	(3.65)	(1.39)	8.6	
第294図12	第８－３号溝跡	石鏃	チャート	(3.75)	1.55	0.50	2.8	
第294図13	第８－１号溝跡	磨製石斧	緑色岩	(4.20)	(4.60)	(2.55)	69.9	

４．近　世

（１）掘立柱建物跡

第８－１号掘立柱建物跡（第295図）

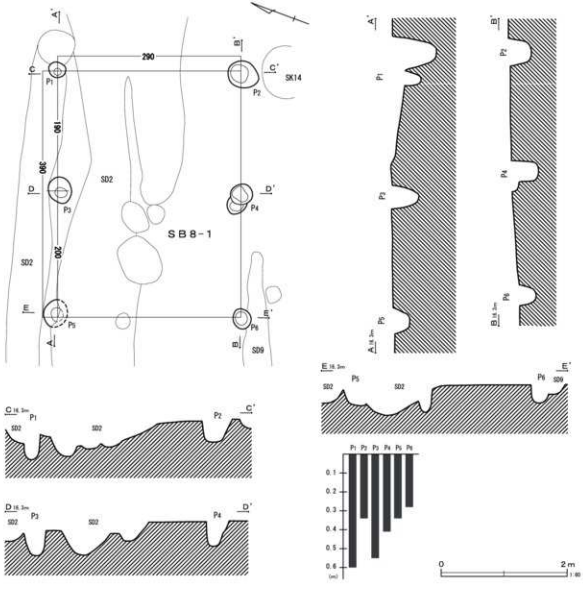
Ｎ８・Ｅ９、Ｆ９グリッドに位置する。第２・９号溝跡および幾つかのピットと重複するが、新旧関係については不明である。

母屋の規模は、桁行２間(3.9m)×梁行１間(2.9m)、面積は11.31㎡である。主軸方位はＮ-73°-Ｅを指す。

母屋の柱穴規模は、25×25㎝～41×51㎝で多くは円形または楕円形である。深さは25～45㎝である。

Ｐ４は、平面図では２つのピットが重複しているという表現をしているが、確証はない。

遺物は出土しなかった。



第295図　第８－１号掘立柱建物跡

（２）土壙

第８－１号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｄ10グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は0.86m、短径は0.68m、深さは0.32mである。長軸方位はＮ－15°－Ｗを指す。

遺物は第299図１の寛永通宝が出土した。

第８－２号土壙（第296図）

Ｎ９・Ｄ１グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈する。長径は1.19m、短径は0.43m、深さは0.24mである。長軸方位はＮ－68°－Ｅを指す。遺物は出土していない。

第８－３号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｄ10グリッドに位置する。北側は第８－３号溝跡にとって削平されている。平面形は円形を呈するものと思われる。径は1.21m、深さは0.33mである。遺物は出土していない。

第８－４号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｄ10、Ｅ10、Ｎ９・Ｄ１、Ｅ１グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.33m、短径は0.94m、深さは0.24mである。長軸方位はＮ－15°－Ｗを指す。

遺物は焙烙の破片が出土した。

第８－６号土壙（第296図）

Ｎ９・Ｅ１グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈する。長径は2.23m、短径は0.53m、深さは0.31mである。長軸方位はＮ－20°－Ｗを指す。遺物は出土していない。

第８－７号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｅ９グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.63m、短径は1.35m、深さは0.23mである。長軸方位はＮ－９°－Ｗを指す。

遺物は焙烙の破片が出土した。

第８－８号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｅ９グリッドに位置する。西側を第９－１号溝跡によって削平されている。平面形は円形と思われる。現況で径は1.18m、深さは0.21mである。遺物は出土していない。

第８－９号土壙（第296図）

Ｎ９・Ｅ１グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は0.70m、深さは0.15mである。遺物は出土していない。

第８－10号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｅ10グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.03m、短径は0.61m、深さは0.17mである。長軸方位はＮ－７°－Ｅを指す。遺物は出土していない。

第８－12号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｅ10、Ｆ10グリッドに位置する。第９－24号土壙と重複する。平面形は長方形を呈する。長径は2.65m、短径は0.64m、深さは0.14mである。長軸方位はＮ－16°－Ｗを指す。

遺物は焙烙の破片が出土した。

第８－14号土壙（第297図）

Ｎ８・Ｅ10、Ｆ10グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、南側が深くなっている。長径は0.83m、短径は0.78m、深さは0.17mである。長軸方位はＮ－13°－Ｅを指す。

遺物は肥前系の皿破片が出土した。

第８－13号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｆ９、Ｆ10グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は2.46m、短径は2.09m、深さは0.07mである。長軸方位はＮ－42°－Ｅを指す。

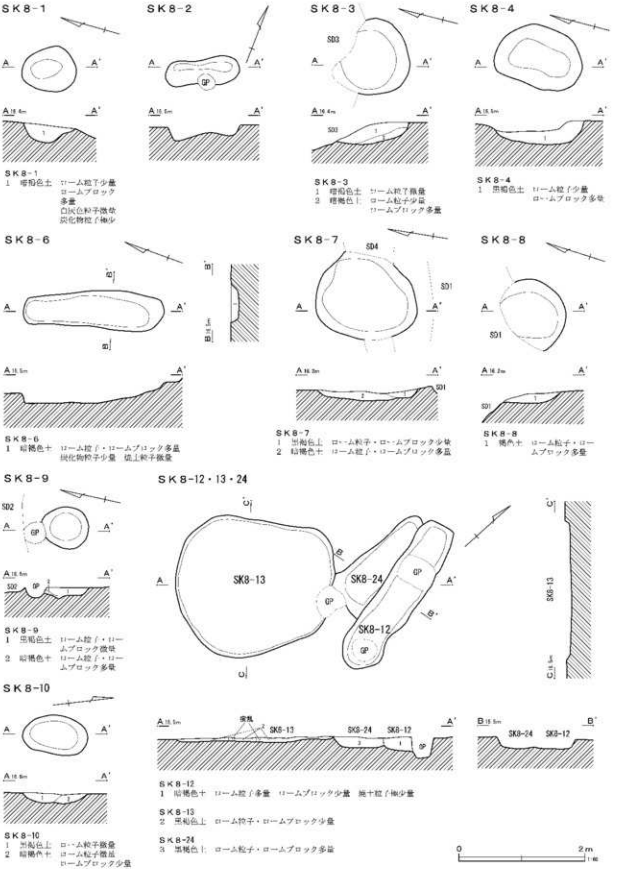
遺物は第299図13の寛永通宝が出土した。

第８－24号土壙（第296図）

Ｎ８・Ｆ９グリッドに位置する。第９－12号土壙と重複する。平面形は長方形を呈する。長径は1.83m、短径は0.70m、深さは0.18mである。長軸方位はＮ－６°－Ｗを指す。遺物は出土していない。

第８－15号土壙（第297図）

Ｎ８・Ｆ９グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、中央に円形に窪んでいる。長径は1.44m、短径は0.57m、深さは0.32mである。長軸方位はＮ－63°－Ｅを指す。


SK8-1
SK8-2
SK8-3
SK8-4
SK8-6
SK8-7
SK8-8
SK8-9
SK8-12・13・24
SK8-10
SK8-13
SK8-24
SK8-12
SK8-1
1 暗褐色土 ローム粒子少量
ロームブロック
多量
白灰色粒子微量
炭化物粒子極少
SK8-3
1 暗褐色土 ローム粒子微量
2 暗褐色土 ローム粒子少量
ロームブロック多量
SK8-4
1 黒褐色土 ローム粒子少量
ロームブロック多量
SK8-6
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
炭化物粒子少量 焼土粒子微量
SK8-7
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
SK8-8
1 褐色土 ローム粒子・ローム
ムブロック多量
SK8-9
1 黒褐色土 ローム粒子・ロー
ムブロック微量
2 暗褐色土 ローム粒子・ロー
ムブロック多量
SK8-10
1 黒褐色土 ローム粒子微量
2 暗褐色土 ローム粒子微量
ロームブロック少量
SK8-12
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量 焼土粒子極少量
SK8-13
2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
SK8-24
3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
0 2m

第296図　土壙（1）

遺物は焙烙の破片が出土した。

第８-16号土壙（第297図）

Ｎ８・Ｆ９グリッドに位置する。西側は調査区外となり、南側は第８-17号土壙によって切られているため、全体の形状は不明である。深さは0.33mである。遺物は出土していない。

第８-17号土壙（第297図）

Ｎ８・Ｆ９グリッドに位置する。西側は調査区外となるため全体の形状は不明であるが、楕円形になると思われる。深さは0.80mである。

遺物は第299図３のかわらけ、４の刀子の破片が出土した。

他に京焼風陶器の鉢破片、焙烙、かわらけの破片が出土している。

第８-18号土壙（第297図）

Ｎ８・Ｆ10グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈する。長径は2.80m、短径は2.12m、深さは0.28mである。長軸方位はN-72°-Eを指す。遺物は出土していない。

第８-19号土壙（第297図）

Ｎ８・Ｆ10グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、西側が深くなっている。径は1.15m、深さは0.37mである。遺物は出土していない。

第８-20号土壙（第297図）

Ｎ９・Ｆ１グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、中央にピットが伴う。径は1.00m、深さは0.50mである。遺物は出土していない。

第８-21号土壙（第297図）

Ｎ９・Ｇ１グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、北西側は深くなっている。径は1.38m、深さは0.46mである。遺物は出土していない。

第８-22号土壙（第297図）

Ｎ８・Ｅ10グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。長径は2.15m、短径は0.77m、深さは0.30mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は焙烙の破片が出土した。

第８-23号土壙（第297図）

Ｎ８・Ｅ９、Ｅ10グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。長径は1.74m、短径は0.72m、深さは0.19mである。長軸方位はN-53°-Eを指す。遺物は出土していない。

（３）井戸跡

第８-１号井戸跡（第298、299図）

Ｎ８・Ｅ９グリッドに位置する。平面形は径0.80mの円形を呈する。西側にグリッドを設定し、２段に分けて掘り下げたが底面までは確認できなかった。第５層上面から遺物がまとまって出土した。

遺物は第299図５～８が出土した。５は肥前系の碗で口縁部を欠く、６は焙烙の破片、７はかわらけ、８は鉄器である。

（４）溝跡

第８地点で検出された溝跡は９条である。本地点の溝跡については、３つの特徴が挙げられる。

①：９条の内５条（第８-２～６号溝跡）は西南西から東北東（方位はN-68°-E～N-74°-E）に走る。

②：これらに直行するように北北西から南南東（方位はN-14°-W～N-25°-W）に走る溝跡が２条存在する（第８-７・８号溝跡）。

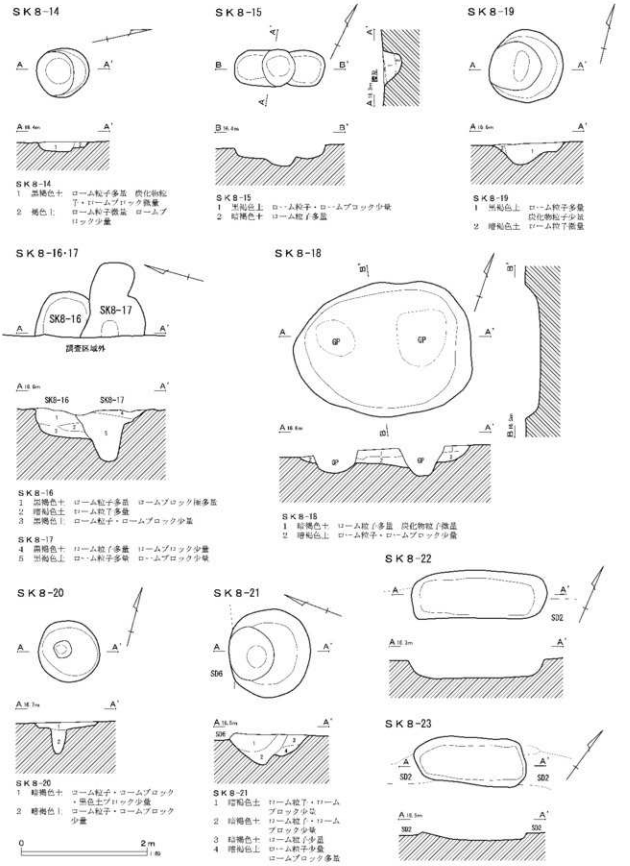
③：以上のほかに、「コ」字状を呈する溝跡が存在する。そして、この３辺の内東西方向に走る部分は、①の方位に近く（N-75°-E）、残りの１辺は②の方位に近い（N-12°-W）。

第８-１号溝跡（第300図、第301図１～３）

Ｎ８・Ｅ９グリッドに位置する。

西側は調査区外に延びている。検出部分では、概ね「コ」字状である。

第８-２・３号溝跡、第８-８号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。第８-３号溝跡と重複しているのか、合流しているのか判断できなかっ



SK8-14
1　黒褐色土　ローム粒子多量　炭化物粒子・ロームブロック微量
2　褐色土　ローム粒子微量　ロームブロック少量

SK8-15
1　黒褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
2　暗褐色土　ローム粒子多量

SK8-19
1　黒褐色土　ローム粒子多量　炭化物粒子少量
2　暗褐色土　ローム粒子微量

SK8-16
1　黒褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック極多量
2　暗褐色土　ローム粒子多量
3　黒褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量

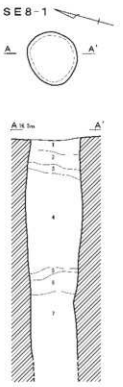
SK8-17
4　黒褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック少量
5　黒褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック少量

SK8-18
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物粒子微量
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量

SK8-20
1　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック・黒色土ブロック少量
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量

SK8-21
1　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
3　暗褐色土　ローム粒子少量
4　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック多量

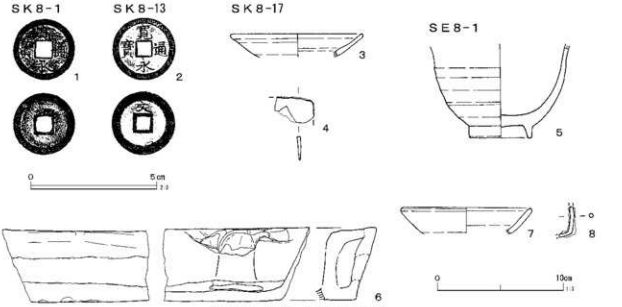
第297図　土壙（２）



SE8-1
1　暗褐色ヤ　ローム粒子微量　コームブロック少量
2　黒褐色土　ローム粒子極少量
3　暗褐色土　ローム粒子多量　コームブロック少量
4　黒褐色土　ローム粒子極少量
5　暗褐色土　ローム粒子多量
6　黒褐色ヤ　ローム粒子微量
7　黒褐色土　ロームブロック多量

0　2m
1:60

第298図　井戸跡



第299図　土壙・井戸跡出土遺物

第32表　土壙・井戸跡出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	産地	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考
1	SK8-1	古銭	宣永通宝												
2	SK8-13	古銭	宣永通宝												「文」
3	SK8-17	土器	かわらけ		10	(10.3)		(1.8)	にぶい褐	普通		輪轆			
4	SK8-17	鉄製品	刀子か			A3.1cm　B1.9cm　C0.3cm　重3.6.9g　錆化著しい									
5	SE8-1	陶器	碗	肥前	60		5.8	(7.4)	浅黄	良好	斑緑釉	輪轆			見込みに弧状重ね焼痕　18C末～19C初
6	SE8-1	土器	焙烙		5			(5.7)	灰白	普通					外面煤付着
7	SE8-1	土器	かわらけ		20	(10.2)	(17.3)	(2.8)	明褐	普通		輪轆			
8	SE8-1	鉄製品	不明			A2.5cm　B1.2cm　C0.3cm　重3.1g									錆化著しい

た。

検出し得た長さは16.2m、幅は1.6m、深さは0.4～0.6mを測り、北辺南辺の方位はN-75°-E、東辺の方位はN-12°-Wを指す。

屋敷地の区画溝と考えられる。

遺物は、１は肥前系の磁器碗、２、３は瀬戸・美濃系の陶器碗と擂鉢各１点ずつ出土した。なお、小破片のため図化には至らなかったが、瀬戸・美濃系の陶器の皿２点・徳利１点、肥前系の碗６点・皿１のほか、焙烙の破片が十数点出土している。

第８－２号溝跡（第300図、第301図４～16）

Ｎ８・Ｅ９、Ｅ10、Ｎ９・Ｅ１グリッドに位置する。

南北幅2.5～5.0mの範囲内に何条もの溝跡が存在しているが、幾度にもわたって掘り直された結果と考えられる。第８－１号掘立柱建物跡、第８-22・23号土壙および幾つかのピットと重複するが、新旧関係については不明である。東西共に調査区外に延びている。

検出し得た長さは23.6m、幅は2.6～5.7m深さは1.2mを測る。多数の溝跡が存在するため、すべての方位が一致することはないが、方位は概ねN-73°-Eを指す。

平面形は幅に振幅があるが、いずれもほぼ直線状である。断面形については浅いU字形である。

調査面積が小さく、他の調査地点からも離れているため溝跡の性格は不明である。

図化できた遺物は13点である。肥前系の遺物は、４は陶器碗、９は瓶と推定される磁器がある。高台内に目跡が１箇所認められる。６～８は瀬戸・美濃系では、陶器皿３点がある。７は菊皿で、細かな貫入が多くみられる。

10は香炉と推定される。見込みの特徴としては、一部、無釉の部分があることと、目跡があるという点が挙げられる。11の擂鉢の見込みには、重積み跡が認められる。12の擂鉢は、18世紀台の遺物であろうか。

なお、小破片であるため図化には至らなかった遺物には、瀬戸・美濃系の陶器皿１点・碗２点、肥前系の磁器碗５点のほか、焙烙の破片が20点ほど出土している。

第８－３号溝跡（第300図、第301図17～22）

Ｎ８・Ｄ９、D10、Ｅ９、Ｅ10、Ｎ９・Ｄ１グリッドに位置する。

SD８－１・８、SK８－１・３、およびピットと重複するが、新旧関係については不明である。第８－１号溝跡とは、重複しているのか、合流しているのか判断できなかった。東側は、調査区外に延びると思われる。

検出し得た長さは22.7m、幅は2.6～3.1m、深さは0.6mを測り、方位は概ねN-72°-Eを指す。

平面形は、幅に振幅があるがほぼ直線状で、断面形については、皿状に近いといえる。

遺物は、図化したものは６点である。そのうち陶磁器は、17の瀬戸・美濃系の擂鉢と18の肥前系の磁器碗の２点のみであった。18の碗の畳付には、容着を防ぐための砂粒が付着している。22は板碑であるが、小破片のため線刻の内容は判別できなかった。

他に、瀬戸・美濃系の陶器鉢１点、肥前系の碗１点のほか、焙烙の破片が十数点が出土している。

第８－４号溝跡（第300図）

Ｎ８・Ｅ９グリッドに位置する。

第８－１号溝跡、第８－７号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。第８－１号溝跡に連結しているのか不明である。

検出し得た長さは6.0m、幅は0.6m、深さは0.2mを測り、方位は概ねN-74°-Eを指す。

平面形はほぼ直線状で、断面形は上場に向かって開くU字状である。

遺物は出土しなかった。

第８－５号溝跡（第300図）

Ｎ８・Ｇ９、G10、Ｎ９・Ｆ１、Ｇ１グリッドに位置する。

検出できた範囲内において、２箇所途切れる同一の遺構と判断した。他遺構との重複関係は認められない。第８－６号溝跡との距離は1.0m、方位はN－68°－Eで、第８－６号溝跡と同一の溝跡である。

検出された３箇所を、まず個別に述べる。長さは7.2m、3.1m、7.6m、幅は1.0m、0.4m、0.7m、深さは0.1mを測る。東西共に調査区外に延びると思われる。

平面形はほぼ直線状で、断面形は皿状である。

遺物は、焙烙の破片が１点出土している。

第８－６号溝跡（第300図、第301図23）

Ｎ８・Ｇ９、Ｇ10、Ｎ９・Ｆ９、Ｇ９グリッドに位置する。

第８－７号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。第８－５号溝跡との距離は１m、方位はN－68°－Eを指す。第８－５号溝跡と同一の溝跡である。東西共に調査区外に延びている。

検出された範囲内において、まず個別に述べる。全長23.2m、最小幅1.0m、最大幅1.7m、深さ0.1mを測る。

平面形は、幅にやや振幅があるがほぼ直線状で、断面形は皿状である。

遺物は、かわらけ（23）が出土した。

他の遺物は、青磁碗１点、瀬戸・美濃系の陶器皿１点および焙烙３点の小破片が出土している。

第８－７号溝跡（第300図）

Ｎ８・Ｇ10グリッドに位置する。

第８－６号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。第８－６とは直行する形となる。南側は、調査区外に延びている。

検出された範囲内において、全長3.1m、幅1.2m、深さ0.1mを測る。方位は概ねN－14°－Wを指す。

平面形は直線状、断面形は皿状である。

遺物は出土しなかった。

第８－８号溝跡（第300図）

Ｎ８・Ｃ９、Ｄ９、Ｎ９・Ｄ１グリッドに位置する。

第８－３号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。第８－３とは直行する形となる。北側は、調査区外に延びている。

検出された範囲内において、全長8.7m、最小幅1.0m、最大幅1.4m、深さ0.1mを測る。方位は概ねN－25°－Wを指す。

平面形は直線状、断面形は皿状である。

遺物は出土しなかった。

第８－９号溝跡（第300図）

Ｎ８・Ｆ９グリッドに位置する。

西側は、調査区外に延びている。

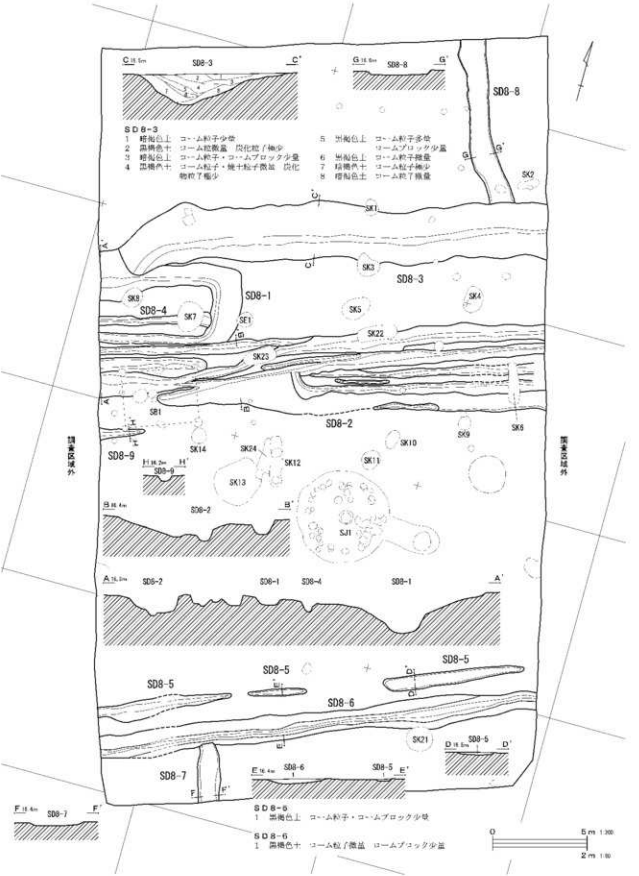
検出された範囲内において、全長1.4m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。方位は概ねN－25°－Wを指す。

平面形は直線状、断面形は埳状である。

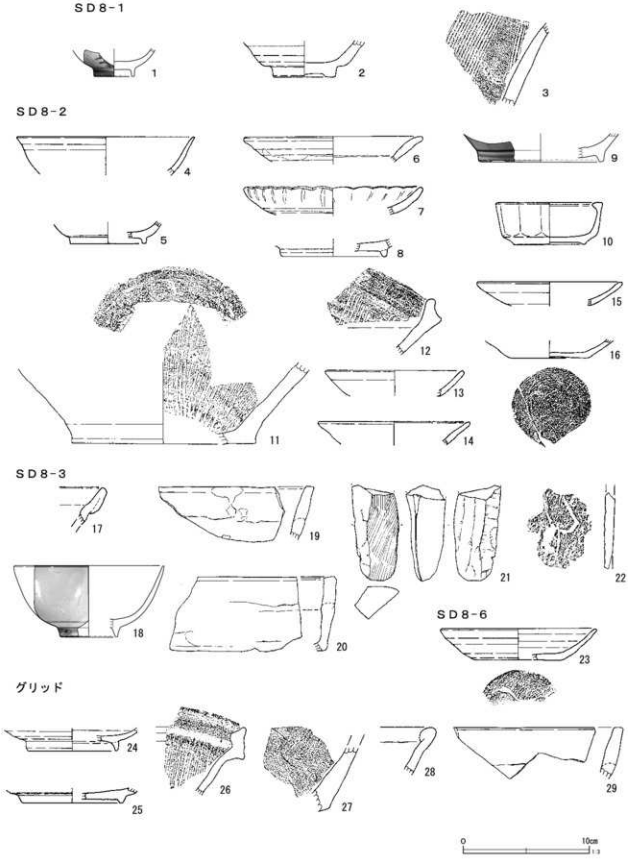
遺物は出土しなかった。

（５）ピット（第302図）

ピットは50基検出された。第８－３号溝跡の北側から比較的多く検出された。他はＮ８・Ｅ９、Ｅ10、Ｆ９、Ｆ10、Ｇ10グリッドとＮ９・Ｆ１、Ｇ１グリッドから検出されたが、分布は散漫であった。


SD8-3
1 橙褐色土 コーム粒子少量
2 黒褐色土 コーム粒微量 炭化粒子極少
3 橙褐色土 コーム粒子・コームブロック少量
4 黒褐色土 コーム粒子・微土粒子微量 炭化物粒子極少
5 黒褐色土 コーム粒子多量
6 黒褐色土 コーム粒子微量
7 橙褐色土 コーム粒子極少
8 橙褐色土 コーム粒子微量
SD8-8
1 黒褐色土 コーム粒子・コームブロック少量
SD8-6
1 黒褐色土 コーム粒子微量 コームブロック少量
SD8-1
SD8-2
SD8-3
SD8-4
SD8-5
SD8-6
SD8-7
SD8-8
SD8-9
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK21
SK22
SK23
SK24
SE1
SR1
SJ1
調査区域外
0
5m 1:300
2m 1:80

第300図　溝跡



第301図　溝跡・グリッド出土遺物

第33表　溝跡・グリッド出土遺物観察表

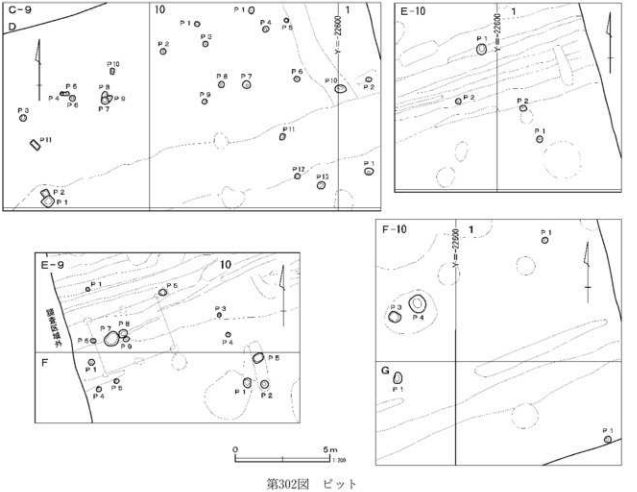
番号	遺構	種別	器種	産地	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の変化	文様	備考
1	SD８-１	磁器	碗	肥前	20		(3.0)	[2.1]	灰白	緻密	良好	灰釉	輪縄	置入多	雷文圏線　畳付砂粒付着　18C中
2	SD８-１	陶器	碗	瀬戸・美濃	20		4.9	[2.8]	灰白		良好	鉄釉	輪縄	目跡著　削り出し高台	天目碗　厚底多　17C後半
3	SD８-１	陶器	擂鉢	瀬戸・美濃	5			[5.7]	灰黄		普通	鉄釉	輪縄		卸目磨耗少
4	SD８-２	陶器	碗	肥前	5	(14.0)		[3.0]	灰白		良好	鉄釉	輪縄	置入多	17C後～18C前半
5	SD８-２	陶器	碗	京・信楽か	15		(6.0)	[1.7]	灰白	緻密	良好	灰釉	輪縄	置入多　削り出し高台	
6	SD８-２	陶器	皿	瀬戸・美濃	15	(14.2)		[2.0]	浅黄		良好	長石釉	輪縄	置入多	18C中
7	SD８-２	陶器	皿	瀬戸・美濃	30	(14.0)		[22]	灰白		普通	灰釉	輪縄 型打	置入多	菊皿　17C
8	SD８-２	陶器	皿	瀬戸・美濃	5		(8.4)	[1.4]			普通	灰釉	輪縄	置入多　付け高台	17C
9	SD８-２	磁器	瓶か	肥前	5		(10.0)	[2.3]	灰白		良好	灰釉	輪縄	削り出し高台	18C前半
10	SD８-２	青磁	香炉か	中国産か	30	(8.4)	(5.6)	3.3			良好	青磁釉	輪縄 型打		
11	SD８-２	陶器	擂鉢	備前	20		(14.4)	[6.4]	褐灰		良好	焼締め	輪積み		左回転で施文　卸目磨耗少　18C
12	SD８-２	陶器	擂鉢	丹波か	5			[4.3]	褐灰	砂粒	普通	鉄釉			6本/条　卸目磨耗少
13	SD８-２	土器	かわらけ		10	(10.9)		[2.0]	橙		普通		輪縄		
14	SD８-２	土器	かわらけ		10	(12.0)		[1.8]	にぶい橙		不良		輪縄		
15	SD８-２	土器	かわらけ		40	(11.8)		[1.8]	橙				輪縄		
16	SD８-２	土器	かわらけ		70		(6.4)	[1.4]	橙		普通		輪縄		
17	SD８-３	陶器	擂鉢	瀬戸・美濃	5			[1.9]	浅黄		良好	鉄釉	輪縄か		18C中
18	SD８-３	磁器	碗	肥前	15	(12.0)	(4.6)	[5.8]	灰白	緻密	良好	灰釉	輪縄	畳付砂粒付着	18C
19	SD８-３	土器	焙烙		5			[4.3]	灰黄		普通				外面煤付着
20	SD８-３	土器	焙烙		5			[5.9]	灰黄		普通				外面煤付着
21	SD８-３	石製品	砥石			長さ7.6cm　幅3.7cm　厚さ2.6cm　重さ76.9g									
22	SD８-３	石製品	板碑			高さ(6.0)cm　幅(5.5)cm　厚さ0.8cm									
23	SD８-６	土器	かわらけ		10	(12.2)	(7.0)	2.5	にぶい橙		普通		輪縄		輪縄目跡著
24		陶器	皿	瀬戸　美濃	20		(7.0)	[1.8]	浅黄		良好	灰釉	輪縄	置入多	見込み圏線か目跡　18C初
25		陶器	皿	瀬戸　美濃	5			[1.2]	浅黄		良好	灰釉	輪縄	削りだし高台	17C前半か
26		陶器	擂鉢	丹波か	5			[5.2]	褐灰	砂粒	普通	鉄釉			17C後半～18C初頭か
27		陶器	擂鉢	瀬戸　美濃	5			[4.3]	灰黄		良好	鉄釉			卸目磨耗著しい
28		陶器	擂鉢	瀬戸　美濃	5			[3.7]	灰黄		良好	鉄釉	輪縄		18C前葉
29		土器	焙烙		5			[4.1]	灰黄		普通				外面煤付着

第34表　ピット計測表

地点	グリッド	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
8	N８・D９	1	0.56	0.55	0.29
8	N８・D９	2	—	0.34	0.13
8	N８・D９	3	—	0.32	0.23
8	N８・D９	4	—	0.20	0.26
8	N８・D９	5	—	0.22	0.22
8	N８・D９	6	0.34	0.30	0.18
8	N８・D９	7	0.46	0.36	0.14
8	N８・D９	8	—	0.28	0.16
8	N８・D９	9	—	0.30	0.16
8	N８・D９	10	0.28	0.20	0.15
8	N８・D９	11	0.54	0.24	0.20
8	N８・E９	1	0.22	0.21	0.36
8	N８・E９	5	0.46	0.34	0.72
8	N８・E９	6	0.26	0.24	0.39

地点	グリッド	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
8	N 8 ・E 9	7	0.78	0.62	0.34
8	N 8 ・E 9	8	0.50	0.38	0.17
8	N 8 ・E 9	9	0.31	0.27	0.22
8	N 8 ・F 9	1	0.32	0.30	0.21
8	N 8 ・F 9	4	0.28	0.24	0.35
8	N 8 ・F 9	5	0.25	0.23	0.16
8	N 8 ・C10	1	0.35	0.26	0.28
8	N 8 ・D10	1	0.30	0.26	0.17
8	N 8 ・D10	2	0.28	0.26	0.16
8	N 8 ・D10	3	0.30	0.27	0.27
8	N 8 ・D10	4	0.28	0.26	0.22
8	N 8 ・D10	5	0.26	0.25	0.14
8	N 8 ・D10	6	0.33	0.27	0.15
8	N 8 ・D10	7	0.40	0.36	0.17
8	N 8 ・D10	8	0.33	0.26	0.17
8	N 8 ・D10	9	0.27	0.26	0.18
8	N 8 ・D10	10	0.63	0.36	0.23
8	N 8 ・D10	11	0.36	0.26	0.19

地点	グリッド	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
8	N 8 ・D10	12	0.27	0.24	0.15
8	N 8 ・D10	13	0.42	0.36	0.16
8	N 8 ・E10	1	0.52	0.46	0.16
8	N 8 ・E10	2	0.27	0.22	0.19
8	N 8 ・E10	3	0.25	0.22	0.26
8	N 8 ・E10	4	0.21	0.20	0.29
8	N 8 ・F10	1	0.47	0.40	0.17
8	N 8 ・F10	2	0.40	0.38	0.23
8	N 8 ・F10	3	0.66	0.51	0.16
8	N 8 ・F10	4	0.92	0.86	0.25
8	N 8 ・F10	5	0.58	0.44	0.33
8	N 8 ・G10	1	0.60	0.44	0.13
8	N 9 ・D 1	1	0.40	0.33	0.21
8	N 9 ・D 1	2	0.28	0.23	0.15
8	N 9 ・E 1	1	0.31	0.30	0.14
8	N 9 ・E 1	2	0.34	0.34	0.16
8	N 9 ・F 1	1	0.30	0.30	0.16
8	N 9 ・G 1	1	0.37	0.32	0.14



第302図　ピット

Ⅷ　第９地点の遺構と遺物

１．概　要

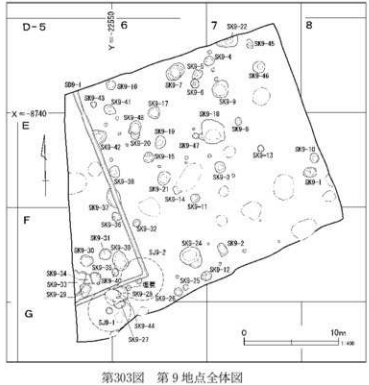
第９地点は遺跡範囲の東部、一般国道16号バイパスの南側に位置する。

発掘調査前は屋敷林であったため、木の根による攪乱が多く、遺構の遺存状況はあまり良好でなかった。

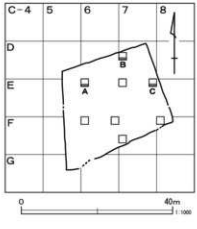
旧石器時代は、２×２ｍの調査区を設定したが、遺構・遺物は検出されなかった。

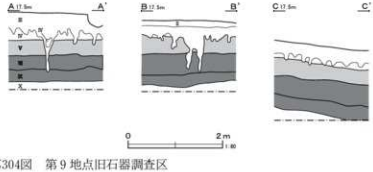
縄文時代は、調査区南西部から炉跡、埋甕等が見つかり、住居跡２軒、土壙５基が検出されている。

近世は、土壙41基と溝跡１条が検出された。



第303図　第９地点全体図





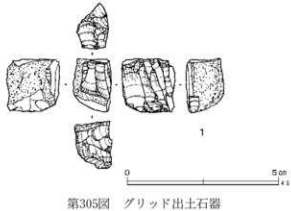
第304図　第９地点旧石器調査区

２．旧石器時代

旧石器時時代の調査は、２×２ｍのグリッドを８箇所設定し、調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。

ローム層の堆積状況は、東側は谷に向かって傾斜していた。

１は黒曜石製の細石核である。作業面は正面で左側面及び裏面は自然面を残している。グリッド出土である。



第305図　グリッド出土石器

3．縄文時代

第９地点では、中期末葉から後期初頭の住居跡２軒、土壙５基が検出された。遺構は、調査区の南西端からまとまって検出され、多くが攪乱や削平などによって失われたと考えられる。

（1）住居跡

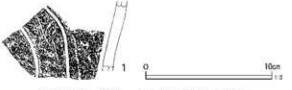
第９－１号住居跡（第306・307図）

Ｍ９・Ｆ５、６、Ｇ５、６グリッドに位置する。調査区の南西端から検出された。住居跡は炉跡のみが検出され、攪乱や削平のためピットは検出することができなかった。住居跡と想定される範囲内からは、縄文時代の第９－２号住居跡、第９-27号土壙、近世の第９-28・44号土壙や第９－１号溝跡が重複して検出された。出土した遺物や周辺の遺構から時期は後期初頭と考えられ、それからすれば、平面形は柄鏡形と推定され、柄部は調査区域外の南側に張り出していたと考えられる。

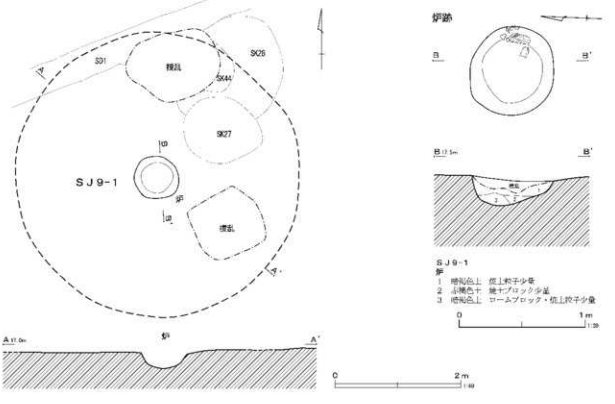
炉跡の平面形はほぼ円形で、炉の縁の一部に礫が残存していたことや、覆土内から礫片などが出土したことから、本来は石囲炉であったと考えられる。炉跡の長径は0.70m、短径0.64m、深さ0.22mを測る。

遺物は炉跡内からは礫や礫片が出土したが、土器はほとんど検出されなかった。

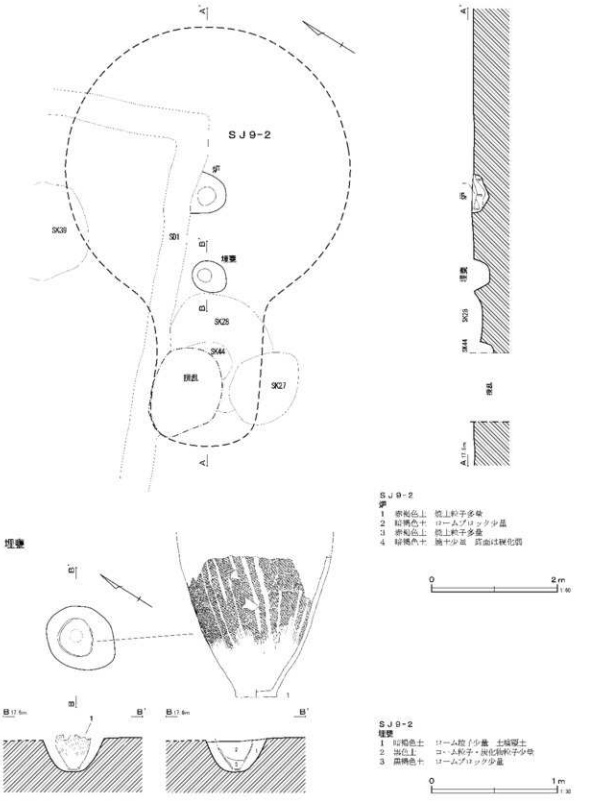
第306図１は出土した土器である。１は深鉢形土器の胴部の破片で、平行する沈線文によって文様を施文している。文様内には櫛歯状の条線をまばらだが充填している。遺物の時期は後期初頭で、称名寺式土器の最終末にあたる。



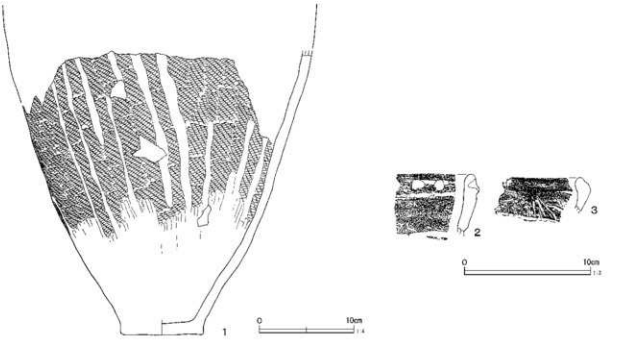
第306図　第９－１号住居跡出土遺物



第307図　第９－１号住居跡



第308図　第９-２号住居跡



第309図　第９－２号住居跡出土遺物

第９－２号住居跡（第308図・第309図）

Ｍ９・Ｆ５、６、Ｇ５、６グリッドに位置する。攪乱や削平などにより、住居跡に掘り込みはなく炉跡と埋甕は検出されたが、ピットは検出することはできなかった。

推定される住居跡の範囲内には、縄文時代の第９－１号住居跡、第９－27号土壙、近世の第９－28・39・44号土壙、第９－１号溝跡が重複して検出されている。

出土遺物から住居跡の時期が後期初頭と考えられることから、平面形は柄鏡形と推定され、炉跡と埋甕の配置から、柄部は南西側に張り出すと考えられる。

炉跡と埋甕を基準とした主軸方向は、Ｎ－58°－Ｅをとる。

炉跡は地床炉で、一部が近世の第９－１号溝跡によって失われている。主体部の中央付近に位置したと推定される。

炉跡の残存する長径0.65m、短径0.50m、深さ0.25mを測る。

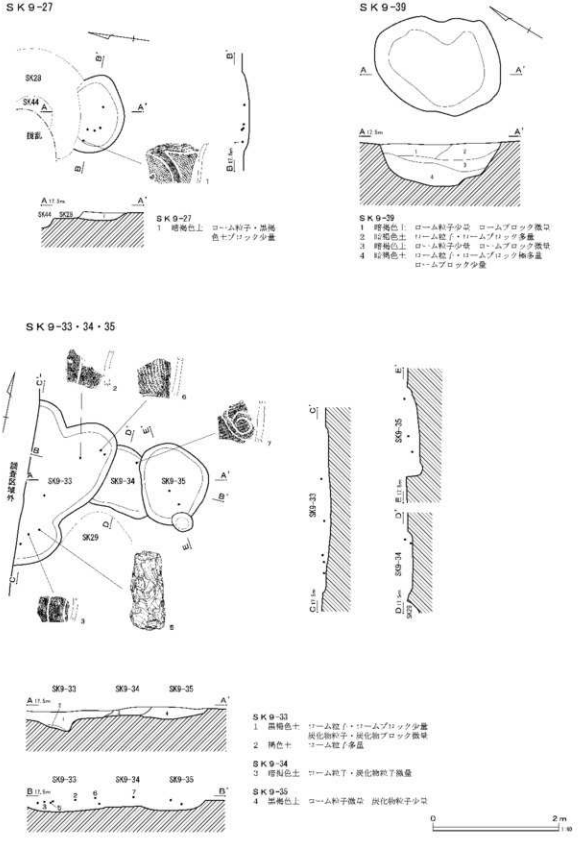
埋甕は住居跡の柄部の付け根部分にあたる位置から検出された。埋甕内には、第309図１の深鉢形土器が正位で埋設されていた。削平のためか、上半部は失われていた。埋甕の長径0.52m、短径0.50m、深さ0.24mである。

第309図１～３は検出された遺物である。

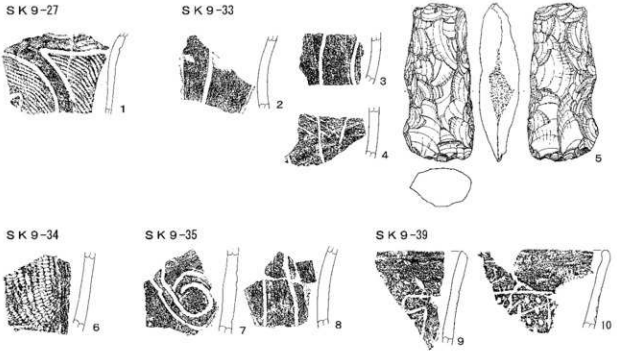
１は埋甕内に設置されていた土器で、深鉢形土器の胴下半部から底部である。上半部は検出されなかった。大型の深鉢で、器面には地文が施文されるのみである。地文は単節ＬＲの縄文で、撚りのゆるい原体を使用していたものと考えられる。所々であるが、縦方向になでが入っている。底部周辺の器面は、縦方向にミガキ状の整形が施されている。底径は９cmである。

２・３は口縁部の破片で、２は口唇部に浅い２本の平行する沈線文を巡らし、その間に円形刺突文を施文している。胴部とは沈線で区画している。３は屈曲する口縁部を持ち、胴部には沈線で文様を施文するものである。

遺物の時期は、１は地文のみが残存する土器であるが、２・３などから、称名寺式の終末段階に相当すると考えられる。後期初頭である。


ＳＫ９-27
SK28
SK44
A
A'
B
B'
撹乱
A 17.5m
SK44
SK28
ＳＫ９-27
1　暗褐色土　ローム粒子・黒褐色土ブロック少量
ＳＫ９-39
A
A'
A 17.5m
ＳＫ９-39
1　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック微量
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量
3　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック微量
4　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック極多量
ロームブロック少量
ＳＫ９-33・34・35
C
C'
B
B'
A
A'
D
D'
SK9-33
SK9-34
SK9-35
SK29
外堀及び土塁
SK9-33
SK9-34
SK9-35
A 17.5m
A'
ＳＫ９-33
1　黒褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
炭化物粒子・炭化物ブロック微量
2　褐色土　ローム粒子多量
ＳＫ９-34
3　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子微量
ＳＫ９-35
4　黒褐色土　ローム粒子微量　炭化物粒子少量
SK9-33
SK9-34
SK9-35
B 17.5m
B'
0
2m
1:40

第310図　土壙



第311図　土壙出土遺物

（２）土壙

第９-27号土壙（第310図・第311図１）

Ｍ９・Ｆ６、Ｇ６グリッドに位置する。縄文時代の第９-１・２号住居跡内から検出された。また、近世の第９-28号土壙と重複するため、北側部分の一部が失われている。平面形は楕円形であると推定される。残存部分の長径1.25m、短径0.68m、深さ0.11mである。

第311図１は出土した土器である。深鉢形土器の破片で、沈線文によって文様が施文される。地文として単節ＬＲの縄文を施文している。時期は後期初頭で、称名寺式中段階に相当する。

第９-33号土壙（第310図・第311図２～５）

Ｆ５グリッドに位置する。重複する第９-33・34・35号土壙のうちの１基である。西半部は調査区域外のため検出されなかった。平面形は不定形で、残存部分の長径2.63m、短径1.32m、深さ0.29mである。

第311図２～５は出土した遺物である。

２～４は深鉢形土器の胴部の破片で、平行する沈線文によって文様を施文している。地文は施文されてない。

５は打製石斧である。側縁は直線的で、刃部は偏刃である。器面全面に調整が行われ、側縁の中央部は刃潰し状になっている。

出土した土器は称名寺式の終末のもので、時期は後期初頭である。

第９-34号土壙（第310図・第311図６）

Ｍ９・Ｆ５グリッドに位置する。重複する第９-33・34・35号土壙のうちの１基である。平面形は不明である。残存部分の長径0.98m、短径0.84m、深さ0.10mである。

第311図６は出土した深鉢形土器の破片である。浅い沈線文を施文するもので、地文として単節ＬＲの縄文を斜めや縦方向に施文している。加曽利ＥⅢ式で中期後葉である。

第９-35号土壙（第310図・第311図７・８）

Ｍ９・Ｆ５グリッドに位置する。重複する第９-33・34・35号土壙のうちの１基である。平面形は楕円形で、長径1.41m、短径1.06m、深さ0.26m

である。

第311図７・８は検出された深鉢形土器の胴部の破片である。平行する沈線で文様を施文するもので、文様内は無文である。称名寺式終末の土器で、時期は後期初頭である。

第９-39号土壙（第310図・第311図９・10）

Ｍ９・Ｆ６グリッドに位置する。縄文時代の第９-２号住居跡と、近世の第９-40号土壙と接している。平面形は不定形で、長径2.00m、短径1.40m、深さ0.66mである。

第311図９・10は検出された深鉢形土器の口縁部の破片である。同一個体と考えられる。沈線によって文様を施文するもので、文様内には複数列の列点文を充塡している。称名寺式終末の土器で、時期は後期初頭である。

（３）グリッド出土土器

出土土器

第Ⅱ群土器（第312図１～３）

前期の土器群を一括する。

１は深鉢形土器の胴部の破片で、平行沈線文や矢羽状の刺突が施文される。前期後葉の諸磯ｂ式である。

２は深鉢形土器の胴部の破片で、器面にロッキング文様を施文する、前期後葉の浮島・興津系土器である。

３は深鉢形土器の口縁部の破片である。集合沈線文を施文し、その間には三角形状の印刻文を施文している。

前期末葉の十三菩提式土器である。

第Ⅲ群土器（第312図４～６）

中期末葉の土器群を一括する。４～６はいずれも口縁部の破片で、無文の狭い口縁部と胴部は微隆起状の隆帯で区画されている。地文として単節ＲＬの縄文を施文している。中期末葉の加曽利ＥⅣ式土器と考えられる。

第Ⅳ群土器（第312図７～12）

後期の土器群を一括する。

７～10は沈線文によって文様を施文するものである。７・８は文様内に列点文を充塡するもので、９の文様内は無文である。10は注口土器の破片と考えられる。

11・12は地文のみが施文される胴部の破片で、11は地文として単節ＬＲの縄文を施文している。12は櫛歯状の条線を施文する。

出土石器（第312図13～19）

13・14は無茎の石鏃である。13の側縁はやや外湾し、基部には逆Ｖ字状の抉りが入る。14は先端部を欠損するもので、基部に浅い抉りが入る。

15は上下方向から調整が加えられることから、くさび形石器としたものである。

16は打製石斧で、両側縁に深い抉りが入る。

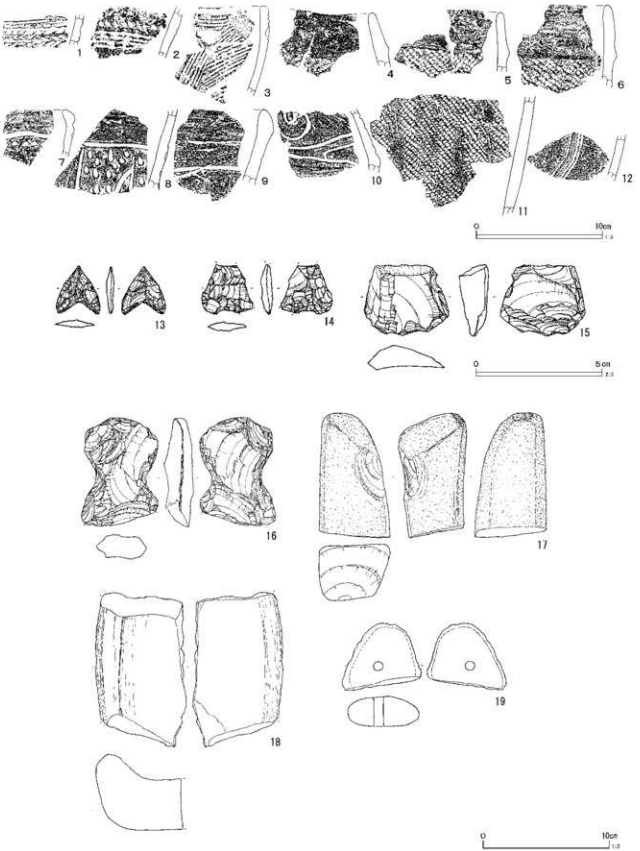
17はスタンプ形石器で、底面は一回の剥離で平坦に作り出されている。基部は自然面が大きく残るが、握りやすいように、右側縁の一部に抉りを入れて使用している。

18は石皿の破片で、縁部が作りだされている。

19は軽石製で、半円形状に加工され中央付近には円孔を穿っている。石製品と考えられる。

第35表　出土石器観察表

図版No.	出土遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第311図５	第９-33号土壙	打製石斧	ホルンフェルス	12.45	5.60	3.25	257.4	
第312図13	第９-７号土壙	石鏃	黒曜石	1.90	1.75	0.35	0.6	
第312図14	第９-24号土壙	石鏃	チャート	(2.00)	(2.05)	0.50	1.8	
第312図15	グリッド	くさび形石器	チャート	2.75	3.40	1.20	11.9	
第312図16	第９-35号土壙	打製石斧	ホルンフェルス	8.45	6.05	2.35	130.7	
第312図17	第９-18号土壙	スタンプ形石器	砂岩	9.85	5.65	5.35	458.1	
第312図18	Ｍ９・Ｇ５	石皿	安山岩	(12.15)	(7.15)	(6.79)	559.4	
第312図19	第９-31号土壙	軽石	軽石	5.25	6.25	(2.50)	19.3	



第312図　グリッド出土遺物

４．近　世

（１）土壙

第９－１号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｅ８グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.36m、短径は1.02m、深さは0.33mである。長軸方位はＮ-83°-Ｅを指す。遺物は出土していない。

第９－２号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｆ７グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、底面は平らである。長軸は1.30m、短軸は0.86m、深さは0.45mである。長軸方位はＮ-21°-Ｗを指す。遺物は出土していない。

第９－３号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｅ７グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は1.15m、深さは0.32mである。遺物は出土していない。

第９－４号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｄ６、Ｄ７グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、底面は平らである。径は1.07m、深さは0.39mである。遺物は出土していない。

第９－５号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｄ６グリッドに位置する。第９－６号土壙と重複する。平面形は楕円形を呈し、中央部一段低くなっている。長径は1.16m、短径は0.90m、深さは0.44mである。長軸方位はＮ-54°-Ｅを指す。遺物は出土していない。

第９－６号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｄ６グリッドに位置する。第９－５号土壙と重複する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.37m、短径は0.8m、深さは0.16mである。長軸方位はＮ-10°-Ｅを指す。遺物は出土していない。

第９－７号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｄ６グリッドに位置する。平面形は確認面で楕円形を呈し、中央は円形に深く掘られている、底面は平らである。長径は2.18m、短径は1.50m、深さは0.72mである。長軸方位はＮ-53°-Ｅを指す。遺物は出土していない。

第９－８号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｅ７グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は0.85m、短径は0.65m、深さは0.24mである。長軸方位はＮ－６°－Ｅを指す。遺物は出土していない。

第９－９号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｄ７グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈する。径は1.73m、深さは0.47mである。遺物は出土していない。

第９－10号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｅ８グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は1.02m、深さは0.28mである。遺物は出土していない。

第９－11号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｅ６グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は0.95m、深さは0.28mである。遺物は出土していない。

第９－12号土壙（第313図）

Ｍ９・Ｆ６、Ｆ７グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、西側が深くなっている。長径は1.14m、短径は0.96m、深さは0.38mである。長軸方位はＮ-67°-Ｅである。遺物は出土していない。

第９－13号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ７グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は0.71m、深さは0.15mである。遺物は出土していない。

第９－14号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ６グリッドに位置する。東側を攪乱で壊されている。平面形は不整形を呈する。一辺は0.93m、深さは0.45mである。遺物は出土していない。

第９－15号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ６グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、北西部分が深くなっている。径は1.07m、深さは0.25mである。遺物は出土していな

い。

第９-16号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｄ５、Ｄ６グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は1.00m、深さは0.20mである。遺物は出土していない。

第９-17号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｄ６、Ｅ６グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、底面は平らである。径は1.18m、深さは0.30mである。遺物は出土していない。

第９-18号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ６、Ｅ７グリッドに位置する。第９－47土壙と重複する。平面形は楕円形を呈する。長径は2.73m、短径は2.53m、深さは0.98mである。長軸方位はＮ-86°-Ｗを指す。遺物は出土していない。

第９-47号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ６グリッドに位置する。第９-18号土壙と重複する。平面形は楕円形を呈する。長径は0.70m、短径は0.56m、深さは0.12mである。長軸方位はＮ-86°-Ｗを指す。遺物は出土していない。

第９-19号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ６グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は1.32m、深さは0.56mである。遺物は出土していない。

第９-20号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ６グリッドに位置する。第９-48号土壙を切っている。平面形は円形を呈する。径は0.90m、深さは0.20mである。遺物は出土していない。

第９-48号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ６グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.50m、短径は1.20m、深さは0.70mである。長軸方位はＮ-12°-Ｅを指す。遺物は出土していない。

第９-21号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｅ６グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、底面は平らである。長径は1.53m、短径は1.20m、深さは0.90mである。長軸方位はＮ-28°-Ｅを指す。遺物は出土していない。

第９-22号土壙（第315図）

Ｍ９・Ｄ７グリッドに位置する。北側は調査区外となるため、全体は不明である。現況から平面形は楕円形を呈し、東側半分が深くなっている。計測できる長径は2.32m、深さは1.64mである。長軸方位はＮ-70°-Ｅを指す。

遺物はかわらけの破片が出土した。

第９-24号土壙（第315図）

Ｍ９・Ｆ６グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、南東側に浅い張り出しを有する。長径は2.40m、短径は2.00m、深さは0.69mである。長軸方位はＮ-37°-Ｗを指す。遺物は出土していない。

第９-25号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｆ６グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は0.60m、深さは0.13mである。遺物は出土していない。

第９-26号土壙（第314図）

Ｍ９・Ｆ６グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は0.81m、深さは0.20mである。遺物は出土していない。

第９-28号土壙（第315図）

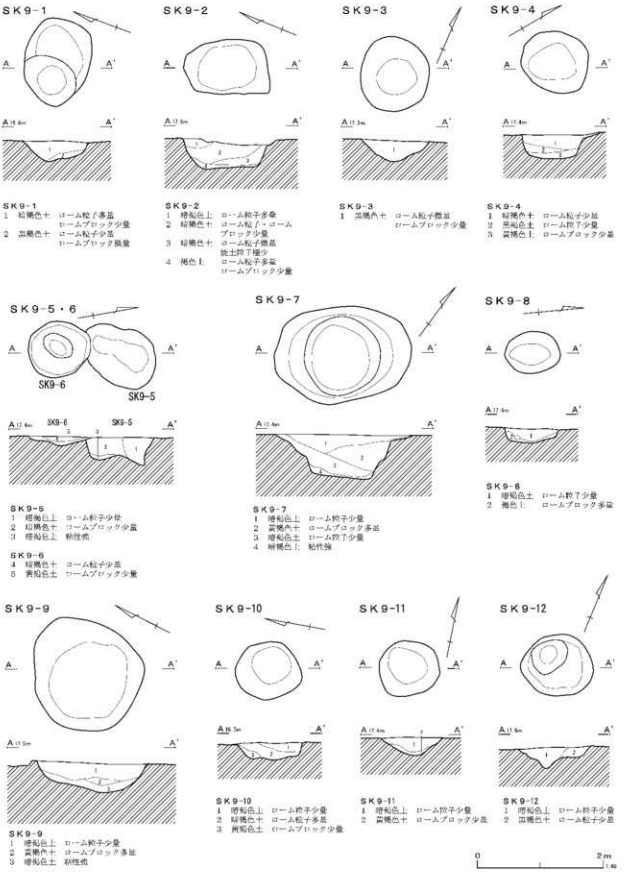
Ｍ９・Ｆ６グリッドに位置する。平面形は方形に近く、西側を攪乱によって壊されている。中央に第９-44号土壙が切っている。一辺は約1.64m、深さは0.11mである。遺物は出土していない。

第９-44号土壙（第315図）

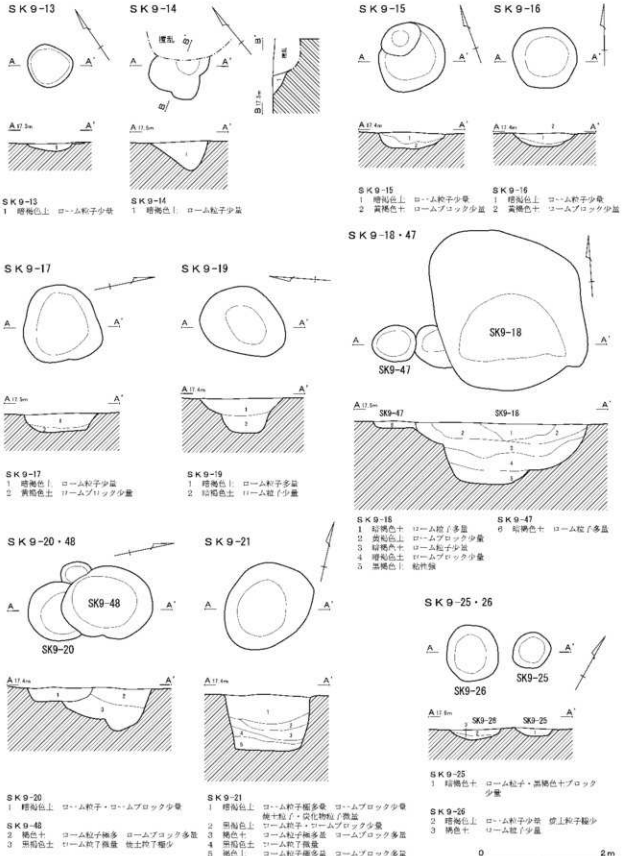
Ｍ９・Ｆ６グリッドに位置する。平面形は西側が攪乱によって壊されているため不明である。大きさは、現状で径約0.70m、深さは0.30mである。遺物は出土していない。

第９-29号土壙（第315図）

Ｍ９・Ｆ５グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.34m、短径は0.85m、深さは0.27mである。長軸方位はＮ-34°-Ｅを指す。遺物は出土していない。


SK9-1
SK9-2
SK9-3
SK9-4
SK9-5・6
SK9-6
SK9-5
SK9-7
SK9-8
SK9-9
SK9-10
SK9-11
SK9-12
A
A'
A 15.8m
A 15.6m
A 15.3m
A 15.4m
A 15.4m
SK9-6
SK9-5
A 15.6m
A 15.6m
A 15.4m
A 15.5m
A 15.7m
A 15.4m
A 15.6m
SK9-1
1 暗褐色土 ローム粒子多量
ロームブロック少量
2 黒色土 ローム粒子少量
ロームブロック微量
SK9-2
1 暗褐色土 ローム粒子多量
2 暗褐色土 ローム粒子・ローム
ブロック少量
3 暗褐色土 ローム粒子微量
他土粒子種少
4 褐色土 ローム粒子多量
ロームブロック少量
SK9-3
1 黒褐色土 ローム粒子微量
ロームブロック少量
SK9-4
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黒褐色土 ローム粒子少量
3 黄褐色土 ロームブロック少量
SK9-5
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ロームブロック少量
3 暗褐色土 粘性弱
SK9-6
4 暗褐色土 ローム粒子少量
5 黄褐色土 ロームブロック少量
SK9-7
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黄褐色土 ロームブロック多量
3 暗褐色土 ローム粒子少量
4 暗褐色土 粘性強
SK9-8
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 褐色土 ロームブロック多量
SK9-9
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黄褐色土 ロームブロック多量
3 暗褐色土 粘性弱
SK9-10
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子多量
3 褐褐色土 ロームブロック少量
SK9-11
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黄褐色土 ロームブロック少量
SK9-12
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黒褐色土 ローム粒子少量
0
2m
1:40

第313図　土壙（1）



SK9-13
1 暗褐色土 ローム粒子少量

SK9-14
1 暗褐色土 ローム粒子少量

SK9-15
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黄褐色土 ロームブロック少量

SK9-16
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黄褐色土 ロームブロック少量

SK9-17
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黄褐色土 ロームブロック少量

SK9-19
1 暗褐色土 ローム粒子多量
2 暗褐色土 ローム粒子少量

SK9-18
1 褐色土 ローム粒子多量
2 黄褐色土 ロームブロック少量
3 褐色土 ローム粒子少量
4 暗褐色土 ロームブロック少量
5 黒褐色土 粘性強

SK9-47
6 褐色土 ローム粒子多量

SK9-20
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量

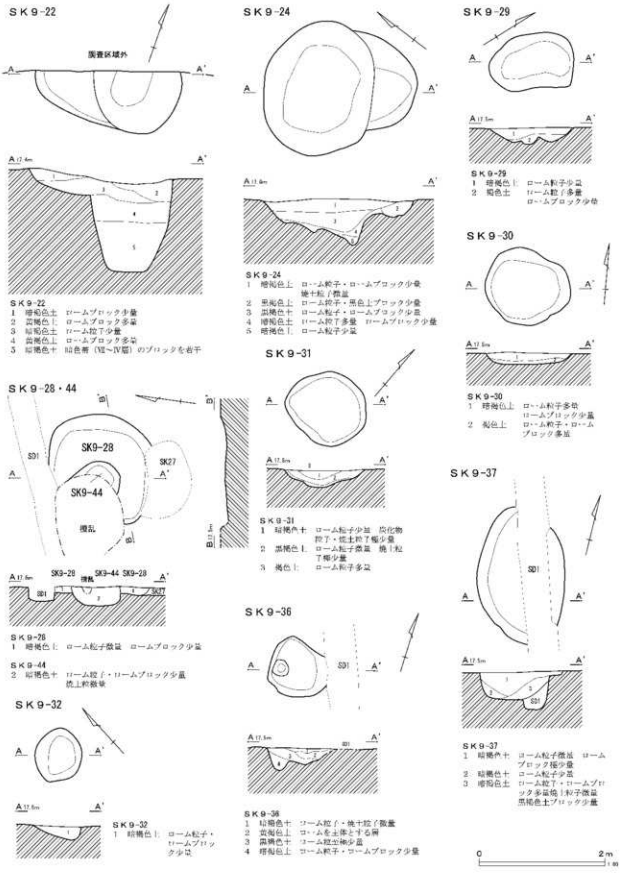
SK9-48
2 褐色土 ローム粒子極多 ロームブロック多量
3 黒褐色土 ローム粒子微量 焼土粒子極少

SK9-21
1 暗褐色土 ローム粒子極多量 ロームブロック少量 焼土粒子・炭化物粒子微量
2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
3 褐色土 ローム粒子極多量 ロームブロック多量
4 黒褐色土 ローム粒子微量
5 褐色土 ローム粒子極少量 ロームブロック多量 ロームブロック少量

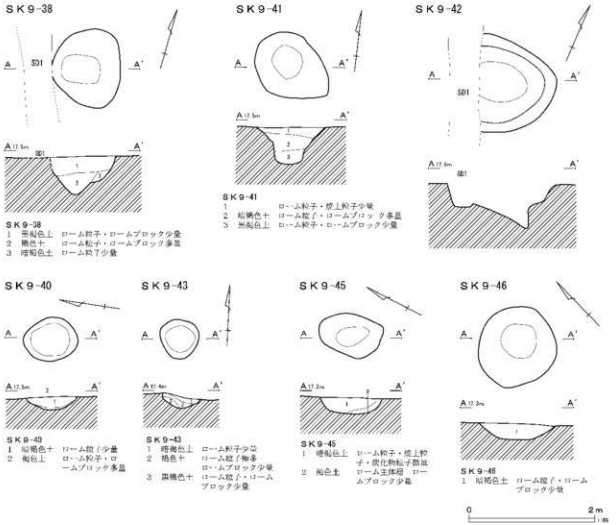
SK9-25
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土ブロック少量

SK9-26
2 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子極少
3 褐色土 ローム粒子少量

第314図 土壙（2）


ＳＫ９-22
調査区域外
A
A'
A 17.4m
1
2
3
4
5
ＳＫ９-22
1 暗褐色土 ロームブロック少量
2 黒褐色土 ロームブロック多量
3 暗褐色土 ローム粒子少量
4 黒褐色土 ロームブロック多量
5 暗褐色土 暗色帯（Ⅶ～Ⅳ層）のブロックを若干
ＳＫ９-24
A 17.6m
1
2
3
4
ＳＫ９-24
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量 焼土粒子微量
2 黒褐色土 ローム粒子・黒色土ブロック少量
3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
4 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
5 暗褐色土 ローム粒子少量
ＳＫ９-29
A 17.5m
1
2
ＳＫ９-29
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
ＳＫ９-30
A 17.6m
1
2
ＳＫ９-30
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
ＳＫ９-28・44
SD1
SK9-28
SK27
SK9-44
撹乱
B 17.5m
SK9-28
SK9-44
SK9-28
埋戻
SD1
SK27
ＳＫ９-28
1 暗褐色土 ローム粒子微量 ロームブロック少量
ＳＫ９-44
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量 焼土粒微量
ＳＫ９-31
A 17.5m
1
2
3
ＳＫ９-31
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物 粒子・焼土粒子極少量
2 黒褐色土 ローム粒子微量 焼土粒子極少量
3 褐色土 ローム粒子多量
ＳＫ９-32
A 17.5m
1
ＳＫ９-32
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
ＳＫ９-36
SD1
A 17.5m
1
2
3
ＳＫ９-36
1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒褐色土 ロームを主体とする層
3 黒褐色土 ローム粒子極少量
4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
ＳＫ９-37
SD1
A 17.5m
1
2
3
SD1
ＳＫ９-37
1 暗褐色土 ローム粒子微量 ロームブロック極少量
2 暗褐色土 ローム粒子少量
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量焼土粒子微量 黒褐色土ブロック少量
0
2m
1:80

第315図　土壙（３）



第316図　土壙（4）

第9-30号土壙（第315図）

M9・F5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は約1.35m、深さは0.18mである。遺物は出土していない。

第9-31号土壙（第315図）

M9・F5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は約1.28m、深さは0.30mである。遺物は出土していない。

第9-32号土壙（第315図）

M9・F6グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は約0.90m、深さは0.25mである。遺物は出土していない。

第9-36号土壙（第315図）

M9・F6グリッドに位置する。東側は第9-1号溝跡と重複している。平面形は円形に近く、西側に小さなピットがある。径は1.00m、深さは0.36mである。遺物は出土していない。

第9-37号土壙（第315図）

M9・E5、E6グリッドに位置する。東側は第9-1号溝跡と重複するが、断面図から溝跡よりも本土壙の方が新しいことが分かった。平面形は楕円形を呈する。長径は2.20m、深さは0.48mである。長軸方位はN-12°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第9-38号土壙（第316図）

M9・E5、E6グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.25m、短径は1.05m、深さは0.58mである。長軸方位はN-19°-Wを指

す。遺物は出土しなかった。

第９-40号土壙（第316図）

Ｍ９・Ｆ５、Ｆ６グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は0.80m、短径は0.67m、深さは0.21mである。長軸方位はＮ-８°-Ｗを指す。遺物は出土しなかった。

第９-41号土壙（第316図）

Ｍ９・Ｄ５、Ｄ６グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈する。長径は1.35m、短径は1.00m、深さは0.62mである。長軸方位はＮ-58°-Ｗを指し。

遺物は瀬戸・美濃系の破片、焙烙の破片が出土した。

第９-42号土壙（第316図）

Ｍ９・Ｅ５グリッドに位置する。東側を第９-１号溝跡と重複する。平面形は楕円形を呈する。大きさは短径1.58mで長径は計測不能であった。深さは0.63mである。長軸方位はＮ-68°-Ｅを指し。遺物は出土しなかった。

第９-43号土壙（第316図）

Ｍ９・Ｄ５グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。長径は0.62m、深さは0.24mである。遺物は出土しなかった。

第９-45号土壙（第316図）

Ｍ９・Ｄ７グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.00m、短径は0.65m、深さは0.24mである。長軸方位はＮ-27°-Ｗを指す。遺物は出土しなかった。

第９-46号土壙（第316図）

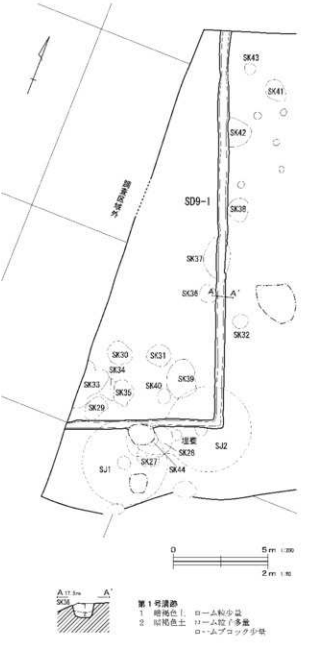
Ｍ９・Ｄ７グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。径は1.33m、深さは0.25mである。遺物は出土しなかった。

（２）溝跡

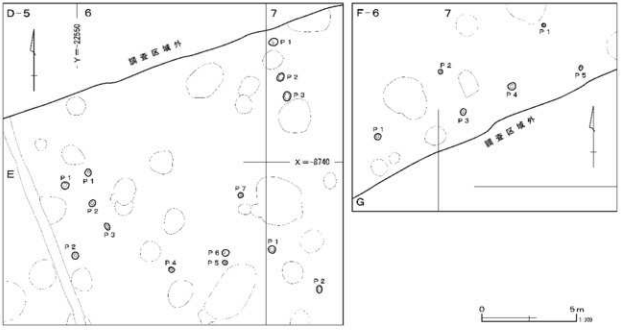
第９-１号溝跡（第317図）

Ｍ９・Ｄ５、Ｅ５、Ｅ６、Ｆ５、Ｆ６、Ｇ５グリッドに位置する。検出した範囲内での総延長は29.0m、幅は0.7m、深さは0.3mを測る。方位はＮ-67°-ＥとＮ-21°-Ｗを指す。平面形はＬ字状、断面形はＵ字状である。

遺物は出土しなかった。



第317図　溝跡



第318図　ピット

（3）ピット（第318図）

グリッドピットはM9・D7、E5、E6、E7とM9・F6、F7グリッドから20基検出された。

ピットの分布は散漫であった。

第36表　ピット計測表

地点	グリッド	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
9	M9・E5	1	0.38	0.34	0.14
9	M9・E5	2	0.34	0.32	0.20
9	M9・E6	1	0.37	0.33	0.43
9	M9・E6	2	0.36	0.29	0.17
9	M9・E6	3	0.36	0.27	0.19
9	M9・E6	4	0.30	0.28	0.27
9	M9・E6	5	0.26	0.22	0.15
9	M9・E6	6	0.34	0.32	0.24
9	M9・E6	7	0.28	0.28	0.37
9	M9・F6	1	0.32	0.31	0.18

地点	グリッド	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
9	M9・D7	1	0.48	0.34	0.53
9	M9・D7	2	0.45	0.32	0.07
9	M9・D7	3	0.48	0.38	0.10
9	M9・E7	1	0.39	0.38	0.27
9	M9・E7	2	0.28	0.28	0.26
9	M9・F7	1	0.22	0.18	0.12
9	M9・F7	2	0.32	0.27	0.36
9	M9・F7	3	0.36	0.30	0.27
9	M9・F7	4	0.47	0.39	0.12
9	M9・F7	5	0.26	0.18	0.22

Ⅸ　第10地点の遺構と遺物

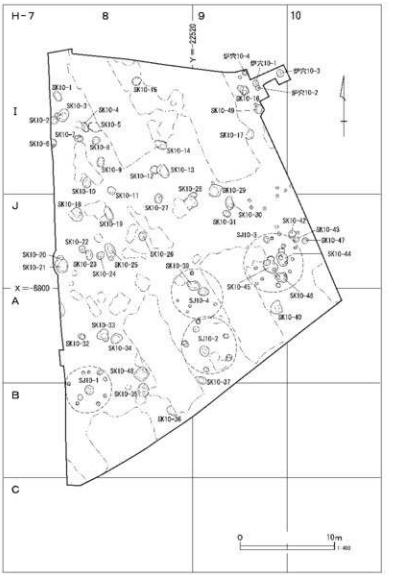
1．概　要

第10地点は遺跡範囲の南東部、一般国道16号バイパスの南側に位置している。調査区は台地の東縁の平坦部に当たる。調査区全体に攪乱が多く、遺構の遺存状況は悪かった。

発掘調査の結果、旧石器時代は石器集中４箇所が検出された。石器の出土層位は、第Ⅲ～Ⅳ層中である。

縄文時代は、調査区北東端に早期の炉穴４基がまとまって検出された。中期末葉から後期初頭は住居跡４軒、土壙40基が検出された。住居跡は調査区の南側にまとまっていたが、柱穴と炉跡のみで、遺物は少なかった。土壙は調査区全域に分布するが、北側に密である。

近世は、土壙７基が検出された。



第319図　第10地点全体図

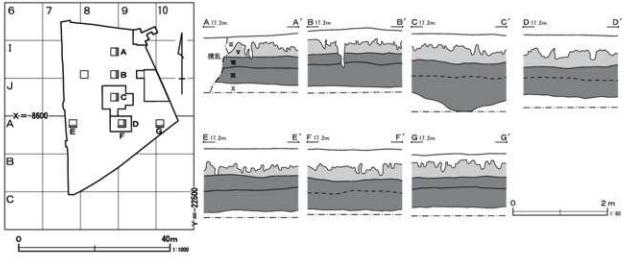
2．旧石器時代

旧石器時代の調査は、調査区の南北中央ライン上に２×２ｍの小グリッドを４箇所設定し、合わせて西側２箇所、東側２箇所の合計８箇所でローム層の掘り下げを行った。

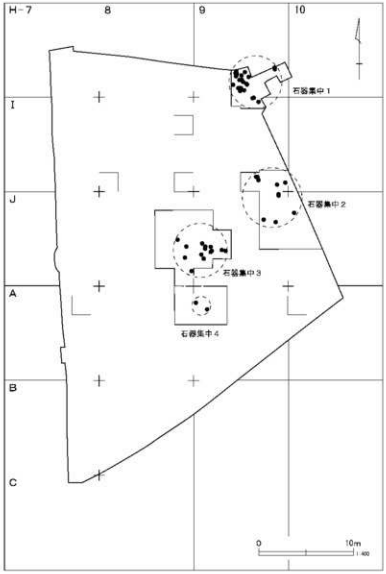
ローム層の堆積状況は、第Ⅲ層（ソフトローム）が第Ⅴ層（第１暗色帯）中まで達しており、第Ⅳ層（ハードローム）は確認できなかった。第Ⅶ・Ⅸ層（第２暗色帯）は２層に明確に分かれるグリッドと、あまり明確でないグリッドがあった。

次に南北ラインのＡ～Ｄ断面図をみると、ローム層の堆積は北から南方向に若干下がっている。東西ラインのＥ～Ｇ断面図をみると、ローム層の堆積は殆ど水平である。

調査の結果、Ｍ９・Ｈ９、Ｉ９、Ｊ８～10、Ｎ９・Ａ９グリッドで石器が検出され、調査範囲を広げて旧石器時代の調査を行った。また、調査区北東部付近で石器集中が検出された。



第320図　第10地点旧石器調査区



第321図　旧石器時代全体図

第10-1号石器集中（第322～329図）

石器集中は、M9・H9、I9グリッドに位置する。

調査区の北東コーナーにあたり、調査区外に広がっている可能性が高い。石器点数は21点、礫1点が出土し、第10地点では最も点数が多く、器種が充実している。

遺物分布は調査区北東部から、南北約2.3m、東西約1.9mの密集部があり、やや離れて南東に離れて3点が出土した。

石器の出土層位は第Ⅲ層である。

器種分布（第322図）

器種の分布状況は、密集部の北東側から、削器・剥片・石核・敲石が出土した。削器は密集部の中央から、敲石が北端から出土している。7・8の剥片と9の石核が検出され、剥片は石核に接合する。各接合距離は7と9が1.0m、8と9が0.4mである。

南西側からは、剥片・砕片・磨石・礫が出土している。磨石は集中部西端で、少し離れた地点から検出された。剥片類と礫は東側に少し離れ、まとまって出土した。

密集部から南東に離れた地点から、3点出土した。石核2点と削器1点である。11の石核に10の剥片が接合するが、10の剥片はグリッドからの検出で、出土地点は不明である。

石器石材分布（第323図）

黒色頁岩が10点、48%と全体の約半分を占める。分布は密集部北東にまとまる傾向がある。一方、黒耀石は5点、24%と黒色頁岩に次ぐが、分布は密集部内に散漫である。

出土石器（第324～329図）

1は上半部を欠損する。端部及び右側縁に剥離加工が施されており、削器と思われる。素材剥片は上位の縦長剥片で、正面の剥離面は主要剥離面と同一方向である。

2は右側縁を欠損する。外形は幅広の菱形状を呈している。打面は大きく自然面である。正面を構成する剥離面は、主要剥離面とほぼ同じ上位方向から施されているが、規則性はみられない。横断面は台形状である。右側縁下半部に、微細な剥離加工が観察でき、削器と分類した。

3と4は剥片である。3は長幅比がほぼ同じ方形の剥片である。打面は単価剥離面で大きい。正面に自然面を残している。4は長幅比が約2対1で、本石器集中で最も整った剥片である。正面の剥離面は複数方向から施され、規則性はあまりみられない。打面は大きく、単剥離面である。

5は敲石である。左側から上半部を正面方向からの力によって半分に欠損している。端部の痕跡は明確で、敲打痕と共に剥離痕がみられる。

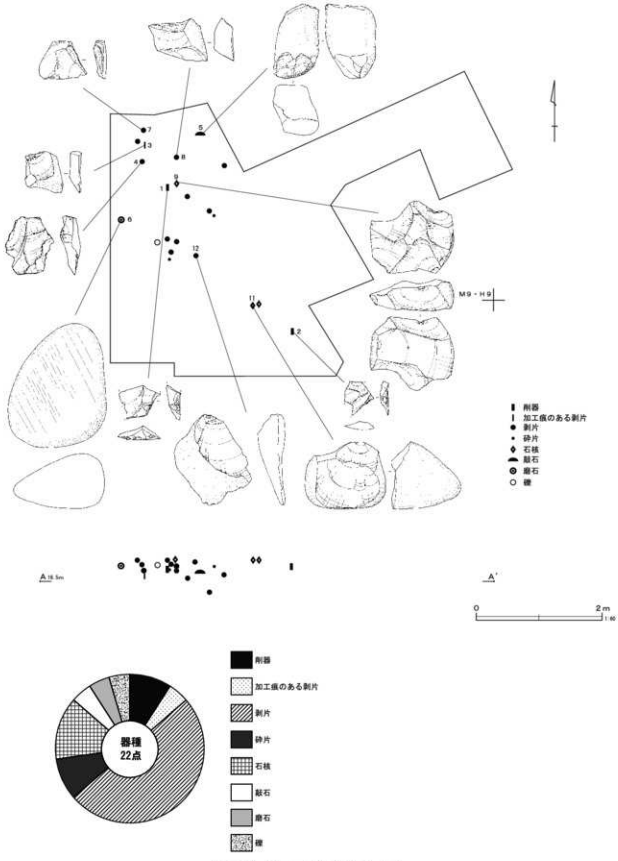
6は磨石である。楕円形の楕円礫で、両面の平坦面に磨耗痕がみられる。

7～9は接合資料である。7は端部が広がる幅広剥片である。打面は自然面、正面を構成する剥離面は複数方向の求心状剥離である。8は幅広厚手の剥片である。断面は単剥離面で大きい。正面は上下方向からの剥離面と、右側側面に自然面が残されている。

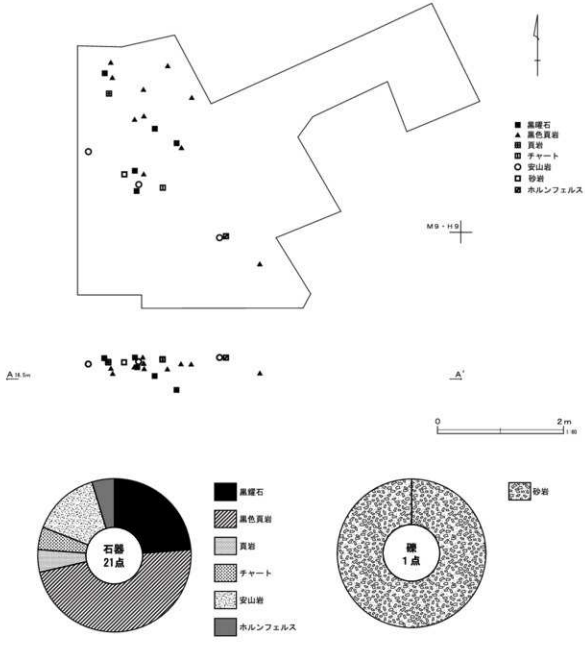
9は大形厚手の剥片を素材とした石核である。主要剥離面を底面とし、正面に求心状の剥離が施され、それを打面に正面から裏面方向に、幅広剥片を作出している。7は正面の求心状の剥片剥離過程で作出された剥片、8は正面から裏面方向の剥片剥離で作出された剥片である。接合状況は1.0m、0.4mと近接して出土している。

10と11は接合資料である。10は幅広剥片で右端部付近に打点がある。横断面は台形状を呈している。11は拳大より一回り大きな円礫が用いられており、作業面を正面に固定し、上面に打面を形成している。10の剥片は打面作出剥片と思われる。グリッド出土のため、接合状況は不明である。

12はチャート製の大形剥片である。外形は中央部が洋梨状に膨らんでおり、打面は剥片作出の際



第322図　第10－1号石器集中（1）



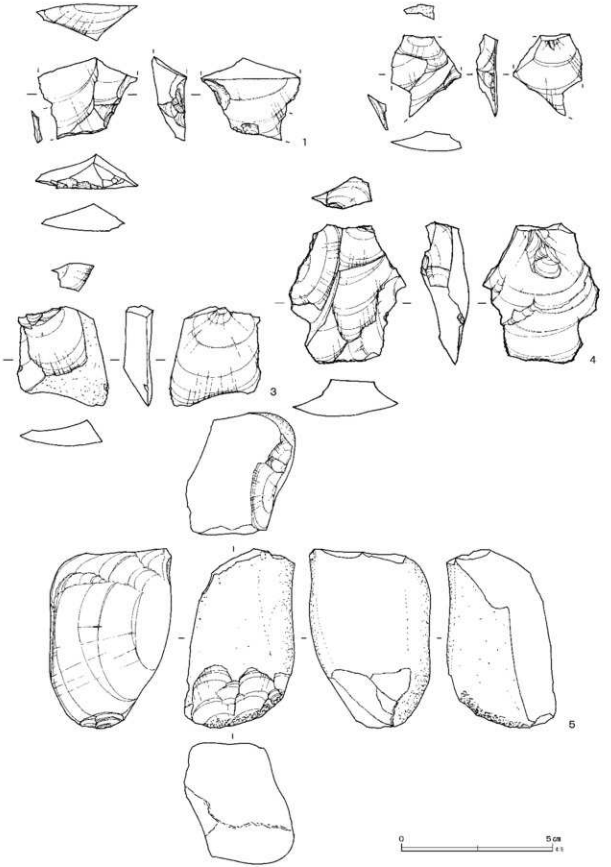
第323図　第10-１号石器集中（２）

に潰れたものと思われる。正面に自然面を大きく残し、石器石材としてはあまり良質ではない。

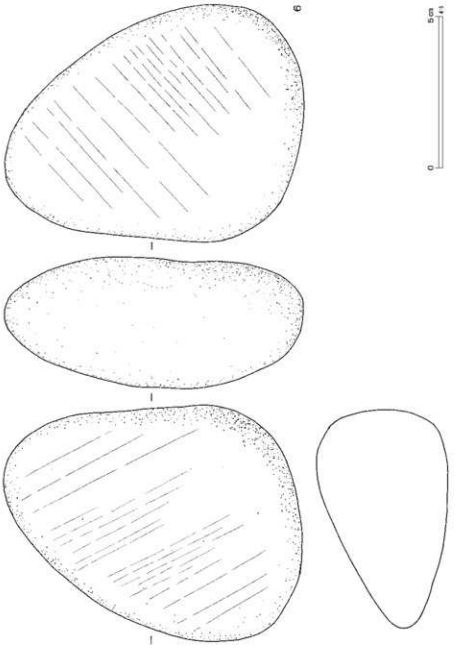
第10-２号石器集中（第330～332図）

石器集中は、Ｍ９・Ｉ９、Ｊ９、Ｊ10グリッドに位置する。

旧石器時代に確認調査の際、Ｍ９・Ｉ９グリッ



第324図　第10-１号石器集中出土遺物（１）



第325図　第10-1号石器集中出土遺物（2）

ドから剝片4点が検出され、東側を拡張した。その結果、石器7点、礫2点の合計9点が検出された。

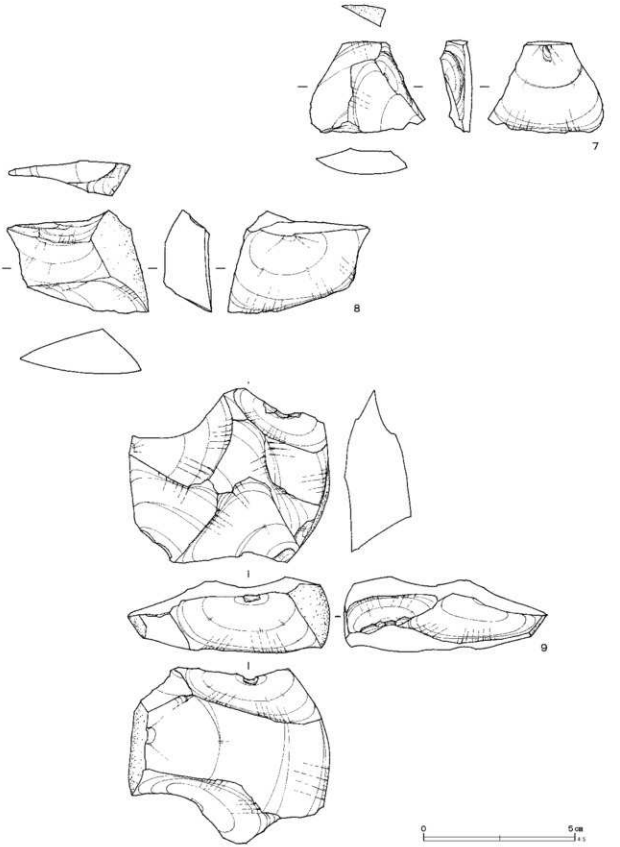
遺物の分布は、北西から南東方向で約5.6m、南西から北東方向に約2.0mの範囲に、剝片と石核が散漫に分布する。また、南西約2.0m離れて礫が2点出土している。

接合資料は、4の石核に3の剝片が接合している。接合距離は約3.0mである。

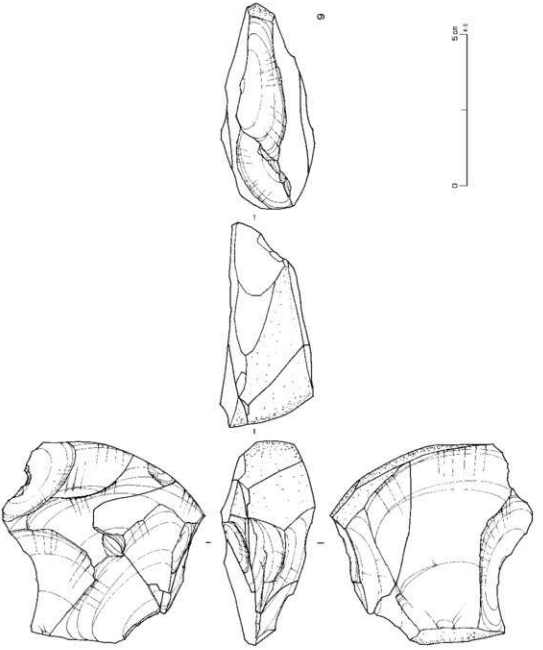
石器の出土層位は第Ⅲ層である。

器種分布（第330図）

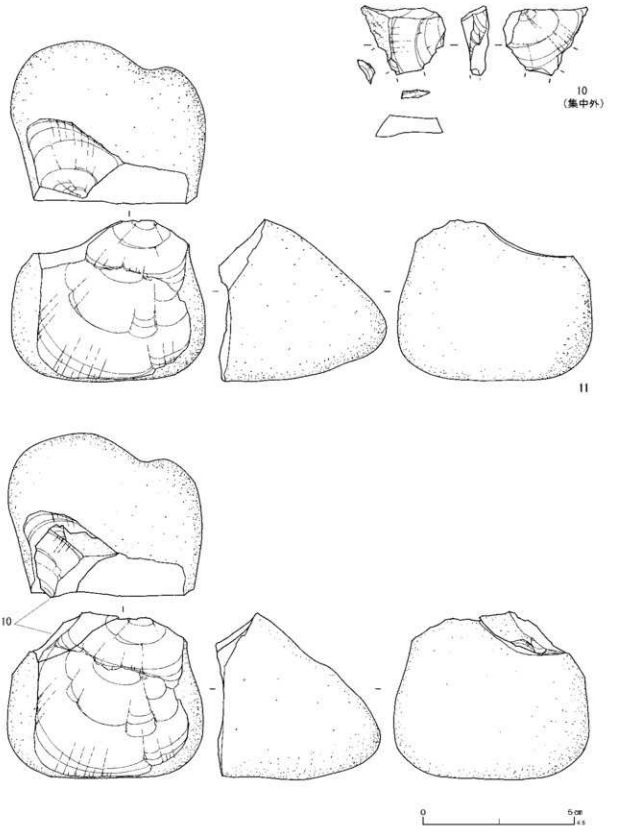
石器は7点と少なく、器種ごとの分布の偏在性はみられない。石核は東端から出土した。礫は南西に少し離れており、石器との間に分布の違いが



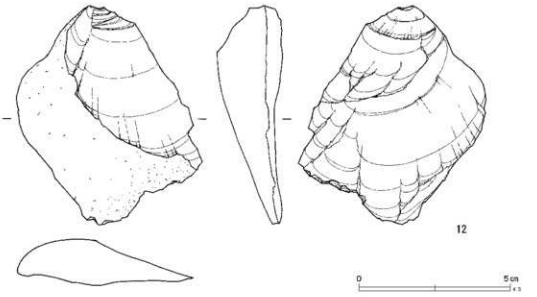
第326図　第10-１号石器集中出土遺物（３）



第327図　第10-１号石器集中出土遺物（４）



第328図　第10-１号石器集中出土遺物（５）



第329図　第10-１号石器集中出土遺物（６）

みられる。

石器石材分布（第331図）

石器及び礫の石器石材は、すべてチャートが用いられている。

出土石器（第332図）

１は剥片である。端部は正面から裏面方向に、右側縁は正面から裏面方向の力によって折損している。打面は単剥離面で大きく、三角形状を呈している。正面の剥離面は主要剥離面とほぼ同一方向である。

２は縦長剥片である。端部を裏面方向からの力によって折損している。外形は両側縁がほぼ並行しているが、断面は厚手の台形状を呈している。打面は単剥離面で、器幅いっぱいである。正面の剥離面は、３面とも主要剥離面とほぼ同一方向である。左側縁に自然面を残している。

３の剥片と４の石核は接合資料である。接合状況は遺物分布の北側に並び、3.0mの距離で接合している。３は幅広厚手剥片で、端部に石核の主要剥離面を取り込んでいる。打面は単剥離面である。正面は自然面を大きく残している。４は大形厚手の剥片を素材とした石核である。主要剥離面を底面とし、正面を打面に輪切り状に剥片剥離作業をおこなっている。

第10-３号石器集中（第333～335図）

石器集中は、Ｍ９・Ｊ８、Ｊ９グリッドに位置する。

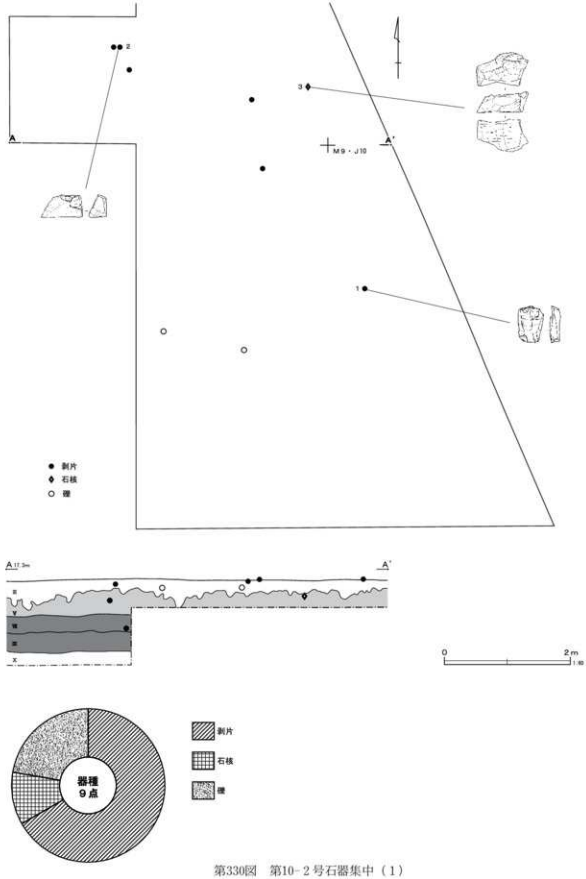
旧石器時代確認調査の際、Ｍ９・Ｊ８グリッドから剥片と礫が各１点検出され、周辺を拡張して調査をおこなった。その結果、剥片９点、砕片１点と礫４点の合計14点が出土した。

遺物の分布状況は、東西約5.1m、南北約2.0mの範囲に帯状に分布し、南に約1.2m離れて剥片が１点出土した。

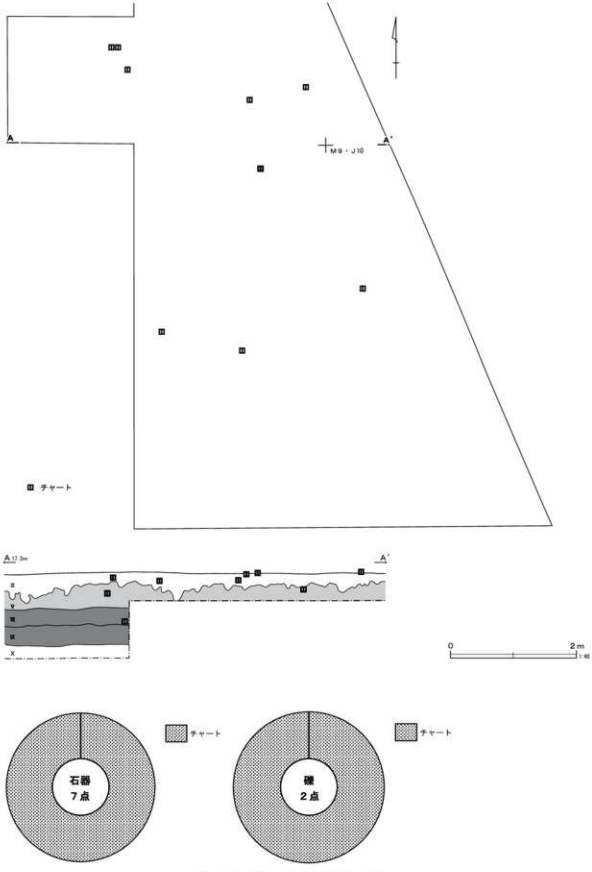
石器の出土層位は第Ⅲ層である。

器種分布（第333図）

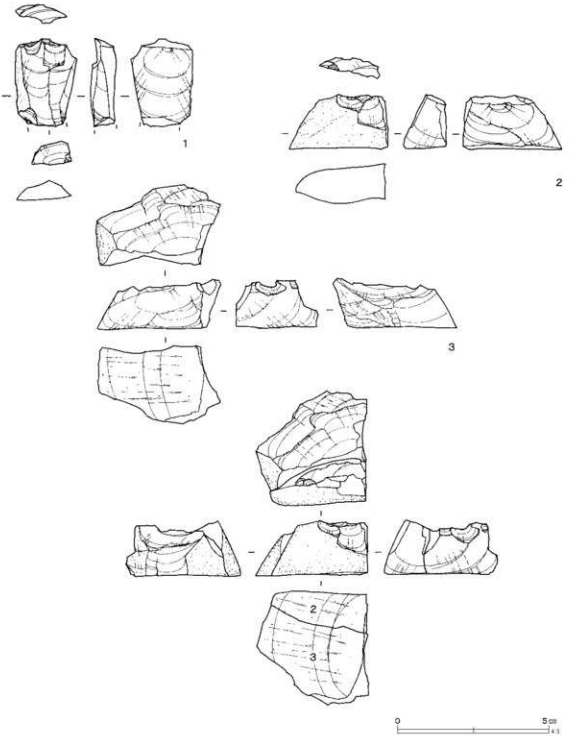
剥片９点が東西約5.2mの帯所状に分布し、砕片が分布の西側、第335図２の剥片に近接して出



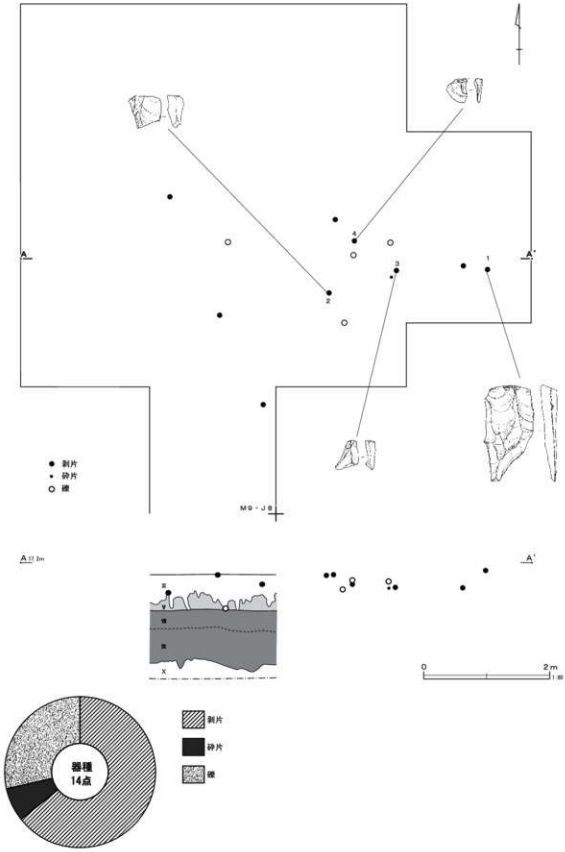
第330図　第10-2号石器集中（1）



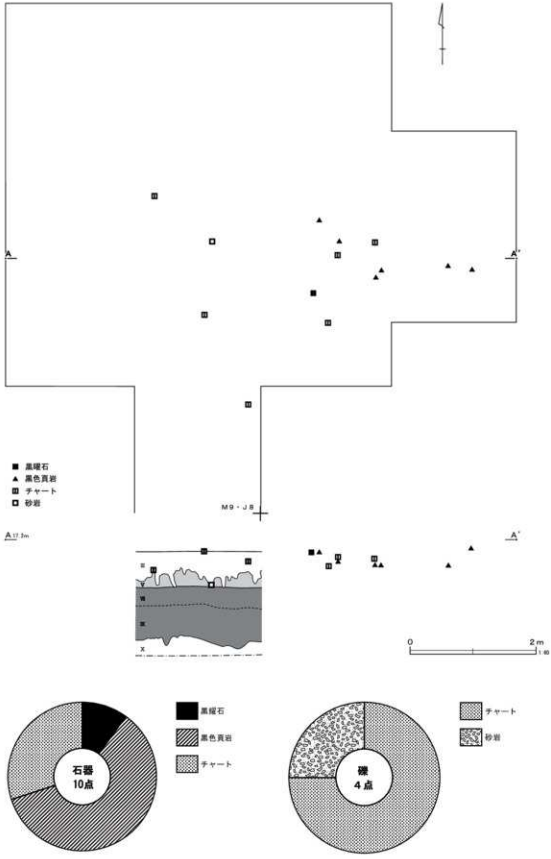
第331図　第10-2号石器集中（2）



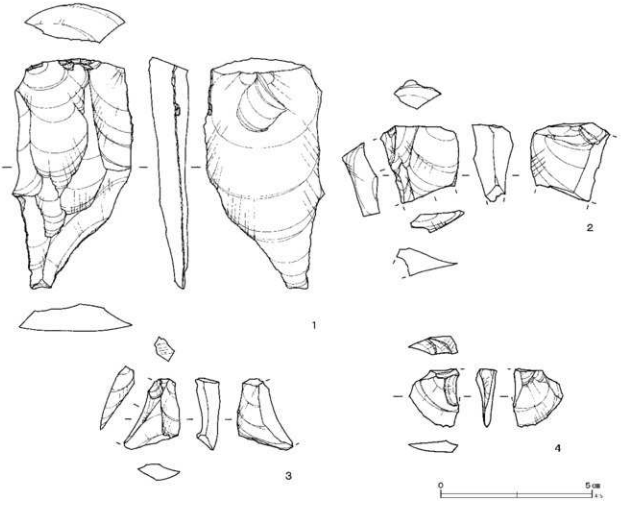
第332図　第10-2号石器集中出土遺物



第333図　第10-3号石器集中（1）



第334図　第10-3号石器集中（2）



第335図　第10-３号石器集中出土遺物

土している。礫は石器の分布と有意な差はなく、散漫に分布している。

石器石材分布（第334図）

石器石材は、黒色頁岩を主体に、チャートと黒耀石が用いられている。東側に黒色頁岩製の剥片が、西側にチャート製の剥片が分布し、礫はチャートが多く用いられている。

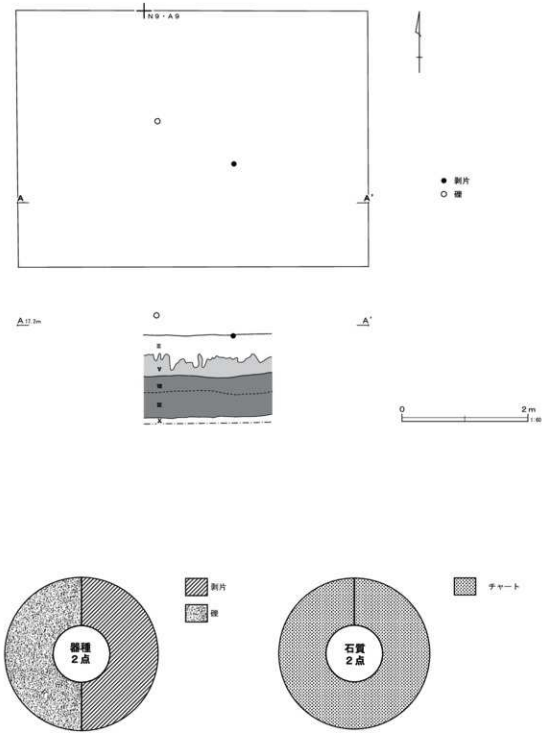
出土石器（第335図）

１は縦長剥片である。端部を一部欠損している。外形は、最大幅及び最大厚が打面付近にあり、基部上半部は両側縁が並行し、端部は窄まり尖るようになっている。打面は単剥離面で、幅広厚手と大きい。横断面は台形状を呈している。

正面を構成する剥離面は、上半部は主要剥離面と同じく、上位から施されており、下半部右側に側面方向からの剥離面がみられる。

２は幅広の剥片である。左側を大きく欠損する。打面は節理面と思われる。正面の剥離面は複数方向から施されており、規則性はみられない。

３は貝殻状の剥片である。右側を欠損する。打面付近は剥片作出の時点で潰れており、細部の観察は不能であった。上面は単剥離の大きな面があり、打面を想定される。端部は薄くなっており、石核の調整加工等の際に作出された剥片と思われる。



第336図　第10-4号石器集中

第10-4号石器集中（第336図）

石器集中は、N9・A9グリッドに位置する。

旧石器時代の確認調査の際、2m四方のグリッドから剥片と礫が検出され、その周辺を拡張して調査をおこなったが、他には出土しなかった。

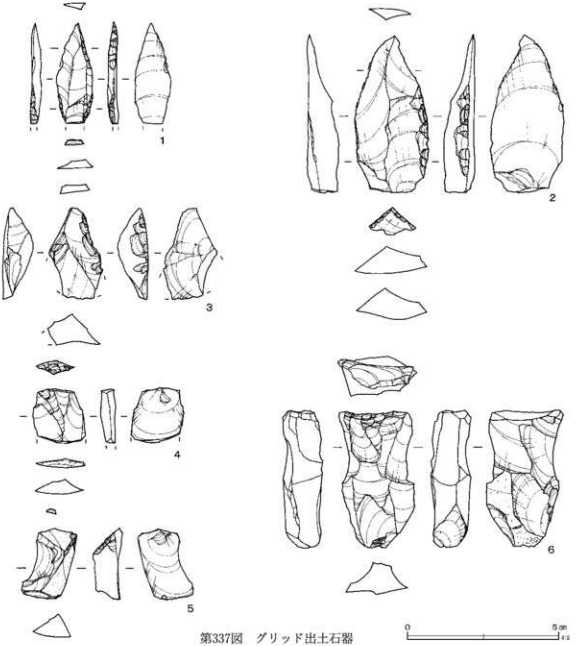
石器の出土層位は第Ⅲ層である。

出土遺物は剥片1点と礫1点である。石器石材は剥片と礫共にチャートである。

グリッド出土の石器（第336図）

1はナイフ形石器である。基部を欠損する。外形は左右対称の槍先状を呈し、刃部は左刃である。素材剥片は縦長剥片を下位に用いており、正面の剥離面は主要剥離面と90°逆方向がみられ、両設打面石核から作出されたと考えられる。調整加工は、右側縁は基部と先端にプランティング加工、中間部は微細剥離が施されている。左側縁へ基部側にプランティング加工が施されており、二側縁加工である。

2は縦長剥片を下位に用いており、打面は単剥離面で大形の三角形を呈している。外形は打面付



第337図　グリッド出土石器

近に最大幅があり、左右対称の縦長の三角形をしている。横断面は、稜線が中央に位置し、厚手の三角形状を呈している。正面の剥離面は複数方向から施されており、規則性はみられない。調整加工は、右側縁にやや粗いプランティングが施されている。形態からナイフ形石器と考えられる。

3は厚手横長剥片に一部に剥離加工が施されており、削器と思われる。外形は、基部が幅広で先端が細くなっており、ヘラ状を呈している。基部下半部の左右側縁を欠損する。刃部加工は右側縁に施されているが、作りは粗い。

4・5は剥片である。3は下半部を折損している。4は正面に原石面を残し、横断面は厚手の三角形を呈している。

6は石核である。打面は単剥離面で打面調整は施されていない。横断面は薄く台形状を呈している。出作業面は、正面に固定されており頭部調整が見られる。裏面に原石面が残されており、剥片剥離作業が進行した残核である。

第37表　第10－1～4号石器集中・グリッド出土石器観察表

No.	遺構名	グリッド	遺物番号	北－南(m)	西－東(m)	標高(m)	層位	器種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	図版No.
1	10－1石器集中	M9・H9	11	8.24	4.90	16.66	Ⅲ	掻・削器	黒色頁岩	(2.75)	3.30	1.10	6.10	324－1
2	10－1石器集中	M9・I9	7	0.32	6.85	16.74	Ⅲ	掻・削器	黒色頁岩	(2.70)	2.30	0.70	2.80	324－2
3	10－1石器集中	M9・H9	7	7.58	4.55	16.59	Ⅲ	加工のある剥片	黒色頁岩	3.30	3.00	0.96	8.40	324－3
4	10－1石器集中	M9・H9	8	7.83	4.50	16.76	Ⅲ	加工のある剥片	頁岩	4.60	3.90	2.10	18.90	324－4
5	10－1石器集中	M9・H9	9	7.39	5.42	16.65	Ⅲ	敲石	黒色頁岩	5.90	3.60	4.00	92.60	324－5
7	10－1石器集中	M9・H9	10	8.75	4.18	16.73	Ⅲ	磨石	安山岩	9.80	7.80	4.30	356.40	329－6
8	10－1石器集中	M9・H9	6	7.33	4.52	16.67	Ⅲ	剥片	黒色頁岩	3.00	3.80	1.05	9.10	325－7
9	10－1石器集中	M9・H9	3	7.77	5.05	16.68	Ⅲ	剥片	黒色頁岩	3.40	4.70	1.16	19.80	325－8
10	10－1石器集中	M9・H9	2	8.18	5.05	16.83	Ⅲ	石核	黒色頁岩	2.50	6.65	5.80	91.10	325－9
11	10－1石器集中	M9・I9	4	0.10	6.23	16.82	Ⅲ	石核	安山岩	5.30	6.45	5.40	235.90	328－11
6	10－1石器集中	M9・H9	5	9.31	5.36	16.80	Ⅲ	剥片	チャート	7.20	6.20	2.15	58.20	328－12
12	10－1石器集中	M9・H9	4	8.67	5.64	16.71	Ⅲ	砕片	黒色頁岩	0.74	1.15	0.83	0.40	
13	10－1石器集中	M9・H9	12	9.10	4.75	16.76	Ⅲ	礫	砂岩	(6.15)	5.30	3.30	89.20	
14	10－1石器集中	M9・H9	13	9.05	4.90	16.82	Ⅲ	剥片	黒耀石	2.20	0.84	1.13	2.00	
15	10－1石器集中	M9・H9	14	9.25	4.96	16.77	Ⅲ	剥片	安山岩	(4.50)	(9.05)	5.50	210.80	
16	10－1石器集中	M9・H9	15	9.37	4.93	16.69	Ⅲ	砕片	黒耀石	1.18	0.66	0.63	0.30	
17	10－1石器集中	M9・H9	16	9.09	5.04	16.69	Ⅲ	剥片	黒色頁岩	1.40	0.80	1.25	0.30	
18	10－1石器集中	M9・H9	17	8.38	5.22	16.52	Ⅲ	剥片	黒耀石	1.44	0.67	0.43	0.30	
19	10－1石器集中	M9・H9	19	7.88	5.80	16.60	Ⅲ	剥片	黒色頁岩	1.23	1.30	0.35	0.50	
20	10－1石器集中	M9・H9	22	8.60	5.56	16.31	Ⅲ	剥片	黒耀石	2.08	0.84	0.36	0.50	
21	10－1石器集中	M9・I9	5	0.09	6.33	16.83	Ⅲ	石核	ホルンフェルス	5.60	8.00	4.85	209.90	
22	10－1石器集中	M9・H9	1	7.52	4.43	16.83	Ⅲ	剥片	黒耀石	1.39	0.94	0.22	0.20	
23	SK16		008					剥片	安山岩	(2.30)	2.80	0.90		328－10
24	10－2石器集中	M9・J10	1	2.28	0.58	17.11	Ⅲ	剥片	チャート	(2.90)	2.00	0.80	5.20	332－1
26	10－2石器集中	M9・I9	9	8.48	6.75	17.07	Ⅲ	剥片	チャート	1.80	3.30	1.40	9.00	332－2
25	10－2石器集中	M9・I9	8	9.10	9.69	16.86	Ⅲ	石核	チャート	1.60	4.10	2.70	16.00	332－3
27	10－2石器集中	M9・I9	3	9.30	8.81	17.10	Ⅲ	剥片	チャート	0.96	1.40	0.40	0.20	
28	10－2石器集中	M9・I9	10	8.83	6.90	16.37	Ⅶ	剥片	チャート	(1.14)	1.62	0.17	0.30	
29	10－2石器集中	M9・I9	11	8.48	6.65	16.80	Ⅲ	剥片	チャート	1.17	1.67	0.31	0.50	
30	10－2石器集中	M9・J9	3	0.37	8.97	17.14	Ⅲ	剥片	チャート	(1.15)	1.06	0.18	0.40	
31	10－2石器集中	M9・J9	13	2.93	7.43	16.97	Ⅲ	礫	チャート	5.13	3.47	3.31	77.00	
32	10－2石器集中	M9・J9	14	3.22	8.70	16.95	Ⅲ	礫	チャート	5.40	3.38	1.86	33.60	
33	10－3石器集中	M9・J9	2	6.17	3.30	17.08	Ⅲ	加工のある剥片	黒色頁岩	7.60	4.00	1.30	34.00	335－1
34	10－3石器集中	M9・J8	4	8.30	9.79	16.89	Ⅲ	剥片	チャート	1.40	1.59	0.35	0.70	335－2
35	10－3石器集中	M9・J9	9	6.19	1.88	16.83	Ⅲ	剥片	黒色頁岩	2.35	(1.80)	0.85	1.90	335－3
36	10－3石器集中	M9・J9	6	5.74	1.21	16.90	Ⅲ	剥片	黒色頁岩	1.90	1.65	0.70	1.30	335－4
37	10－3石器集中	M9・J8	1	5.02	8.30	16.72	Ⅲ	剥片	チャート	3.00	2.68	0.91	7.30	
38	10－3石器集中	M9・J8	2	5.74	9.22	16.49	Ⅲ	礫	砂岩	1.50	1.60	1.15	1.90	
39	10－3石器集中	M9・J8	3	6.88	9.10	17.03	Ⅲ	剥片	チャート	1.10	0.88	0.25	0.20	
40	10－3石器集中	M9・J9	1	6.55	0.81	17.02	Ⅲ	剥片	黒耀石	(2.60)	(2.60)	1.30	5.90	
41	10－3石器集中	M9・J9	5	5.40	0.89	17.04	Ⅲ	剥片	黒色頁岩	1.58	1.25	0.33	0.70	
42	10－3石器集中	M9・J9	7	5.94	1.19	16.94	Ⅲ	礫	チャート	3.35	2.40	1.03	7.20	
43	10－3石器集中	M9・J9	8	5.76	1.77	16.94	Ⅲ	礫	チャート	1.81	1.11	0.45	1.10	
44	10－3石器集中	M9・J9	10	6.30	1.78	16.83	Ⅲ	砕片	黒色頁岩	0.99	0.70	0.37	0.20	
45	10－3石器集中	M9・J9	11	6.12	2.93	16.81	Ⅲ	剥片	黒色頁岩	2.11	2.81	1.20	5.10	
46	10－3石器集中	M9・J9	12	7.01	1.06	16.90	Ⅲ	礫	チャート	1.65	1.03	1.13	1.90	
47	10－4石器集中	N9・A9	1	1.72	0.20	16.85	Ⅲ	礫	チャート	2.03	1.54	0.98	2.10	
48	10－4石器集中	N9・A9	2	2.40	1.40	17.02	Ⅲ	剥片	チャート	1.40	2.03	0.80	1.70	
49		M9・I9	004					ナイフ形石器	チャート	(3.30)	1.15	0.40	1.10	337－1
50			009					ナイフ形石器	チャート	5.15	2.45	1.00	9.60	337－2
51		M9・H8	001					加工のある剥片	黒耀石	3.00	(1.80)	1.00	3.20	337－3
52		M9・I8	003					剥片	チャート	(1.80)	1.75	0.50	1.50	337－4
53		M9・I7	002					剥片	黒耀石	2.30	1.75	1.05	2.20	337－5
54		M9・I9	005					石核	頁岩	4.50	2.60	1.30	14.10	337－6

3．縄文時代

第10地点から、住居跡４軒、土壙40基、炉穴４基が検出された。攪乱が多く、遺物量も少ないため遺構の詳細な時期が不明なものも多かった。

（１）住居跡

第10-１号住居跡（第338図）

Ｎ９・Ａ７、８、Ｂ７、８グリッドに位置する。掘り込みは確認できなかった。住居跡からは、炉跡とピットのみが検出された。周辺の住居跡と同様の時期とすれば、平面形は柄鏡形であったと推定される。またピットの配置から、主体部分は円形であったと考えられ推定される範囲は、径５ｍほどである。

炉跡は地床炉で、主体部のほぼ中央から検出されている。平面形はほぼ円形で、長径0.97m、短径0.90m、深さ0.25mである。

ピットは、９本が検出された。それぞれ深さはＰ１＝0.18m、Ｐ２＝0.30m、Ｐ３＝0.26m、Ｐ４＝0.41m、Ｐ５＝0.25m、Ｐ６＝0.28m、Ｐ７＝0.25m、Ｐ８＝0.15m、Ｐ９＝0.28mである。

遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、周辺から検出されている住居跡と同様、時期は中期末葉から後期初頭であると考えられる。

第10-２号住居跡（第339・340図）

Ｎ９・Ｈ８、９グリッドに位置する。北側で第10-４号住居跡と接している。掘り込みは確認できなかった。住居跡からは、炉跡とピットのみが検出された。出土した土器の時期から、平面形が柄鏡形であったと推定される。ピットの配置から、主体部分は円形であったと考えられる。推定される主体部分の範囲は、径６ｍほどである。

炉跡は地床炉で、推定した主体部のやや南西よりから検出された。平面形は楕円形で、長径1.10m、短径1.00m、深さ0.32mである。

ピットは、７本が検出された。深さはＰ１＝0.18m、Ｐ２＝0.21m、Ｐ３＝0.25m、Ｐ４＝0.18m、Ｐ５＝0.26m、Ｐ６＝0.25m、Ｐ７＝0.26mである。

第340図１～３は、炉跡やピット内から出土した土器である。

１は環状把手部分で、盲孔を基点としてＣ字状文を施文するものである。２・３は胴部の破片で、平行する沈線で文様を施文するもので、２は単節ＬＲの縄文を、３は列点文を充塡している。２は称名寺式中段階、１、３は称名寺式終末の土器で、時期は後期初頭である。

第10-３号住居跡（第341図・第342図）

Ｍ９・Ｈ９、10、Ｎ９・Ａ９グリッドに位置する。掘り込みは確認できなかった。住居跡の西側は大きく攪乱を受けている。住居跡内からは、第10-44・45・46号土壙が重複して検出された。

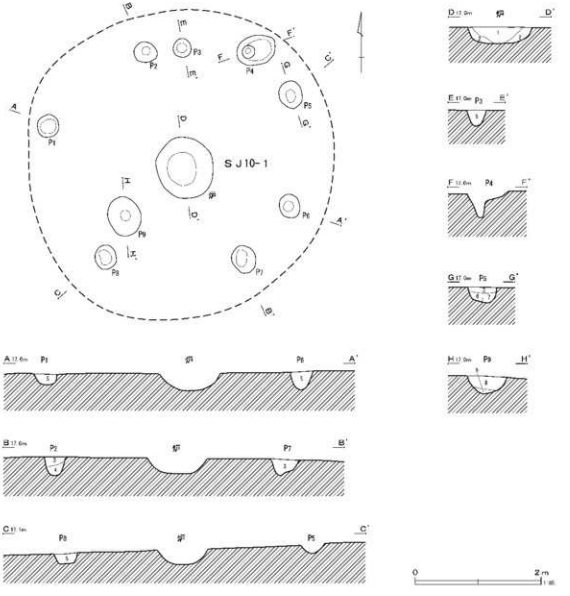
住居跡からは、炉跡と埋甕とピットが検出された。出土した土器の時期から、平面形は柄鏡形と推定される。またピットの配置から、主体部分は円形であったと推定され、径は6.30m程度である。

炉跡は第10-45号土壙と重複して検出された。住居跡の中央やや西よりから検出され、長径0.72m、短径0.55m、深さ0.11mである。

ピットは15本が検出された。深さはＰ１＝0.29m、Ｐ２＝0.27m、Ｐ３＝0.20m、Ｐ４＝0.25m、Ｐ５＝0.21m、Ｐ６＝0.28m、Ｐ７＝0.28m、Ｐ８＝0.22m、Ｐ９＝0.31m、Ｐ10＝0.16m、Ｐ11＝0.30m、Ｐ12＝0.32m、Ｐ13＝0.26m、Ｐ14＝0.30m、Ｐ15＝0.47mである。

埋甕は住居跡の北東側から検出され、第342図１の土器が正位で埋設されていた。長径0.84m、短径0.81m、深さ0.48mである。

出土した遺物は、埋甕として埋設されていた第342図１のみである。１は深鉢形土器の胴下半部で、上半部は削平や攪乱などによって失われたと



SJ10-1

炉

1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子若干　焼土ブロック少量

2　暗褐色土　焼土粒子を斑文状に極少　ロームブロック少量

ピット

3　暗褐色土　ローム粒子少量

4　暗褐色土　ローム粒子若干

5　暗褐色土　ローム粒子を斑文状に少量

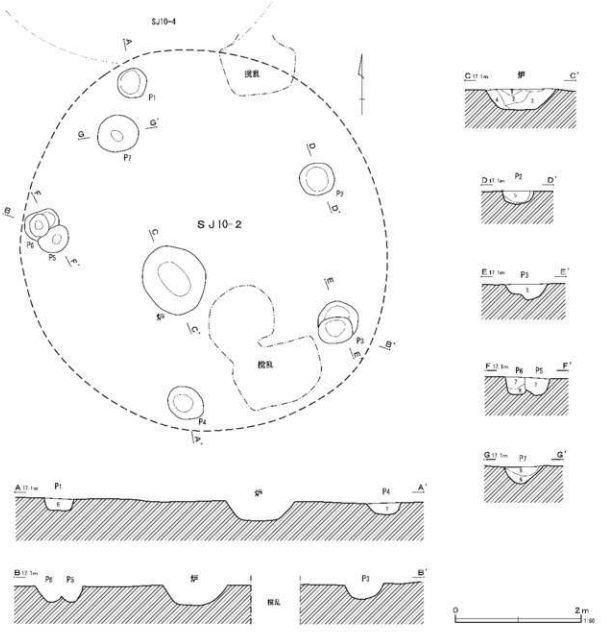
6　暗褐色土　ローム粒子を斑文状に若干

7　黒褐色土　ローム粒子を斑文状に少量

8　暗褐色土　褐色ローム若干

9　暗褐色土　ロームブロックを斑文状に少量

第338図　第10－1号住居跡



SJ10-2

炉

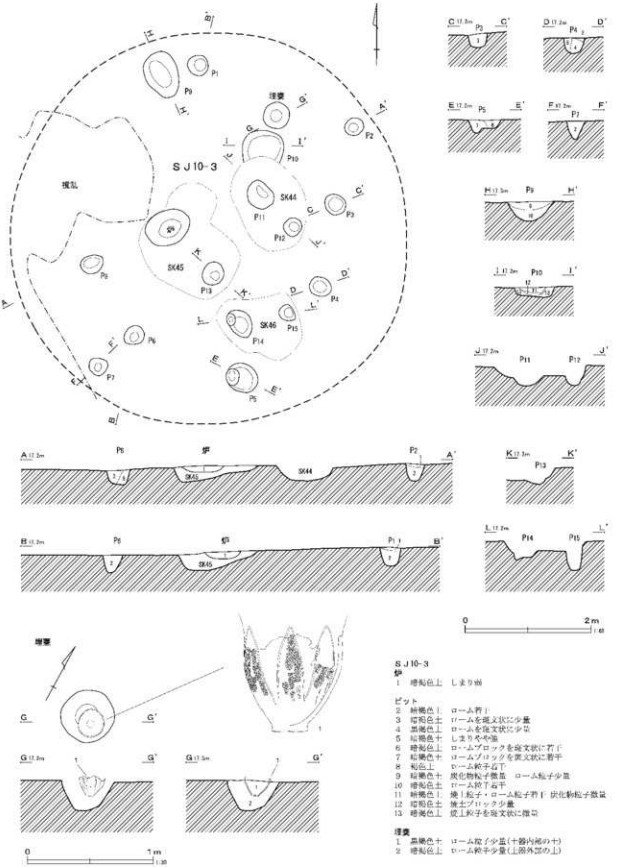
1 紫褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子を斑文状に若干
2 暗赤褐色土　焼土粒子多量　焼土ブロック少量
3 暗褐色土　焼土粒子・ロームブロック少量
4 にぶい黄褐色土　ロームブロック若干

ピット

5 暗褐色土　ロームブロック少量　炭化物粒子微量
6 紫褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量
7 暗褐色土　ローム粒子少量
8 褐色土　ローム主体層
9 黒褐色土　ローム粒子を斑文状に微量
10 暗褐色土　ローム粒子・黒褐色土粒子微量

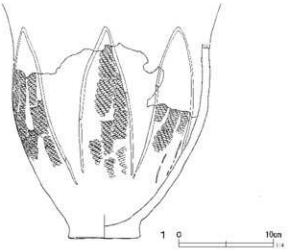
第339図　第10-2号住居跡

第340図　第10-2号住居跡出土遺物



第341図　第10-3号住居跡

考えられる。文様は沈線によって鋸歯状の文様を7単位施文している。文様内には、撚りのゆるい単節ＬＲの縄文を雑に充塡している。加曽利ＥⅣ式で、中期末葉から後期初頭と考えられる。



第342図　第10-３号住居跡出土遺物

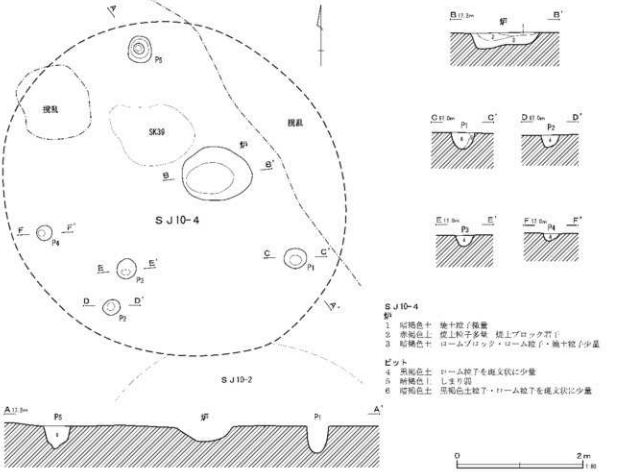
第10-４号住居跡（第343図）

Ｍ９・Ｊ８、９、Ｎ９・Ａ８、９グリッドに位置する。南側には第10-２号住居跡が隣接している。住居跡の周辺は攪乱が激しく、掘り込みは検出されず、炉跡とピットのみが検出された。周辺の住居跡と同様の時期とすれば、平面形は柄鏡形の可能性が高い。ピットの配置から、主体部分は円形と考えられ、推定範囲の径5.60mである。

炉跡は地床炉で、炉跡の長径1.10m、短径0.85m、深さ0.25mである。

ピットは５本検出された。深さはＰ１＝0.26m、Ｐ２＝0.20m、Ｐ３＝0.20m、Ｐ４＝0.12m、Ｐ５＝0.37mである。

遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、周辺から検出されている住居跡と同様、時期は中期末葉から後期初頭であると考えられる。



第343図　第10-４号住居跡

（2）土壙

土壙は40基検出された。土壙から遺物はほとんど出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、形状や覆土から縄文時代としたものである。

第10-1号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｈ7グリッドに位置する。南側に第10-3号土壙が近接して検出されている。平面形は楕円形で、長径1.12m、短径0.71m、深さ0.16mである。遺物は出土しなかった。

第10-2号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ7グリッドに位置する。土壙の西側部分は調査区域外の境界に接している。北東側で第10-3号土壙と接している。平面形はほぼ円形で、長径0.80m、短径0.78m、深さ0.20mである。遺物は出土しなかった。

第10-3号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ7グリッドに位置する。南西側で第10-2号土壙と接している。北側には第10-1号土壙が近接して検出されている。平面形は楕円形で、長径1.40m、短径1.06m、深さ0.48mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-4号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ7グリッドに位置する。一部が攪乱によって失われている。東側で第10-5号土壙と接している。南側には、第10-7号土壙が近接して検出されている。平面形は楕円形で、残存する長径1.09m、短径0.70m、深さ0.25mである。遺物は出土しなかった。

第10-5号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ7グリッドに位置する。東側の一部が攪乱のため失われている。西側で第10-4号土壙と接している。南側には、第10-8号土壙が近接して検出されている。平面形は楕円形と考えられる。残存する部分の長径1.50m、短径1.10m、深さ0.15mである。土壙内からは、図示できる遺物は出土しなかった。

第10-6号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ7グリッドに位置する。西半部は調査区域外のため検出できなかった。残存する長径は0.98m、短径0.57m深さは0.19mである。遺物は出土しなかった。

第10-7号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ7グリッドに位置する。北側で第10-4号土壙が近接して検出されている。平面形は楕円形で、長径0.93m、短径0.70m、深さ0.25mである。遺物は出土しなかった。

第10-8号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ7グリッドに位置する。北側で第10-5号土壙が近接して検出されている。平面形は楕円形で、長径0.86m、短径0.72m、深さ0.19mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-9号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.02m、短径0.72m、深さ0.31mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-10号土壙（第344図）

Ｍ9・Ｉ7グリッドに位置する。北側の一部が攪乱のため失われている。平面形は楕円形で、長径1.14m、短径0.86m、深さ0.28mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-11号土壙（第344図）

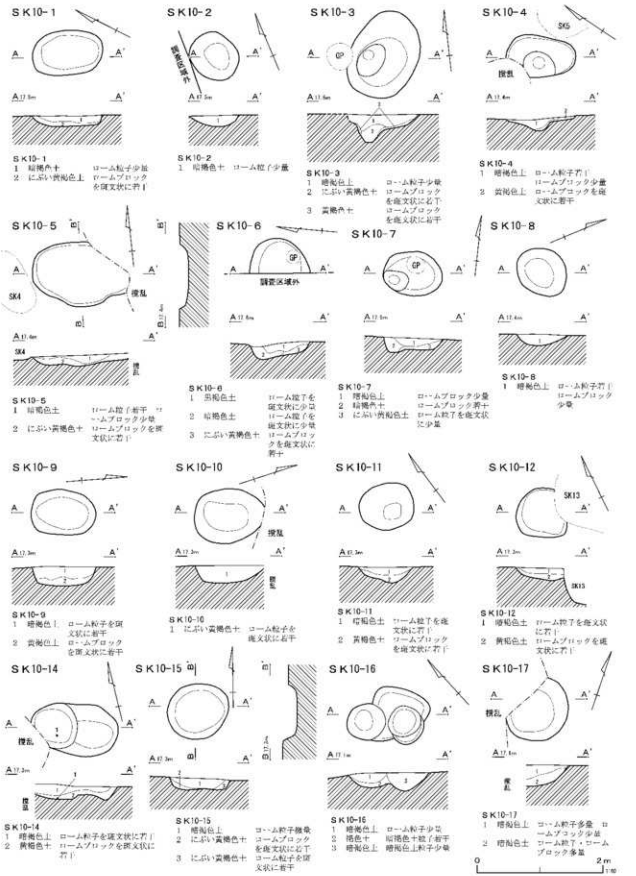
Ｍ9・Ｉ8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.87m、短径0.73m、深さ0.23mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-12号土壙（第344図）

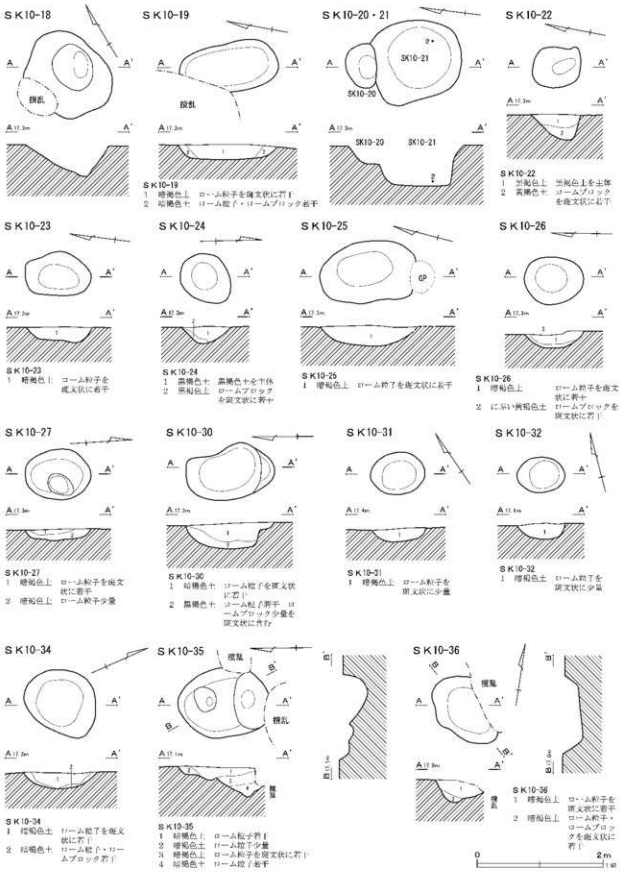
Ｍ9・Ｉ8グリッドに位置する。近世の第10-13号土壙によって、東側が部分的に失われていた。平面形は不定形で、長径0.82m、短径0.80m、深さ0.13mである。遺物は出土しなかった。

第10-14号土壙（第344図・第347図1）

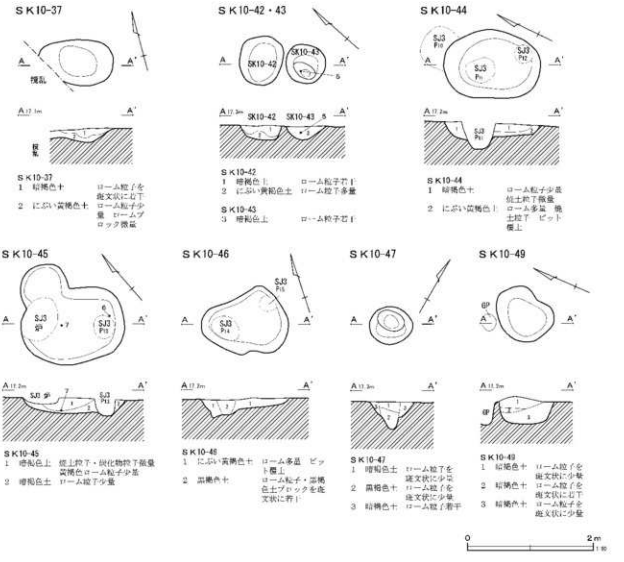
Ｍ9・Ｉ8グリッドに位置する。攪乱によって、土壙の西側の一部が失われている。北側も攪乱と接している。平面形は楕円形で、長径1.39m、短


SK10-1
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-2
撹乱
1 暗褐色土 ローム粒子少量
SK10-3
GP
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
3 黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-4
SK5
撹乱
1 暗褐色土 ローム粒子若干
ロームブロック少量
2 黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-5
SK4
撹乱
1 暗褐色土 ローム粒子若干
ロームブロック少量
2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-6
GP
調査区域外
1 黒褐色土 ローム粒子を斑文状に少量
2 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に少量
3 にぶい黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-7
GP
1 暗褐色土 ロームブロック少量
2 暗褐色土 ロームブロック若干
3 にぶい黄褐色土 ローム粒子を斑文状に少量
SK10-8
1 暗褐色土 ローム粒子若干
ロームブロック少量
SK10-9
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-10
撹乱
1 にぶい黄褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
SK10-11
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-12
SK13
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-14
撹乱
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-15
1 暗褐色土 ローム粒子微量
2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
3 にぶい黄褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
SK10-16
1 暗褐色土 ローム粒子少量
2 黄褐色土 暗褐色土粒子若干
3 暗褐色土 暗褐色土粒子少量
SK10-17
撹乱
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
0
2m

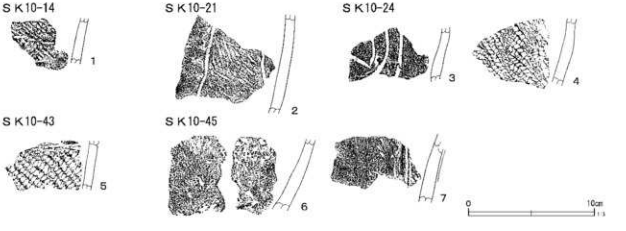
第344図　土壙（1）


SK10-18
撹乱
SK10-19
撹乱
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック若干
SK10-20・21
SK10-21
SK10-20
SK10-20
SK10-21
SK10-22
1 黒褐色土 黒褐色土を主体
2 黒褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-23
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
SK10-24
1 黒褐色土 黒褐色土を主体
2 黒褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-25
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
SK10-26
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを斑文状に若干
SK10-27
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 暗褐色土 ローム粒子少量
SK10-30
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 黒褐色土 ローム粒子若干 ロームブロック少量を斑文状に若干
SK10-31
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に少量
SK10-32
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に少量
SK10-34
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック若干
SK10-35
撹乱
撹乱
撹乱
1 暗褐色土 ローム粒子若干
2 暗褐色土 ローム粒子少量
3 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
4 暗褐色土 ローム粒子若干
SK10-36
撹乱
撹乱
1 暗褐色土 ローム粒子を斑文状に若干
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを斑文状に若干
0
2m

第345図　土壙（2）



第346図　土壙（3）



第347図　土壙出土遺物

径0.82m、深さ0.24mである。

第347図１は出土した深鉢形土器の胴部の破片である。器面には、地文として結節縄文を施文している。出土した土器の時期は、前期末葉から中期初頭と考えられる。

第10-15号土壙（第344図）

Ｍ９・Ｈ８グリッドに位置する。東側には規模の大きな攪乱が広がっている。平面形は楕円形で、長径0.98m、短径0.89m、深さ0.20mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-16号土壙（第344図）

Ｍ９・Ｈ９グリッドに位置する。調査区の北東端から検出された。平面形は不定形で、長径1.20m、短径0.84m、深さ0.30mである。遺物は出土しなかった。

第10-17号土壙（第344図）

Ｍ９・Ｉ９グリッドに位置する。攪乱によって、西側部分が失われている。長径1.02m、短径0.78m、深さ0.31mである。遺物は出土しなかった。

第10-18号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ７グリッドに位置する。土壙の一部が攪乱によって失われている。平面形は不定形で、長径1.40m、短径1.18m、深さ0.55mである。遺物は出土しなかった。

第10-19号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ８グリッドに位置する。攪乱によって、北西側で土壙の一部が失われている。平面形は楕円形で、長径1.57m、短径0.79m、深さ0.26mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-20号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ７グリッドに位置する。調査区西側の調査区域外の境界に接している。第10-21号土壙と重複するため、南半部が失われている。残存する長径0.66m、短径0.50m、深さ0.29mである。遺物は出土しなかった。

第10-21号土壙（第345図・第347図２）

Ｍ９・Ｊ７グリッドに位置する。調査区西側の調査区域外の境界に接している。第10-20号土壙と北側部分が重複している。平面形は楕円形で、長径1.52m、短径1.30m、深さ0.67mである。

第347図２は出土した深鉢形土器の胴部の破片である。沈線で文様を施文し、文様内には単節ＬＲの縄文を充塡している。加曽利EⅣ式で、中期末葉である。

第10-22号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ７グリッドに位置する。南東側で第10-23号土壙と接している。平面形は不定形で、長径0.82m、短径0.62m、深さ0.37mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-23号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ７グリッドに位置する。北西側で第10-22号土壙と接している。東側には第10-24号土壙が近接して検出されている。平面形は楕円形で、長径1.05m、短径0.69m、深さ0.23mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-24号土壙（第345図・第347図３・４）

Ｍ９・Ｊ８グリッドに位置する。西側に第10-23号土壙、東側に第10-25号土壙が近接して検出されている。平面形は楕円形で、長径0.87m、短径0.71m、深さ0.25mである。

第347図３・４は出土した深鉢形土器の胴部の破片である。３は器面に平行する沈線文で文様を施文するものである。沈線内は無文となっている。４は地文のみで、単節ＬＲの縄文を縦方向に施している。称名寺式の終末段階で、後期初頭である。

第10-25号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ８グリッドに位置する。西側には第10-24号土壙が近接して検出されている。土壙内南側で、グリッドピットと重複している。平面形は楕円形で、長径1.57m、短径0.96m、深さ0.36mである。遺物は出土しなかった。

第10-26号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ８グリッドに位置する。周辺には攪乱が広がっている。平面形は楕円形である。長径0.

94m、短径0.75m、深さ0.27mである。遺物は出土しなかった。

第10-27号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ８グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.05m、短径0.80m、深さ0.27mである。遺物は出土しなかった。

第10-30号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ９グリッドに位置する。土壙の南側には、第10-31号土壙が隣接している。平面形は楕円形で、長径1.40m、短径0.85m、深さ0.43mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-31号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｊ９グリッドに位置する。土壙の北側には、第10-30号土壙が隣接している。平面形は楕円形で、長径0.86m、短径0.67m、深さ0.24mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-32号土壙（第345図）

Ｎ９・Ａ７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.78m、短径0.56m、深さ0.23mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-34号土壙（第345図）

Ｍ９・Ａ８グリッドに位置する。土壙の西側には近世の第10-33号土壙が近接している。平面形は楕円形で、長径1.20m、短径1.00m、深さ0.27mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-35号土壙（第345図）

Ｎ９・Ｂ８グリッドに位置する。土壙の一部は攪乱によって失われている。平面形は楕円形で、長径1.33m、短径1.15m、深さ0.50mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-36号土壙（第345図）

Ｍ９・Ｂ８グリッドに位置する。平面形は楕円形と推定され、残存部分の長径1.25m、短径0.89m、深さ0.31mである。遺物は出土しなかった。

第10-37号土壙（第346図）

Ｎ９・Ａ９グリッドに位置する。北側には第10-２号住居跡が隣接して検出されている。西側の一部が、攪乱によって失われている。平面形は楕円形で、残存部分の長径1.20m、短径0.75m、深さ0.23mである。土壙から遺物は出土しなかった。

第10-42号土壙（第346図）

Ｍ９・Ｊ10グリッドに位置する。南西側には第10-３号住居跡が検出されている。第10-43号土壙と隣接する。平面形は楕円形で、長径0.78m、短径0.68m、深さ0.24mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-43号土壙（第346図・第347図５）

Ｍ９・Ｊ10グリッドに位置する。南西側には第10-３号住居跡が検出されている。第10-43号土壙と隣接している。平面形は円形で、径は0.60m、深さは0.29mである。

第347図５は出土した深鉢形土器の胴部の破片で、器面には地文である単節ＲＬの縄文が、横方向に施文されている。前期末葉から中期初頭の時期と考えられる。

第10-44号土壙（第346図）

Ｍ９・Ｊ９グリッドに位置する。第10-３号住居跡内から検出され、住居跡のピットが重複する。西側に第10-45号土壙、南側に第10-46号土壙が隣接して検出されている。平面形は楕円形で、長径は1.54m、短径は1.08m、深さは0.22mである。遺物は出土しなかった。

第10-45号土壙（第346図・第347図６・７）

Ｍ９・Ｊ９グリッドに位置する。第10-３号住居跡内から検出され、住居跡の炉跡やピットと重複している。東側に第10-44号土壙、南側に第10-45号土壙が隣接している。平面形は不定形で、長径1.66m、短径1.63m、深さ0.28mである。

第347図６・７は出土した土器である。６は微量に繊維が認められるもので、内外面に擦痕が認められる。早期後葉の条痕文系土器と考えられる。７は深鉢形土器の胴部の破片で、微隆起状の隆帯を垂下させている。加曽利EⅣ式の新段階で、中期末葉から後期初頭の土器である。

第10-46号土壙（第346図）

Ｍ９・Ｊ９グリッドに位置する。第10-３号住居跡内から検出された。土壙内には住居跡のピットが重複している。北側に第10-44･45号土壙が隣接して検出されている。平面形は不定形を呈する。長径1.37m、短径0.90m、深さ0.27mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第10-47号土壙（第346図）

Ｍ９・Ｊ10グリッドに位置する。西側に第10-３号住居跡、第10-43号土壙が隣接している。平面形はほぼ円形で、長径0.69m、短径0.60m、深さ0.45mである。遺物は出土しなかった。

第10-49号土壙（第346図）

Ｍ９・Ｉ９グリッドに位置する。土壙の東側は調査区域外となっている。平面形は不定形で、長径0.90m、短径0.75m、深さ0.34mである。遺物は出土しなかった。

（３）炉穴

炉穴は、調査区の北東隅から近接して４基が検出された。遺物は出土しなかったが、周辺から条痕文系土器が出土しており、早期の炉穴であると考えられる。

第10-１号炉穴（第348図）

Ｍ９・Ｈ９グリッドに位置する。南側に第10-２号炉穴が連結しており、同一の炉穴群と考えられる。焼土ブロック、焼土粒子が多量に検出されており、炉床であると考えられる。平面形はほぼ円形で、長径0.64m、短径0.60m、深さ0.26mである。

第10-２号炉穴（第348図）

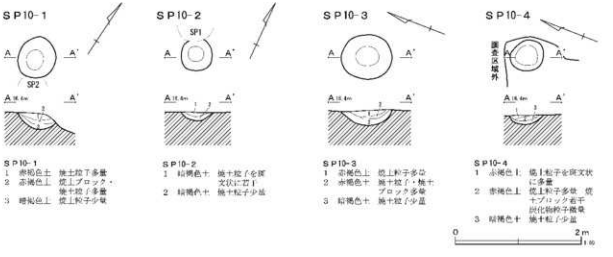
Ｍ９・Ｈ９グリッドに位置する。北側に第10-１号炉穴が連結しており、同一の炉穴群と考えられる。平面形はほぼ円形で、長径0.50m、短径0.49m、深さ0.12mである。

第10-３号炉穴（第348図）

Ｍ９・Ｈ９グリッドに位置する。覆土から焼土ブロック、焼土粒子が多量に検出されており、炉床であると考えられる。平面形は楕円形で、長径0.80m、短径0.69m、深さ0.25mである。

第10-４号炉穴（第348図）

Ｍ９・Ｈ９グリッドに位置する。北側の東側で、調査区域外と接して検出された。覆土から焼土ブロック、焼土粒子が多量に検出されており、炉床であると考えられる。平面形はほぼ円形で、長径0.53m、短径0.49m、深さ0.14mである。



第348図　炉穴

（4）グリッド出土遺物

出土土器

第Ⅰ群土器（第350図2～6）

早期後葉の条痕文系土器群を一括する。胎土に繊維を含み、内外面に条痕や擦痕を施文するものである。3・4、6は、M9・H9グリッドに位置する炉穴周辺から検出されたものである。2は口縁部、3～5は胴部、6は底部付近の破片である。2～4、6は条痕、5は擦痕を器面に施文するものである。

第Ⅱ群土器（第350図7・8）

前期末葉の土器群を一括する。7は集合平行沈線文を施文するもので、8は集合平行沈線文を施文した上に細い沈線文を施文している。胴部には単節ＲＬの縄文を、向きを変えて施文している。

第Ⅲ群土器（第350図9～13）

中期末葉の土器群を一括する。

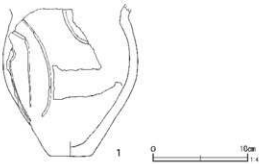
9～12は深鉢形土器の破片である。9・10は口縁部で、9は波状口縁で、狭い無文の口縁部と胴部は沈線を巡らして区画している。胴部には沈線で文様を施文している。地文は無節Ｌを施文している。10は狭い無文の口縁部と胴部とを沈線を巡らして区画している。胴部には間を磨り消す2本1組の沈線文を垂下させると考えられる。地文単節ＬＲの縄文を、口縁部直下は横方向に、他は縦方向に施文している。11・12は胴部で、間を磨り消す2本1組の微隆起状の隆帯を垂下させている。地文として11は単節ＬＲ、12は単節ＲＬの縄文を施文している。

13は両耳壺形土器の口縁から胴部の破片と考えられる。無文の口縁部と胴部とは微隆起状の隆帯を巡らして区画している。胴部には地文として単節ＬＲの縄文を横方向に施文している。

加曽利ＥⅣ式に相当する土器群で、後期初頭のものも含まれると考えられる。

第Ⅳ群土器（第350図1、14～26）

後期の土器群を一括する。



第349図　グリッド出土遺物（1）

1、14～18は称名寺式に相当する後期初頭の土器群である。平行する沈線文によって、文様を施文するものである。1は大きく括れる胴部を持つもので、胴下半部のみが検出された。文様内は無文である。14・15は口縁部の破片で、14は文様内に単節ＬＲの縄文を充填している。15は櫛歯状の条線を施文している。16～18は胴部の破片で、16・17は文様内に列点文を充填している。18の文様内は無文である。14は称名寺式中段階で、他は終末段階の土器である。

19～25は堀之内式に相当する後期前葉の土器群と考えられる。深鉢形土器の胴部の破片で、地文のみ施文するものがほとんどである。19～22は条線を施文するもので、19・20は条線を交差させて施文している。23～25は単節ＬＲの縄文を施文している。23は1本沈線を垂下させている。

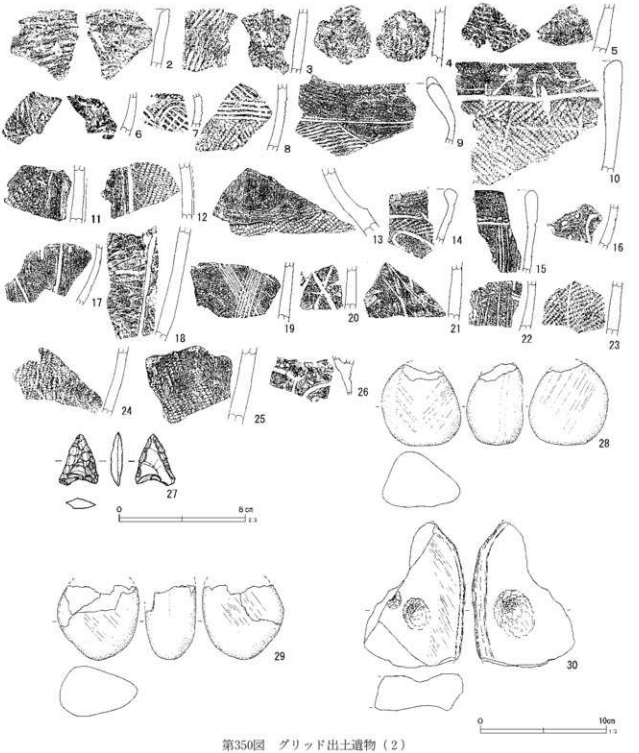
26は壺形土器の破片と考えられる。小型のもので、ミニチュア土器の可能性もある。器面には沈線文を施文し、文様内には2列の円形刺突文を施文している。

出土石器（第350図27～30）

27は無茎の石鏃で、裏面に1次剥離面が大きく残存している。基部には浅い抉りが入る。

28・29は磨石で、不定形な素材を使用している。表裏面を磨面として使用されている。

30は石皿の破片と考えられる。両面に凹部が認められる。



第350図　グリッド出土遺物（２）

第38表　出土石器観察表

図版No.	出土遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第350図27	Ｎ９・Ａ９	石鏃	安山岩	2.05	1.55	0.45	1.0	
第350図28	Ｍ９・Ｈ９	磨石	安山岩	(6.30)	6.20	4.35	162.0	
第350図29	Ｍ９・Ｈ９	磨石	安山岩	(5.80)	6.35	4.00	212.7	
第350図30	表採	石皿	緑色片岩	(11.56)	8.00	3.00	350.7	

4．近　世

（1）土壙

第10-13号土壙（第351図）

Ｍ９・Ｉ８グリッドに位置する。縄文時代の第10-12号土壙と重複する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.51m、短径は1.07m、深さは0.80mを測る。長軸方位はＮ-42°-Ｗを指す。

遺物は出土していない。

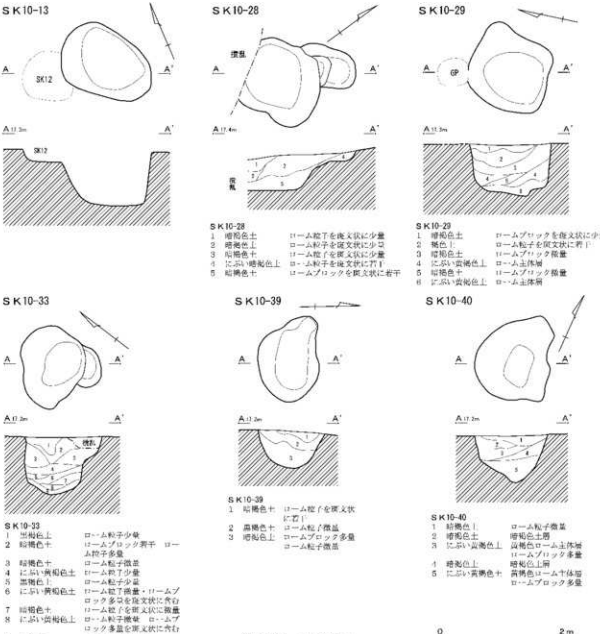
第10-28号土壙（第351図）

Ｍ９・Ｉ９、Ｊ８、Ｊ９グリッドに位置する。西側は攪乱で壊されている。平面形は隅丸方形を呈する。長軸は現況で1.80m、短軸は1.38m、深さは0.58mである。長軸方位はＮ-36°-Ｅを指す。

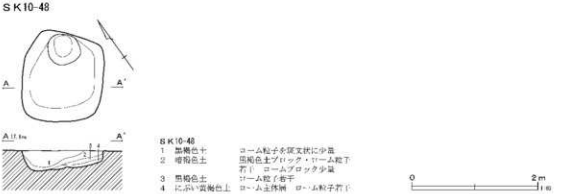
遺物は出土していない。

第10-29号土壙（第351図）

Ｍ９・Ｉ９、Ｊ９グリッドに位置する。平面形は隅丸方形に近く、底面は平坦である。長軸は1.



第351図　土壙（1）



第352図　土壙（２）

53m、短軸は1.19m、深さは0.85mである。長軸方位はN-12°-Wを指す。

遺物は肥前の碗破片が出土した。

第10-33号土壙（第351図、第353図１）

Ｎ９・Ａ８グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径は1.30m、短径は1.31m、深さは0.90mである。長軸方位はN-55°-Eを指す。

遺物は瀬戸・美濃系の摺鉢が出土した。

第10-39号土壙（第351図）

Ｍ９・Ｊ８、Ｊ９、Ａ９グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈する。長径は1.37m、短径は1.10m、深さは0.59mである。長軸方位はN-65°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第10-40号土壙（第351図）

Ｎ９・Ａ９グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈する。長径は1.46m、短径は1.18m、深さは0.77mである。長軸方位はN-12°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第10-48号土壙（第352図）

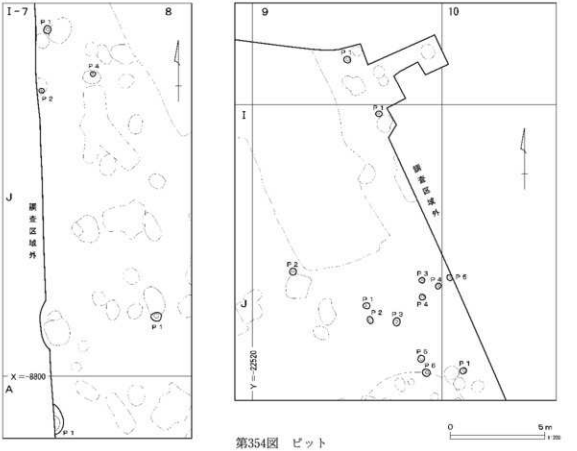
Ｎ９・Ａ８グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈する。長軸は1.43m、短軸は1.28m、深さは0.32mである。長軸方位はN-38°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第353図　土壙・グリッド出土遺物

第39表　土壙・グリッド出土遺物観察表

番号	遺構	種別	器種	産地	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考
1	SK10-33	陶器	摺鉢	瀬戸・美濃	5	(26.6)		(2.3)	灰黄	普通	鉄釉	輪積			18C中頃
2		陶器	皿	瀬戸・美濃	5	(10.5)		(2.1)	灰黄	良好	灰釉	輪積			17C後～18C前半か



第354図　ピット

（2）ピット（第354図）

グリッドピットはN9・I7、J8グリッドとN9・H9、I9、I10、J9、J10グリッドから18基検出された。

N9・J9グリッドの北東部を中心に、調査区東端にまとまるが、建物等の組み合わせはみられない。

第40表　ピット計測表

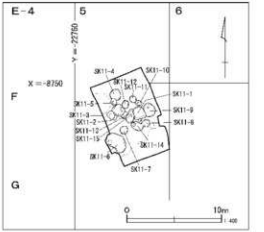
地点	グリッド	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
10	M9・H9	1	0.35	0.32	0.22
10	M9・I7	1	0.42	0.40	0.20
10	M9・I7	2	0.22	0.22	0.34
10	M9・I7	4	0.29	0.24	0.46
10	M9・I9	5	0.27	0.25	0.19
10	M9・I9	1	0.28	0.24	0.30
10	M9・I9	2	0.50	0.42	0.29
10	M9・I9	3	0.27	0.27	0.11
10	M9・I9	4	0.28	0.26	0.21
10	M9・J10	1	0.47	0.40	0.26
10	M9・J8	1	0.53	0.40	0.15
10	M9・J9	1	0.32	0.30	0.19
10	M9・J9	2	0.35	0.31	0.21
10	M9・J9	3	0.36	0.35	0.37
10	M9・J9	4	0.32	0.26	0.17
10	M9・J9	5	0.35	0.32	0.27
10	M9・J9	6	0.34	0.32	0.40
10	N9・A7	1	1.42	(0.50)	0.64

X　第11地点の遺構と遺物

1．概　要

第11地点は遺跡範囲の東部に位置し、一般国道16号バイパスを挟んで第５地点の南側に位置している。第８～10地点の調査区が台地東縁に近く、縄文時代の遺構が検出されている。それに対し、第11地点は台地の奥部に当たるため、縄文時代の遺構は広がらないと考えられたが、土壙が検出された。住居跡は検出されなかった。

調査面積は狭いが、縄文時代と近世の土壙が重複していた。縄文時代の第11-６・15号土壙からは、中期後半の土器がまとまって出土した。



第355図　第11地点全体図

2．縄文時代

第11地点は、長さ９m、幅６mほどの狭い調査区であったが、縄文時代の遺構は土壙が10基検出された。そのうちいくつかの土壙内からは、中期後半の復元可能な土器が出土している。その時期に相当する住居跡は、今回報告する他の調査区では検出されていない。

（1）土壙

第11-６号土壙（第356図・第357図・第358図１～７）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。北東側に第11-７号土壙が隣接している。平面形は不定形で、長径2.37m、短径1.32m、深さ0.22mである。

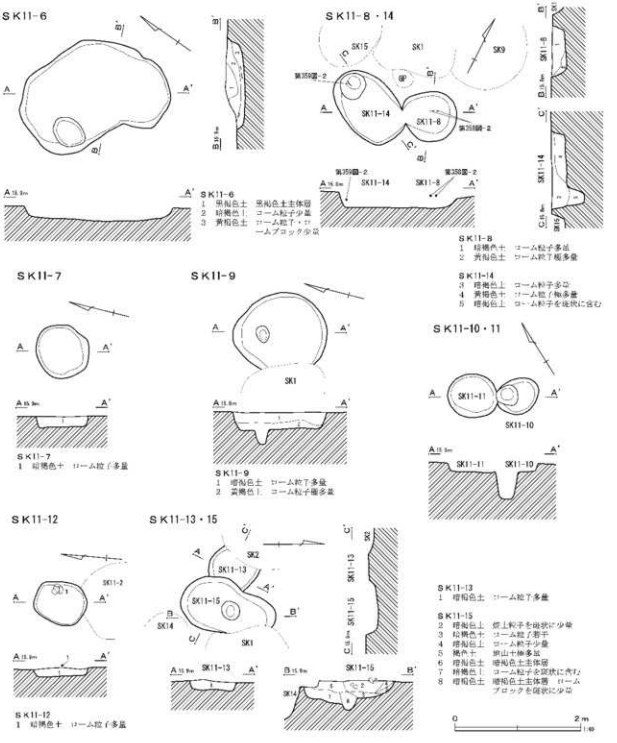
遺物は土壙内から土器が比較的多く検出された（第357図）。出土した土器のうち、第358図１は上半部が全周して出土したものである。下半部は失われていた。出土状況では、１の土器は数箇所に散らばっており、埋設当時の状況は不明である。

第358図１～７は出土した土器である。

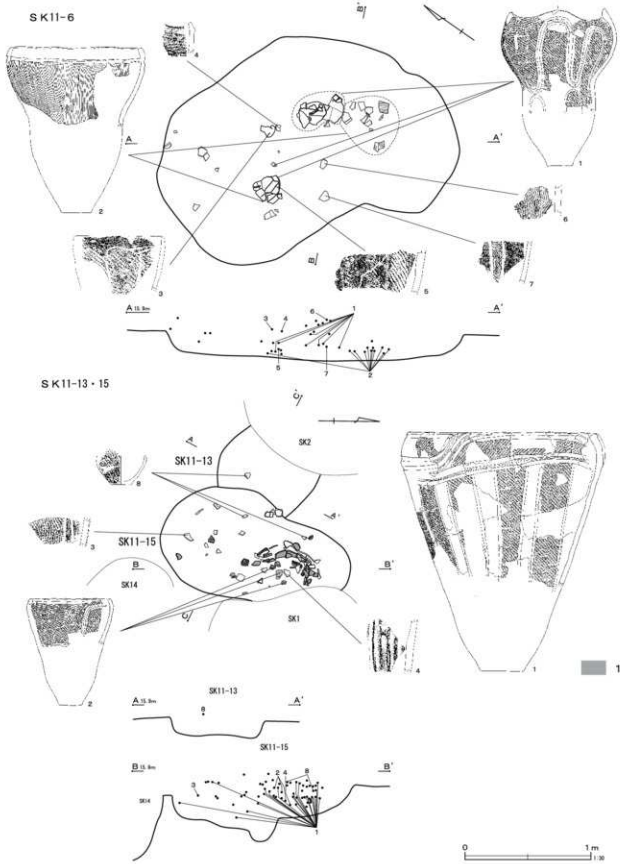
１は上半部が全周して出土した深鉢形土器である。口縁部は４単位の波状口縁を持つ。胴部中央で大きく括れ、その上下で文様が分かれて施文されている。胴上部には２本１組の磨消沈線文によって、連弧文的な波状沈線文が６単位施文されている。波状口縁部の形状に、波状沈線文は連動させてはいない。胴下部には１本沈線による逆Ｕ字状文を、胴上部の波状沈線文の波底部に合わせて６単位施文している。地文は単節ＬＲの縄文を、口縁部直下は横や斜め方向に、他は縦方向に施文している。口径は20cmである。

２は器形復元が可能であった、深鉢形土器の大型の破片である。１と同様に胴中央で大きく括れを持つ土器である。上部のみで、下半部は出土しなかった。口縁部は幅の狭い無文帯を持ち、胴部とは幅広の沈線文を１本巡らして区画している。胴部は、地文である櫛歯状の工具を用いた条線のみが施文される。推定口径は28cmである。

３～７は深鉢形土器である。３は小型の土器である。口縁部の破片で、１本沈線による逆Ｕ字状文が施文されているが、文様は粗雑である。また口縁部と胴部と区画する２本１組の磨消沈線文が、部分的に認められる。地文は単節ＬＲの縄文を縦方向に施文している。４は波状口縁部の破片で、胴部とは微隆起状の隆帯で区画している。地


SK11-6
SK11-8・14
SK11-7
SK11-9
SK11-10・11
SK11-12
SK11-13・15
SK11-6
1 黒褐色土 黒褐色土主体層
2 暗褐色土 ローム粒子少量
3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
SK11-8
1 暗褐色土 ローム粒子多量
2 黄褐色土 ローム粒子極多量
SK11-14
3 暗褐色土 ローム粒子多量
4 黄褐色土 ローム粒子極多量
5 暗褐色土 ローム粒子を縞状に含む
SK11-7
1 暗褐色土 ローム粒子多量
SK11-9
1 暗褐色土 ローム粒子多量
2 黒褐色土 ローム粒子極多量
SK11-12
1 暗褐色土 ローム粒子多量
SK11-13
1 暗褐色土 ローム粒子多量
SK11-15
2 暗褐色土 焼土粒子を縞状に少量
3 暗褐色土 ローム粒子若干
4 暗褐色土 ローム粒子少量
5 黒色土 焼山土粒多量
6 暗褐色土 暗褐色土主体層
7 暗褐色土 ローム粒子を縞状に含む
8 暗褐色土 暗褐色土主体層 ロームブロックを縞状に少量
0
2m

第356図 土壙



第357図　土壙遺物出土状況

文は単節ＬＲの縄文である。５・６は胴部の破片である。５は２本１組の磨消沈線文を、複数胴部に垂下させるものである。地文は単節ＬＲの縄文である。６は地文に条線を施文するものである。７は胴部の破片で、２本１組の沈線文を施文し、文様内に単節ＬＲの縄文を充塡している。

１～６は土壙にともなう土器で、加曽利ＥⅢ式で、時期は中期後葉である。７は混入したと考えられ、称名寺式の中段階、時期は後期初頭である。

第11-７号土壙（第356図）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。南西側に第11-６号土壙が隣接する。平面形は円形で、径0.83m、深さ0.18mである。遺物は出土しなかった。

第11-８号土壙（第356図）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。第11-14号土壙と西側部分で重複する。平面形は楕円形で、長径0.83m、短径0.75m、深さ0.21mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第11-９号土壙（第356図）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。西側の一部が近世の第11-１号土壙のため失われている。平面形は楕円形で、残存部分の長径1.49m、短径1.15m、深さ0.50mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第11-10号土壙（第356図）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。第11-11号土壙と接している。平面形は楕円形で、長径は0.65m、短径は0.55m、深さは0.58mである。図示できる遺物は出土しなかった。

第11-11号土壙（第356図）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。第11-10号土壙と接している。平面形は楕円形で、長径0.75m、短径0.68m、深さ0.17mである。遺物は出土しなかった。

第11-12号土壙（第356図・第358図９）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。近世の第11-２号土壙と接している。平面形は楕円形で、長径0.83m、短径0.68m、深さ0.16mである。

遺物は土壙の北側から第358図９の深鉢形土器の底部が出土した。胴部には２本１組の磨消沈線文が複数垂下している。沈線は浅くなで状となっている。地文は単節ＬＲの縄文を縦方向に施文している。中期後葉の加曽利ＥⅢ式土器である。

第11-13号土壙（第356図・第357図・第358図８）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。東側で縄文時代の第11-15号土壙、西側で近世の第11-２号土壙と重複する。残存部分の長径0.75m、短径0.25m、深さ0.25mである。

第358図８は検出されたミニチュア土器である。両耳壺形土器の胴部から底部である。破片の一部は、第11-15土壙からも出土している（第357図）。胴部には地文である単節ＬＲの縄文のみが施文されている。中期後葉の土器である。

第11-14号土壙（第356図）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。第11-８号土壙と東側の一部が重複する。平面形は楕円形で、長径1.23m、短径0.85m、深さ0.53mである。遺物は出土しなかった。

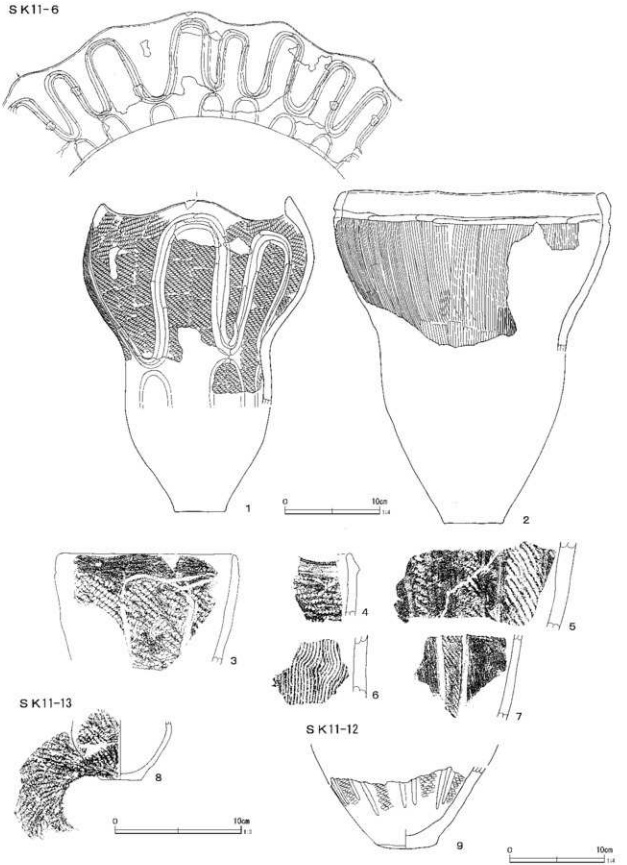
第11-15号土壙（第356図・第357図・第359図１～４）

Ｍ８・Ｆ５グリッドに位置する。西側で縄文時代の第11-15号土壙、東側で近世の第11-１号土壙と重複する。平面形は楕円形で、長径1.55m、短径0.80m、深さ0.46mである。

土壙の主に北側から土器が出土した（第357図）。第359図１は、北側から口縁部を下にするように検出された土器で、半分は近世の第11-１号土壙によって失われていた。

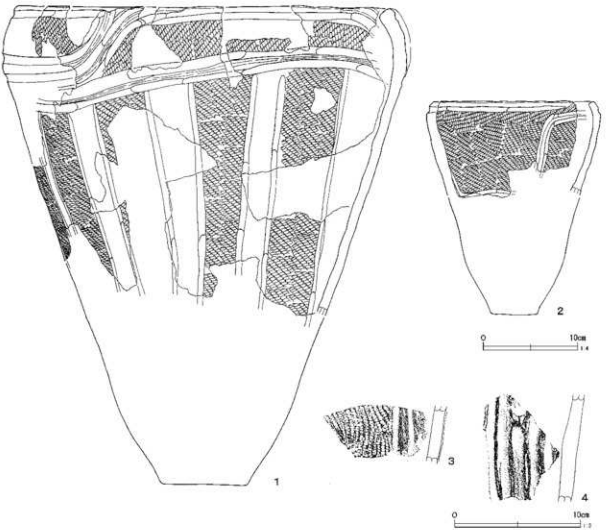
第359図１～４は出土した土器である。

１は大型の深鉢形土器である。胴下半部は出土しなかった。口縁部には微隆起線状の隆帯とそれに沿って浅い幅広の沈線を施文している。間延びした楕円形状の区画文を入れ子状に施文していると考えられる。胴部には２本１組の磨消沈線文を



第358図　土壙出土遺物（1）

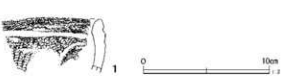
SK11-15



第359図　土壙出土遺物（2）

複数垂下させている。地文は単節ＬＲの縄文を、口縁部の文様内は横方向に、胴部は縦方向に施文している。推定口径は40cmである。

2は小型の深鉢形土器の口縁部から胴上部の破片である。無文の狭い口縁部で、胴部とは沈線文を1本巡らして区画している。胴部には2本1組の磨消沈線文を、波状に施文している。地文は単節ＬＲの縄文を施文している。



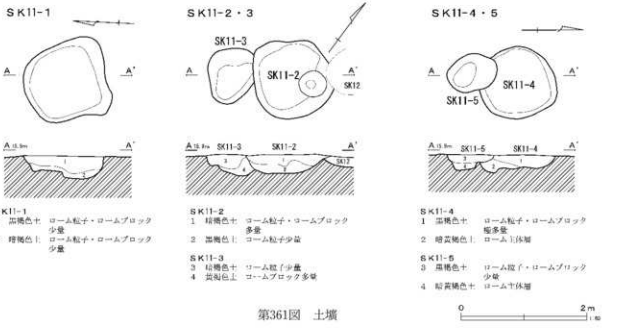
第360図　グリッド出土遺物

3・4は深鉢形土器の胴部の破片で、3は沈線を両側に施文する微隆起状の隆帯を施文し地文は単節ＬＲの縄文である。4は曽利系の土器である。

出土した遺物の時期は中期後葉で、加曽利EⅢ式土器である。

（2）グリッド出土土器（第360図）

1は深鉢形土器の口縁部の破片で、幅の狭い無文の口縁部を持つ。胴部とは沈線文を1本巡らして区画している。胴部には2本1組の磨消沈線文を施文している。地文は単節ＲＬの縄文を、口縁部直下は横に、他は縦方向に施文している。中期後葉の加曽利EⅢ式である。



第361図　土壙

4．近　世

（1）土壙

第11-1号土壙（第361図）

M8・F5グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈する。一辺は約1.30m、深さは約0.33mと0.40mを測る。長軸方位はN-3°-Wである。遺物は出土していない。

第11-2号土壙（第361図）

M8・F5グリッドに位置する。第11-3号土壙と重複する。平面形は円形を呈する。径は約1.30m、深さは0.30mを測る。

遺物はかわらけの破片が出土した。

第11-3号土壙（第361図）

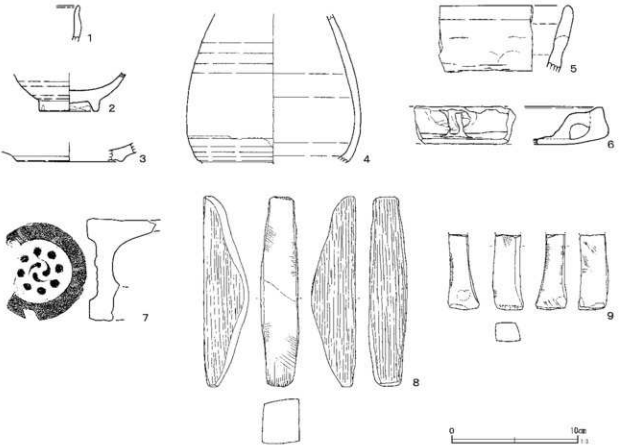
M8・F5グリッドに位置する。第11-2号土壙と重複する。平面形は不整円形を呈する。長径は0.90m、短径は0.81m、深さは0.36mである。長軸方位はN-35°-Wである。遺物は出土していない。

第11-4号土壙（第361図）

M8・F5グリッドに位置する。第11-5号土壙と重複する。平面形は隅丸方形を呈する。一辺の長さは1.24m、深さは0.25mである。遺物は出土していない。

第11-5号土壙（第361図）

M8・F5グリッドに位置する。第11-4号土壙と重複する。平面形は不整円形を呈する。長径は0.79m、短径は0.58m、深さは0.23mを測る。遺物は出土していない。



第362図　グリッド出土遺物

第41表　グリッド出土遺物観察表

番号	種別	器種	産地	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	釉薬装飾	成型技法	器種・器形の特徴	文様	備考
1	陶器	碗	瀬戸・美濃	5			(2.8)	灰白	良好	鉄釉	轆轤			天目碗　二次的被熱　18C初
2	磁器	碗	肥前	70		4.6	(30.0)	灰白　緻密	良好	灰釉	轆轤	高台際～高台内砂粒多		見込み　擦痕多　17C中
3	陶器	皿	瀬戸・美濃	5	1.0	(8.4)	(1.5)	灰白	普通	長石釉	轆轤	削り出し高台		志野　17C初
4	陶器	徳利	瀬戸・美濃	10	(13.8)		(11.8)	灰白　緻密	良好	鉄釉　灰釉	轆轤	灰釉流し		18C前半
5	土器	焙烙		5			(5.3)	褐灰	普通		編横み			外面煤付着
6	土器	焙烙		5			(2.9)	にぶい褐	普通					外面煤付着
7	瓦	軒丸瓦		65			(8.0)	砂質　暗灰	普通					瓦径7.1　蓮珠三巴右巻8珠
8	石製品	砥石			長さ14.86cm　幅2.99cm　厚さ3.43cm　重さ192.1g									
9	石製品	砥石			長さ(5.8)cm　幅2.20cm　厚さ2.36cm　重さ43.2g									

第42表　遺構番号新旧対照表

新	旧
第1地点	
SA 1－1 （一部）	SB 1－2
SA 1－2 （一部）	SB 1－3
欠番	SK 1－2
欠番	SK 1－3
欠番	SK 1－23
欠番	SK 1－27
SK 1－61	新規
集石土壙 1－4	SK 1－4
集石土壙 1－17	SK 1－17
集石土壙 1－20	SK 1－20
集石土壙 1－32	SK 1－32
SB 1－4　Pit 2	L 8・C 8　Pit 5
SB 1－4　Pit 9	L 8・C 8　Pit13
SB 1－4　Pit11	L 8・C 8　Pit15
第2地点	
欠番	SK 2－28
欠番	SK 2－54
欠番	SK 2－84
欠番	SK 2－116
SK 2－157	新規
集石土壙 2－79	SK 2－79
SB 2－1　Pit 1	SB 2－1　Pit 5
SB 2－1　Pit 6	SB 2－1　Pit 6
SB 2－1　Pit 6	SB 2－1　Pit 7
SB 2－1　Pit 7	SB 2－1　Pit 4
SB 2－1　Pit 9・10	SB 2－1　Pit 3
SB 2－1　Pit11	SB 2－1　Pit 9
SB 2－1　Pit12	SB 2－1　Pit 2
SB 2－1　Pit13	SB 2－1　Pit10
SB 2－1　Pit14・15	SB 2－1　Pit 1
SB 2－2　Pit 2	N 6・A 7　Pit 2
SB 2－2　Pit 3	N 6・A 7　Pit 1
SB 2－2　Pit 4	SB 2－1　Pit 4
SB 2－2　Pit 5	SB 2－1　Pit 8
SB 2－2　Pit 6	SB 2－1　Pit 3
SB 2－2　Pit 7	SB 2－1　Pit 9
SB 2－2　Pit 8	SB 2－1　Pit 2
SB 2－2　Pit10・11	SB 2－1　Pit 1
SB 2－2　Pit12	SB 2－1　Pit11
SA 2－3　Pit10	N 6・B 7　Pit13
SA 2－3　Pit13	N 6・B 7　Pit 3
SA 2－3　Pit15	N 6・B 7　Pit 9
SA 2－3　Pit17	N 6・B 7　Pit 8
第3地点	
欠番	SK 3－24
集石土壙 3－1	SS 3－1
第4地点	
欠番	SB 4－6
欠番	SK 4－4
SE 4－2	SK 4－8
欠番	SK 4－50
欠番	SK 4－61
欠番	SK 4－62
欠番	SK 4－68
SK 4－69	SK 4－59一部
集石土壙 4－15	SK 4－15
SB 4－1　Pit 8	SB 4－1　Pit 7
SB 4－1　Pit10	SB 4－1　Pit 6
SB 4－2　Pit 2	SB 4－2　Pit 3
SB 4－2　Pit 6	SB 4－2　Pit 5
SB 4－2　Pit 7	SB 4－2　Pit 9
SB 4－2　Pit 8	SB 4－2　Pit 6
SB 4－2　Pit 9	SB 4－2　Pit 8
SB 4－2　Pit10	SB 4－2　Pit 7
SB 4－2　Pit11	SB 4－2　Pit 2
SB 4－2　Pit15	SB 4－2　Pit31
SB 4－2　Pit31	SB 4－2　Pit21
SB 4－2　Pit33	SB 4－2　Pit19
SB 4－3　Pit14	SB 4－3　Pit 2
SB 4－3　Pit18	SB 4－3　Pit 4
SB 4－3　Pit24	SB 4－3　Pit 7
SB 4－4　Pit 2	L 6・I 2　Pit59
SB 4－4　Pit11	L 6・I 2　Pit60
SB 4－7　Pit 2	L 6・I 2　Pit 4
SB 4－7　Pit 4	L 6・I 2　Pit 9
SB 4－7　Pit 6	SB 4－7　Pit 3
SB 4－7　Pit10	L 6・J 2　Pit 6
SA 4－1　Pit 2	SA 4－1　Pit13
SA 4－1　Pit 3	SA 4－1　Pit11
SA 4－1　Pit 4	SA 4－1　Pit10
SA 4－1　Pit 5	SA 4－1　Pit 8
SA 4－1　Pit 6	SA 4－1　Pit 7
SA 4－1　Pit 7・8	SA 4－1　Pit22
SA 4－1　Pit 9	SA 4－1　Pit 6
SA 4－1　Pit10	SA 4－1　Pit 5
SA 4－1　Pit11	SA 4－1　Pit 3
SA 4－1　Pit12	SA 4－1　Pit 2
SA 4－2　Pit 1	SA 4－2　Pit16
SA 4－2　Pit 2	SA 4－2　Pit12
SA 4－2　Pit 4	SA 4－2　Pit 9
SA 4－3　Pit 1	SA 4－3　Pit17
SA 4－3　Pit 2	SA 4－3　Pit14
SA 4－3　Pit 3	SA 4－3　Pit18
SA 4－3　Pit 4	SA 4－3　Pit19
SA 4－3　Pit 5	SA 4－3　Pit20
SA 4－3　Pit 6	SA 4－3　Pit21
第5地点	
欠番	SJ 5－4
SB 5－3	SB 5－4
SB 5－4	SB 5－5
SB 5－5	SB 5－6
SB 5－6	SB 5－1
欠番	SK 5－5
SK 5－20	SK 5－21
SK 5－21	SK 5－20
欠番	SK 5－33
SK 5－45	新規
SD 5－17	SD 5－1の一部
SD 5－18	SD 5－1の一部
SD 5－19	SD 5－1の一部
集石土壙 5－1	SS 5－1
集石土壙 5－2	SS 5－2
集石土壙 5－3	SS 5－3
集石土壙 5－4	SS 5－4
集石土壙 5－5	SS 5－5
SB 5－1　Pit 2	SB 5－1　Pit 3
SB 5－1　Pit 3	SB 5－1　Pit11
SB 5－1　Pit 5	SB 5－1　Pit10
SB 5－1　Pit 6	SB 5－1　Pit 5
SB 5－1　Pit 7	SB 5－1　Pit 9
SB 5－1　Pit 8	SB 5－1　Pit 6
SB 5－1　Pit 9	SB 5－1　Pit 8

新	旧
SB5-1 Pit10	SB5-1 Pit7
SB5-1 Pit11	SB5-1 Pit2
SB5-1 Pit12	SB5-1 Pit13
SB5-1 Pit13	SB5-1 Pit14
SB5-1 Pit14	SB5-1 Pit15
SB5-1 Pit15	SB5-1 Pit16
SB5-2 Pit1	SB5-3 Pit1
SB5-2 Pit2	SB5-3 Pit2
SB5-2 Pit3	SB5-2 Pit14
SB5-2 Pit4	SB5-2 Pit5
SB5-2 Pit5	SB5-2 Pit13
SB5-2 Pit7	SB5-2 Pit12
SB5-2 Pit8	SB5-3 Pit5 SB5-2 Pit7
SB5-2 Pit9	SB5-2 Pit11
SB5-2 Pit10	SB5-2 Pit8
SB5-2 Pit11	SB5-2 Pit10
SB5-2 Pit12	SB5-2 Pit9
SB5-2 Pit13	SB5-2 Pit1
SB5-2 Pit14	SB5-2 Pit4
SB5-2 Pit15	SB5-3 Pit10
SB5-2 Pit16	SB5-3 Pit3
SB5-2 Pit17	SB5-3 Pit9
SB5-2 Pit18	SB5-4 Pit3
SB5-2 Pit19	SB5-3 Pit8
SB5-2 Pit21	SB5-3 Pit7
SB5-2 Pit22	SB5-3 Pit6
SB5-3 Pit1	SB5-4 Pit1
SB5-3 Pit2	SB5-4 Pit2
SB5-3 Pit3	SB5-4 Pit8
SB5-3 Pit5	SB5-4 Pit7
SB5-3 Pit6	SB5-4 Pit4
SB5-3 Pit7	SB5-4 Pit6
SB5-3 Pit8	SB5-4 Pit5
SB5-4 Pit1	SB5-5 Pit16
SB5-4 Pit2	SB5-5 Pit2
SB5-4 Pit3	SB5-5 Pit14
SB5-4 Pit4	SB5-5 Pit5
SB5-4 Pit5	SB5-5 Pit13
SB5-4 Pit6	SB5-5 Pit6
SB5-4 Pit7	SB5-5 Pit12

新	旧
SB5-4 Pit8	SB5-5 Pit8
SB5-5 Pit1	SB5-6 Pit6
SB5-5 Pit2	SB5-6 Pit1
SB5-5 Pit3	SB5-6 Pit5
SB5-5 Pit5	SB5-6 Pit4
SB5-5 Pit6	SB5-6 Pit2
SB5-5 Pit7	SB5-6 Pit7
SB5-5 Pit8	SB5-6 Pit3
SB5-6 Pit1	L8・D5 Pit5
SB5-6 Pit2	SB5-2 Pit16
SB5-6 Pit3	SB5-1 Pit22
SB5-6 Pit4	SB5-1 Pit17
SB5-6 Pit5	SB5-2 Pit17
SB5-6 Pit6	SB5-1 Pit19 SB5-1 Pit20
SB5-7 Pit1	SB5-7 Pit11
SB5-7 Pit2	SB5-7 Pit1
SB5-7 Pit3	SB5-7 Pit10
SB5-7 Pit4	SB5-7 Pit2
SB5-7 Pit5	SB5-7 Pit9
SB5-7 Pit6	SB5-7 Pit3
SB5-7 Pit7	SB5-7 Pit8
SB5-7 Pit8	SB5-7 Pit4
SB5-7 Pit9	SB5-7 Pit7
SB5-7 Pit10	SB5-7 Pit5
SB5-7 Pit11	SB5-7 Pit12
SB5-7 Pit12	SB5-7 Pit6
SB5-8 Pit1	SB5-8 Pit8
SB5-8 Pit2	SB5-8 Pit1
SB5-8 Pit3	SB5-8 Pit7
SB5-8 Pit4	SB5-8 Pit2
SB5-8 Pit5	SB5-8 Pit6
SB5-8 Pit6	SB5-8 Pit3
SB5-8 Pit7	SB5-8 Pit5
SB5-8 Pit8	SB5-8 Pit4
SB5-9 Pit1	SB5-9 Pit8
SB5-9 Pit2	SB5-9 Pit1
SB5-9 Pit3	SB5-9 Pit7
SB5-9 Pit4	SB5-9 Pit2
SB5-9 Pit5	SB5-9 Pit6
SB5-9 Pit6	SB5-9 Pit3

新	旧
SB5-9 Pit7	SB5-9 Pit5
SB5-9 Pit8	SB5-9 Pit4
第6地点	
SD6-10	SK6-12
SB6-1 Pit2	SB6-1 Pit5
SB6-1 Pit3	SB6-1 Pit2
SB6-1 Pit4	SB6-1 Pit6
SB6-1 Pit5	SB6-1 Pit3
SB6-1 Pit6	SB6-1 Pit7
SB6-1 Pit7	SB6-1 Pit4
SB6-2 Pit2	SB6-2 Pit3
SB6-2 Pit3	SB6-2 Pit4
SB6-2 Pit4	SB6-2 Pit6
SB6-2 Pit5	SB6-2 Pit2
SB6-2 Pit6	SB6-2 Pit5
SB6-3 Pit1	M6・A3 Pit91
SB6-3 Pit2	M6・A3 Pit97
SB6-3 Pit3	M6・A3 Pit90
SB6-3 Pit4	M6・A3 Pit96
SB6-3 Pit5	M6・A3 Pit89
SB6-3 Pit6	M6・A3 Pit95
SB6-3 Pit7	M6・A3 Pit94
SB6-3 Pit8	M6・A3 Pit93
SB6-3 Pit9	M6・A3 Pit92
第7地点	
SB7-3A・7-3B	SB7-3
欠番	SB7-4
SB7-3の炉跡	SB7-4
第8地点	
SK8-24	SK8-12-1
SB8-1 Pit1	N8・E9 Pit4
SB8-1 Pit2	N8・E9 Pit10
SB8-1 Pit3	N8・E9 Pit3
SB8-1 Pit4	N8・F9 Pit2 N8・F9 Pit6
SB8-1 Pit5	N8・E9 Pit2
SB8-1 Pit6	N8・F9 Pit3
第9地点	
欠番	SK9-23
SK9-48	SK9-20の一部
SJ9-1	炉跡2
SJ9-2	炉跡1と埋甕

Ⅺ　調査のまとめ

１．旧石器時代

（１）大木戸遺跡の石器集中

大木戸遺跡から検出された旧石器時代の遺構・遺物は、第１次調査（西大宮バイパス№６遺跡）を含めると石器集中が15箇所（第１次調査ではブロックと表記）、礫群７基である（第363図）。

石器集中は出土層位によって、大きく３時期に分けられる。第１期は第Ⅲ層（ソフトローム）、第２期は第Ⅳ層（ハードローム）、第３期は第Ⅵ～Ⅸ層（ＡＴ降灰下位）から検出されている。

石器集中の分布は、台地の西側と東側の肩部付近にまとまり、台地奥部からは検出されていない。

各時期を概観する。

第１期：第Ⅲ層（ソフトローム）から、石器集中が７箇所検出された。

西側は第１次調査の第４号ブロックと第４－１号石器集中の２箇所が検出された。第４号ブロックは、黒耀石製のナイフ形石器が出土している。外形は菱形を呈し、調整加工が二側縁に施される砂川期のナイフ形石器とされている。第４－１号石器集中は、硬質頁岩製の掻器が出土したが、他は黒曜石製の剥片類のみで、時期を検討できる資料が少ない。

東側は、台地のやや奥部の第８－１号石器集中と、台地肩部に近い第10－１～４号石器集中がある。第８－１号石器集中は、チャートとガラス質黒色安山岩製の剥片５点が出土したが、時期等は不明である。第10地点の４箇所の石器集中は、第10－１号石器集中から、石器21点が出土した。器種は掻・削器と敲石、磨石が出土し、石核と剥片が接合している。第10－２号石器集中は、石器が７点と少ないが、石核に剥片が接合する資料がある。第10－３号石器集中は、石器10点が出土した。器種は剥片と砕片のみであった。第10－４号石器集中は、剥片と礫が各１点出土した。時期を確定するための定型的石器が殆ど見られず、出土層位（第Ⅲ層：ソフトローム中）から砂川期かそれ以降の石器群と想定される。

以上、第１期の石器集中である。第４号ブロックはナイフ形石器が出土しており、砂川期と想定されるが、第４－１、第８－１、第10－１～４号石器集中は、時期を検討するための定型的石器が殆どなく、帰属時期を検討するための資料が乏しい。第４－１号石器集中出土の掻器は、岩宿Ⅱ期から細石器の何れかに伴うものと思われるが、出土層位から当該期とした。

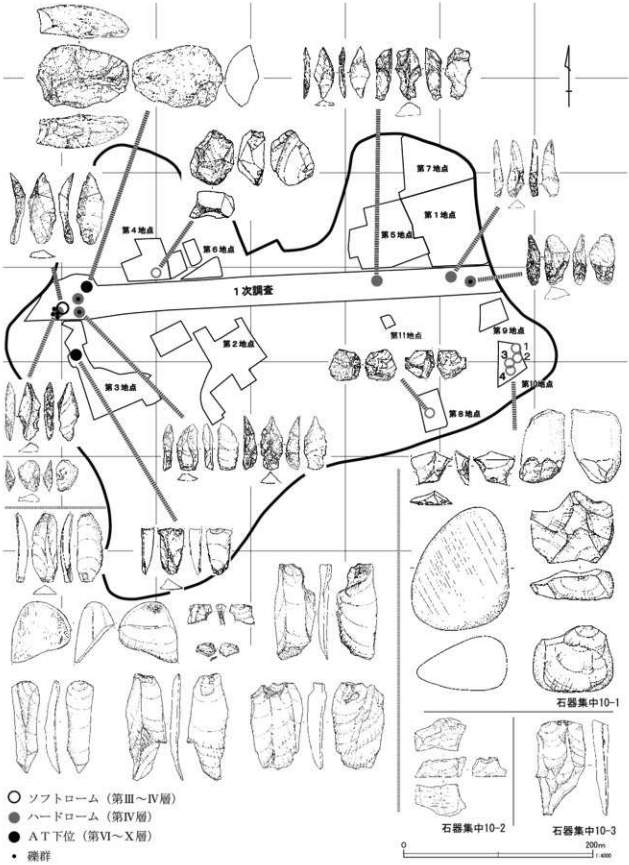
第２期：第Ⅳ層（ハードローム）から、石器集中が６箇所検出された。

該期は第１次調査区からの出土で、今回の報告した範囲からは検出されていない。

西側は第５～７号ブロックでそれぞれに礫群が共伴している。石器群は大形の角錐状石器・切出状・台形状のナイフ形石器が出土している。

東側は、第１～３号ブロックが所在する。礫群は第１号ブロックのみに伴っている。第１・２号ブロックは台地縁辺に近いが、第３号ブロックはやや台地奥部に位置する。石器群は第１号ブロックから敲石と石核・剥片類が出土し、集中部の南側に少し離れた地点からナイフ形石器が出土した。第２号ブロックは石核と剥片類が出土し、接合資料が見られた。また、第１号ブロックと同じく、集中部の南側に少し離れた地点からナイフ形石器が出土している。第３号ブロックは石器点数が６点と少ないが、ナイフ形石器と角錐状石器が出土した。ナイフ形石器は、縦長剥片を下位に用いた二側縁加工で、外形が菱形を呈しており、当該期に帰属するのかはやや疑問であるが、遺物分布や出土層位から分離するのは難しい。

西側は、第５～７号ブロックが近接している。



第363図　大木戸遺跡出土旧石器

第５号ブロックは、複数の礫群が重複している。石器は台形状と基部の両側縁に僅かに抉りの入るナイフ形石器が出土している。第６号ブロックは、剝片類のみが出土している。第７号ブロックは大形の角錐状石器と求心状の石核が出土した。

石器石材は黒色頁岩、ガラス質黒色安山岩、チャート等が多く用いられている。第５号ブロックでは黒耀石が半数を占め、他の石器集中とは異なる石材組成である。

以上の石器群の様相から、岩宿Ⅱ期の石器群として一括できると思われるが、ナイフ形石器の何点かは砂川期に近似する資料が含まれている。

第３期：第Ⅵ～Ⅸ層（ＡＴ降灰下位）から石器集中２箇所が検出された。

第８号ブロックは、西側の台地縁辺部から検出された。石器の出土層位は、ハードロームから第２暗色帯中にかけて、レベル差は68cmであった。遺物分布は、ガラス質黒色安山岩と黒色頁岩を主体とするまとまりに二分でき、約２ｍの遺物分布の空白が見られた。

石器は定型的石器がなく、ガラス質黒色安山岩の求心状の石核に複数の剝片類が接合し、明花向遺跡Ａ区下層の石器群と近似しており、大宮台地最古段階の石器群と位置づけられてきた。しかし、明花向遺跡Ａ区下層は第２暗色帯下（第Ｘ層対応）、本石器群は第２暗色帯上半部（第Ⅶ層が主体と思われる）と層位的に時期差が想定されるが、大宮台地では該期の遺跡の調査例が殆どなく、二つの石器群を検討するのは難しい状況である。

第３－１号石器集中は、第８号ブロックと同じ台地西縁部近くから検出された。出土層位は第Ⅶ層上面に張り付くように検出された。石器群は黒色頁岩等を用いたナイフ形石器・縦長剝片類と、黒耀石・硬質頁岩の小形剝片の一部に微細な剝離を施した一群である。

以上、大木戸遺跡から検出された旧石器時代の遺構・遺物を概観したが、若干の整理をしておく、第１次調査で東西の台地縁辺付近から石器集中が確認されたのに対し、今回の調査では、台地北東部で広域に旧石器時代調査のための深堀区を設定したが、遺構・遺物は検出されず、一方で他時期の遺構覆土等からナイフ形石器が単独で出土した。後世の削平等によって、石器集中が失われている可能性もある。

今回の調査で、第１期の石器集中が６箇所検出されたが、掻・削器が僅かに検出されただけで、帰属時期を確定するのは難しい。出土層位から砂川期又はそれ以降と考えられる。

第２期の石器群は、第１次調査で主体を占めていたが、今回の調査で該期の石器集中・礫群は検出されなかった。

第３期は、第３－１号石器集中から後期旧石器時代前半期の良好な一括資料が得られた。

（２）土層断面と遺物出土状況

大宮台地は、南関東及び北関東の両火山から遠く、立川ローム層の堆積は１～２ｍ程度である。層位の名称は、武蔵野台地の標準層位に合わせている。当該地域は南関東及び北関東のテフラの交差点で、南部では武蔵野台地の層位に近く、北部の行田市周辺では群馬県東部の層位に近い様相を呈している。

大宮台地はローム層の堆積は上記のように薄く、遺物の出土層位（文化層）と自然層位は必ずしも一致せず、複数の自然層位にまたがって遺物が検出される場合が多い。概略的な傾向は、第２暗色帯の上層からの出土と、第２暗色帯からの出土に大別される。さらに、上層はソフトローム（第Ⅲ層）中に納まる場合と、一部がハードローム（第Ⅳ・Ⅴ層）にまで達する場合がある。第２暗色帯から下層は、暗色帯（第Ⅶ・Ⅸ層）中からの出土と、暗色帯下位のハードローム（第Ｘ層）からの出土がある。後者は、現在明花向遺跡Ａ地点だけである。

遺物の出土層位は、概略４グループであるが、それぞれの遺跡（及び石器集中）によって、微妙に上下差があり、石器型式と組み合わせることで、各遺跡の文化層の設定を行っている。

大木戸遺跡は南北約480m、東西約580mと範囲は広く、滝沼川に面する樹枝状台地の一角を占めている。遺跡の西側は滝沼川の低地から荒川低地に向かって広がっており、東側は滝沼川に注ぐ湧水が開析した谷地形となっている。旧石器時代の遺構・遺物は台地の東西両側から検出され台地奥部からは見つかっていない。

ローム層の堆積状況は、土層断面図を西から東に並べてみると（第364図）、台地縁辺部付近は堆積が厚く、台地奥部は相対的に薄くなる傾向が見られる。また、第Ⅵ層は西側台地縁付近では比較的明確に分離できるが、台地奥部及び東側縁辺部付近は不明確であった。第２暗色帯の分層に関しても同じ傾向が見られる。

大木戸遺跡の石器集中を単位に、遺物の出土レベルのヒストグラムを見てゆく（第365図）。

第３－１号石器集中は、遺物点数は30点、レベル差は22cmである。ヒストグラムは正規分布を示し、15cmの幅に83％が収まる。自然層に分布のピークを合わせると、第Ⅶ層の上面から第Ⅵ層と一致している。

第10－１号石器集中は、遺物点数は22点、レベル差は52cmである。ヒストグラムは僅かに上部分に山があるが、明確なピークは見られない。第Ⅲ層のソフトローム上部からの出土である。

第10－２号石器集中は、遺物点数は９点と少ないが、レベル差は77cmと拡散している。ヒストグラムでピークは見出せない。第Ⅲ層のソフトローム上部からの出土である。

第10－３号石器集中は、遺物点数は14点と少ないが、レベル差は60cmと拡散している。ヒストグラムでピークは見出せない。第Ⅲ層のソフトローム上部からの出土である。

次に、第１次調査の石器集中を見る。第１次調査では、８箇所の石器集中が３枚の文化層に時期区分されている。層位区分が第２次調査以降と異なっているため、括弧内に対応する層位名を記した。

第１文化層の石器集中：第４号ブロックは遺物点数29点でレベル差は41cmである。ヒストグラムはピークが２箇所あり、上位のピークに10点、下位のピークが16点である。自然層に分布の垂直分布を重ねると第Ⅳ層（第Ⅳ・Ⅴ層）中からの出土である。第２文化層の石器集中と有意な差は見られない。

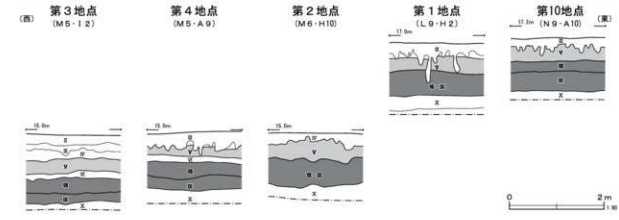
第２文化層の石器集中：東側の第１号ブロックは、遺物点数29点でレベル差は25cmである。ヒストグラムは台形状を呈し、25cmの幅で明確なピークは見出せない。第Ⅲ層（ソフトローム）と第Ⅳ層（第Ⅳ・Ⅴ層対応）の境である。

第２号ブロックの遺物点数は75点、レベル差は90cmと幅がある。ヒストグラムは明確なピークが見られない。自然層位は第Ⅳ層（第Ⅳ・Ⅴ層）から第Ⅴ層（第Ⅶ・Ⅸ層）まで拡散しており、第３文化層との区分が難しい。

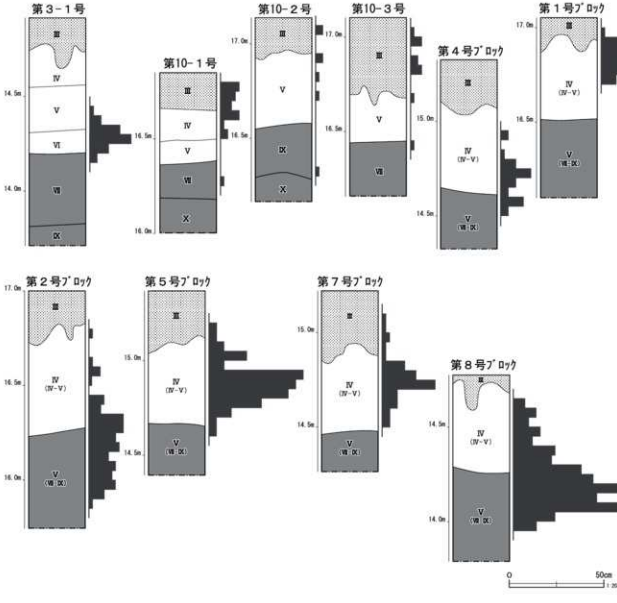
西側の第５号ブロックの遺物点数は115点、レベル差は58cmである。ヒストグラムは上層に傾いており、15cmのレベル幅に60％が収まる。複数の礫群と平面分布が重なっており、自然層位は第Ⅳ層（第Ⅳ・Ⅴ層）中に礫と共に収まっている。

第７号ブロックの遺物点数は47点、レベル差は57cmと幅がある。ヒストグラムは正規分布に近く、15cm幅のピークがある。しかし、下層と上層への拡散は大きい。自然層は第Ⅳ層（第Ⅳ・Ⅴ層）上部に位置する。

第３文化層の石器集中：第８号ブロックは、遺物点数182点、レベル差は68cmと幅がある。ヒストグラムはピークが２箇所あり下層に片寄っているが分散はしておらず、20cmの幅に55％が収まる。自然層に分布のピークを重ねると、第Ⅴ層(第Ⅶ・



第364図　土層断面図



第365図　土層断面と石器出土ヒストグラム

Ⅸ層）上部にまとまっている。

以上、大木戸遺跡の石器集中で資料数的に検討可能なものを見てきたが、幾つかの問題点を整理しておく。

今回の報告で、第３－１号石器集中は第Ⅶ層上面でレベル差が少なくヒストグラムは正規分布を示している。近接する第８号ブロックはレベル差が68cmと幅があり第Ⅳ層（第Ⅳ・Ⅴ層）から第Ⅴ層（第Ⅶ・Ⅸ層）上部にかけて拡散していたが、ヒストグラムは下部にピークがあり、上部に向かって拡散しているようにみえる。層位は第Ⅴ層（第２暗色帯）中の石器群として位置付けられ、相対的に第３－１号石器集中より古段階として問題はない。

第10地点の石器集中は、３箇所とも資料数の問題はあるが、上下に拡散しており明確なピークが摑めなかった。層位はソフトローム上部であるが、安定はしていない。一方、第４号ブロックは第１文化層（砂川期又はそれ以降）としているが、第Ⅳ層（第Ⅳ・Ⅴ層）中にピークがあり、第10地点の石器集中とは異なっている。

同一遺跡内でもローム層の堆積状況、遺物の垂直分布の在り方は、複雑な状況を示しており、まして、最大公約数的に台地等の地域を語る事が難しいことは明らかである。今後、より多面的な検討が必要になっている。

（３）後期旧石器時代前半期の石器群

今回の調査で特筆されるのは、大宮台地で遺跡数の少ない、後期旧石器時代前半期の石器集中が検出されたことである。

さいたま市教育委員会が実施した第１次調査においても、後期旧石器時代前半期の石器集中が検出されており、本調査で石器群が検出された地点と近接している。しかし、石器群の様相は異なっており、段階差として捉えられる。当該地域は、隣接する西大宮バイパスNo.５遺跡・清河寺前原遺跡から前半期の石器群が検出されており、大宮台地で古段階の石器群が密集する地域として注目される。

後期旧石器時代前半期の石器群は、調査事例が豊かな武蔵野台地等の成果によって、層位名で第Ⅹ層段階、第Ⅹ層上部～第Ⅸ層段階、第Ⅶ層段階、第Ⅵ層段階の４段階に区分するのが大枠的には共通している。しかし、大宮台地でこの段階区分を検討するのは難しく、層位的事例も乏しいのが現状である。大宮台地の石器群の変遷は、1997年に田代　治が埼玉考古に発表している。その区分は概略第Ⅹ～Ⅸ層を第Ⅰ期、第Ⅶ層を第Ⅱ期、第Ⅵ層を第Ⅲ期としている。筆者も大宮台地の石器群の変遷に触れる機会があり、田代の区分に大枠では従いながらも資料的限界から後期旧石器時代前半期の石器群を時期区分ではなく群として捉えておいた。

今回の、第３－１石器集中の石器群及び出土状況は、大宮台地における後期旧石器時代前半期の基礎的資料として、今後重要な意味をなすものと考えられる。

石器群は非黒耀石を用いた縦長剝片を主体に、ナイフ形石器が含まれている。遺跡内での石器製作の痕跡は乏しく、同一石材においても同一母岩と思われる資料はなく、遺跡外で製作された縦長剝片のみを携帯し、遺跡内に持ち込んだと想定される。この様なあり方は、台地部における第Ⅶ層段階の遺跡の在り方として、しばしば注目される。しかし、本石器群でもう一つ注意されるのは、黒曜石製の不定形貝殻状剝片の一部に微細な剝離を施した、小形石器の一群が伴っていることである。この様な石器群はより古段階にみられる一群で、前者の石器群と共伴する事例は少なく、今後の検討課題である。

2．縄文時代

（1）遺構出土土器による時期変遷について

今回報告する大木戸遺跡は、第１地点から第11地点にわたる。ここでは、さいたま市が調査した第１次調査も含めて、出土土器について分類を行いたい。また、分類する出土土器については、遺構出土のものを対象として行うこととした。

大木戸遺跡から出土した土器群の量は少なく、また明確に遺構に伴う土器も少ないものであったが、遺構の変遷と合わせ第Ⅰ～Ⅶ期に分類することができた。

そのうち第Ⅲ･Ⅳ期に関しては、周辺の遺跡や、第Ⅲ・Ⅳ期に関連する出土土器との比較を行いながら検討を加えていくこととする。

第Ⅰ期（第366図１）

早期後葉の条痕文系土器群が相当する。

１は第３地点の第３－１号炉穴から出土したものである。口縁部は約３分の２周が現存する。口唇部には刻みが入る。条痕は貝殻条痕で、文様は施文されていない。野島式土器終末から鵜ヶ島台式にかけての位置づけと推定される。

第Ⅰ期に相当する土器で、器形が復元できたものは１のみで、他は破片のみが検出されている。また炉穴内から遺物はほとんど出土していない。

第Ⅱ期（第366図２～５）

中期後葉の加曽利ＥⅢ式新段階に相当する時期である。第11地点からのみ検出されたもので、この時期に相当する住居跡は、今回報告する調査においては検出されていない。

大木戸遺跡では第Ⅰ期から第Ⅱ期の間には、土壙や集石土壙の一部が存在していたと考えられるが、いずれも時期を明らかにできる遺物が出土していないため、遺構出土土器としての時期区分は設定しなかった。

２～５は第11地点の土壙から出土したもので、この時期に相当する遺構は、ほかの地点からは検出されていない。

２・３は、第11－６号土壙出土の土器で、２は吉井城山類の深鉢形土器で、胴部文様が土器の括れ部分を境に上下に分割されている。３は口縁部に狭い無文部を持つ深鉢形土器で、胴部には地文条線を縦方向に施文している。

４・５は第11－15号土壙から出土した土器である。４は口縁部に文様帯を持つ土器で、文様は簡略化している。胴部には２本１組の磨消沈線文を垂下させている。沈線はいずれも浅くなで状に施文される。胴部に括れはなく、土器も大型化している。５は小型のもので、吉井城山類の深鉢形土器と考えられる。

加曽利ＥⅢ式新段階としたこの段階は、吉井城山類の胴部文様が上下に分割されており、吉井城山類の出現期よりも新しい段階と考えられ、加曽利ＥⅣ式に近い段階と考えられる。

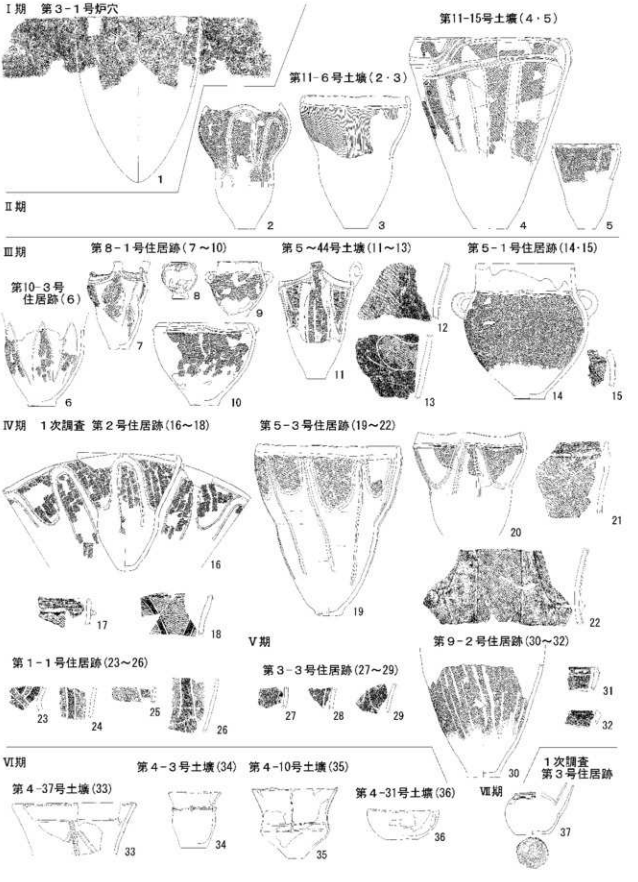
第Ⅲ期（第366図６～15）

第Ⅳ期と合わせると、大木戸遺跡東半部の住居跡の大半を占める時期である。第Ⅲ期は加曽利ＥⅣ式段階である。

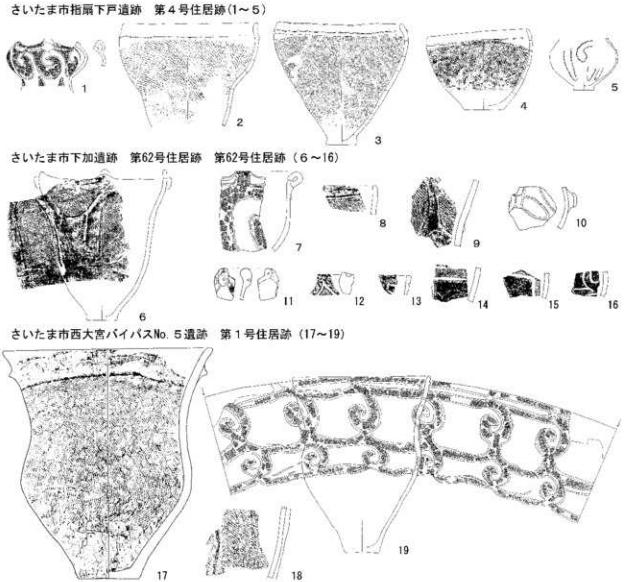
第Ⅲ期は、加曽利Ｅ式系の土器において、第366図６・７、11のような吉井城山類系の沈線文系土器が残存する時期である。また胴部下半部の文様が、鋸歯状となるのも特徴的である。

加曽利ＥⅣ式以降については、加曽利Ｅ式系の土器が後期初頭段階まで継続することが各氏によって論及されてきたところである。

筆者は、加曽利ＥⅣ式段階を称名寺式１ａ段階に並行すると把握したことがある（上野1999）。しかしながら、金子直行氏は加曽利ＥⅣ式には称名寺式を伴わない古い段階と、称名寺式を伴う新し



第366図　大木戸遺跡遺構出土土器



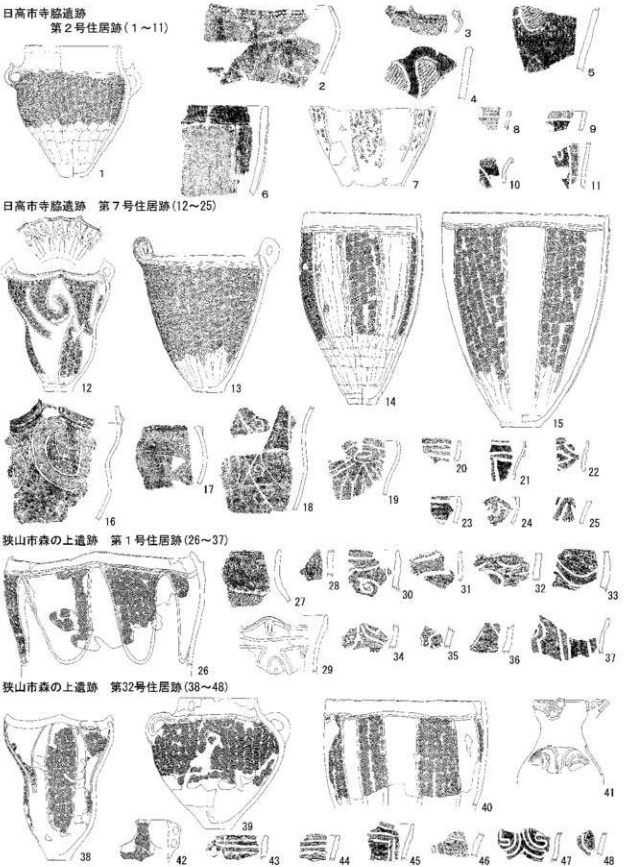
第367図　周辺の遺跡遺構出土土器（１）

い段階があるとの見解を示した(金子2004)。また、細田勝氏も近年中期終末に位置づけられるものを加曽利EIV式古段階、後期初頭に並行するものを加曽利EIV式新段階と捉える考え方を示している(細田2008)。

これらの論考と、今回の時期区分を比較した場合、この第III期の加曽利EIV式土器は、中期末葉に並行するか、後期初頭に並行するのかは、調査された遺構内で称名寺式土器が伴わないことから、大木戸遺跡では明確にすることができなかった。

そこで近年検出例が増加している、加曽利EIV式土器と称名寺式土器との共伴例や、周辺遺跡出土の土器群との比較を行ったうえで、この第III期について考えていきたい。

第366図６～15は、大木戸遺跡出土土器である。６は第10-３号住居跡出土土器で、胴下半のみ残存している。吉井城山類の下半部の文様が鋸歯状に沈線によって施文される。７～10は第８-１号住居跡出土土器で、７～９は小型化した土器である。８は注口土器と考えられる。９の両耳壺形土器の把手表面には縄文が施文される。11～13は第５-44号土壙から出土した土器である。11は口縁



第368図　周辺の遺跡遺構出土土器（２）

部に橋状把手が貼付されるもので、把手はやや斜めに捻って貼付されている。13は大柄のＪ字文を施文し、内側に地文を充塡する。第５-44号土壙からは甕形の注口土器の破片も出土している。14・15は第５-１号住居跡から出土した土器で、14は埋甕に使用された両耳壺形土器である。

第367図１～５はさいたま市指扇下戸遺跡（1992）第４号住居跡出土の加曽利ＥⅣ式の土器群である。１の吉井城山類系の土器と大木戸遺跡第Ⅲ期の第366図６・７、11などの土器を比較すると、大木戸遺跡出土土器は土器の括れがゆるやかになり、文様の施文も崩れ、地文の施文も粗雑であることがわかる。また共伴する２～４の土器からは、第Ⅱ期的な様相が認められる。これらのことから、指扇下戸遺跡第４号住居跡は第Ⅱ期よりは新しいが、大木戸遺跡第Ⅲ期よりも古い段階であると考えられ、しかも称名寺式土器は共伴していない。

次に、称名寺１ａ式段階の土器と加曽利ＥⅣ式土器が共伴した、第368図の日高市寺脇遺跡（2006）住居跡出土土器群と、狭山市森の上遺跡（2005）住居跡出土土器群について比較することとする。

加曽利Ｅ式系は、寺脇遺跡２号住居址の第368図３～５や、寺脇遺跡７号住居址12、16、狭山市森の上遺跡第１号住居跡28などの、鋸歯状文が特徴的となる吉井城山類系の土器や、森の上遺跡第32号住居跡38の沈線文を施文する土器が出土する時期である。また、微隆起状隆帯を施文する土器は寺脇遺跡７号住居址14・15の土器のように大型化するが、微隆起状の隆帯を施文する岩坪類の大型土器は出土していない。

鋸歯状文を持つ吉井城山類系の土器については、第368図12は、指扇下戸第367図１に近い文様構成を持つが、第367図１と比較すると、胴部の括れが緩やかで、文様の施文も粗雑となり、時期差が考えられる。また、第368図38は上下分帯されていた文様が口縁部まで入りこむもので、大木戸遺跡第366図11と類似する土器である。文様は岩坪類と似通うものであるが、沈線で施文されることや、13の吉井城類系の土器と伴出すること、隣接する大木戸遺跡第５-３号住居跡と前後関係が想定できることからも、第Ⅲ期として位置付けられるものである。

以上のことから、第368図の土器群は大木戸遺跡第Ⅲ期以前とした指扇下戸遺跡第４号住居跡よりも新しく、大木戸遺跡第Ⅳ期よりも古いと考えられ、その出土土器から大木戸遺跡第Ⅲ期にほぼ並行すると考えられる。このことから、大木戸遺跡第Ⅲ期については、称名寺式土器は出土していないが、称名寺１ａ式段階と並行する時期と考えられる。

第Ⅳ期（第366図16～26）

第Ⅲ期と合わせると、大木戸遺跡東半部の住居跡の大半を占める時期である。第Ⅳ期は明らかな後期段階とした時期である。

第Ⅳ期は、加曽利Ｅ式系の土器としては、微隆起状の隆帯を施文する岩坪類などの土器が大型化して出土する時期で、吉井城山類系の沈線文による鋸歯状文などを施す土器は検出されなくなる。

第366図16～18は、第１次調査第２号住居跡から出土した土器である。16は柄鏡形住居跡の先端部埋甕に使用された土器である。岩坪類とされる土器で、吉井城山類にみられた上下文様の分帯はなくなり、下半部の文様が口縁部まで貫入するものである。また文様も微隆起状の隆帯によって施文されるようになっている。16と同様の土器はさいたま市下加遺跡第62号住居跡（第367図６～16）からも検出されている。第367図６は第366図16と同様、柄鏡形住居跡の先端部埋甕に使用された土器である。第62号住居跡からは、第367図12～16の称名寺式土器が出土している。

第366図19～22は、第５-３号住居跡から出土し

た土器である。敷石を持つ柄鏡形住居跡で、すぐ北側には第５-44号土壙が隣接している。19は16と同様に柄鏡形住居跡の先端部埋甕に使用された土器である。底部は口縁と比較し底径が小さいもので、底面も平坦ではなかった。文様は微隆起状の隆帯で施文されるもので、U字状の区画文の間に口縁部区画の隆帯から、懸垂文を垂下させるものである。20は岩坪類である。22は微隆起状の隆帯で文様を施文する、大型の深鉢形土器の破片である。２本１組で垂下する隆帯文様の間に、隆帯をU字と逆U字状を連結されて施文するものである。連結部分では、舌状に突起を張り出させている。

第367図23～26は、第１-１号住居跡から出土した称名寺式の中段階と考えられる土器である。

第Ⅳ期としたこの時期は、大型化した微隆起状の隆帯を施文する加曽利Ｅ式系土器が出土することが特徴である。大木戸遺跡の東側に隣接する西大宮バイパスNo.５遺跡第１号住居跡（第367図17～19）からは、17・18の加曽利Ｅ式系の土器が称名寺１ｂ式段階の土器と共伴している。また、大木戸遺跡第５-３号住居跡出土の第366図22については、称名寺１ｃ式段階に伴うことも多い土器である。

第Ⅴ期（第366図27～32）

称名寺式末葉から堀之内１式に相当する時期である。

この時期の土器は第９-２号住居跡から検出された埋甕に使用された30以外は、小破片のみが検出されている。この時期の遺物は、遺構以外においても、出土量は少ないものであった。

第Ⅵ期（第366図33～36）

後期前葉の堀之内２式に相当する時期である。この時期の遺構は、調査区の西側半部からのみ検出されている。

住居跡も検出されたが、いずれも攪乱がひどく、遺物もほとんど検出されていない状況である。そのため33～36などの復元可能な土器は、土壙内から出土している。

33は第４-37号土壙から出土した、深鉢形土器の口縁部である。34は第４-３号土壙から検出された小型の深鉢形土器である。35は第４-10号土壙から検出された深鉢形土器である。34・35ともに括れ部に隆帯を巡らすもので、隆帯上には８の字状の貼付文を施している。36は第４-31号土壙から検出された浅鉢形土器である。

第Ⅶ期（第366図37）

後期中葉の加曽利Ｂ１式に相当する時期である。

37は、第１次調査で検出された第３号住居跡から検出された注口土器である。第３号住居跡に隣接する第４地点からは、加曽利Ｂ式期の遺物は調査区内から破片が数多く検出されているが、住居跡は検出されていない。

Ⅶ期以降の、遺構にともなう遺物は調査された範囲内では検出されていない。

第Ⅲ・Ⅳ期について

最後に第Ⅲ期、第Ⅳ期についてまとめておきたい。今回大木戸遺跡においては、第Ⅲ期を加曽利ＥⅣ式段階、第Ⅳ期を明らかな後期段階とした。

また、称名寺１ａ式段階の土器との共伴例から、第Ⅲ期は称名寺式１ａ段階と並行する後期段階と認識した。金子・細田氏のように、中期末葉を加曽利ＥⅣ式古段階、後期初頭並行を加曽利ＥⅣ式新段階とすれば、第Ⅲ期は加曽利ＥⅣ式新段階に相当することとなる。加曽利ＥⅣ式古段階は、第Ⅲ期と比較して古い段階と考えられる、指扇下戸遺跡第４号住居跡出土土器が相当するものと考えられる。

第Ⅳ期については明らかに後期段階と認識される段階で、出土している加曽利Ｅ式系土器は、称

名寺１ｂ式段階に並行するものと考えている。出土した加曽利Ｅ式土器は、細田氏の区分からすれば、加曽利ＥⅣ式以降に位置づけられる土器群である。また、加曽利ＥⅣ式に続くもの（稲村1990）や加曽利ＥⅤ式（石井1992・鈴木2007など）とされたものは、この第Ⅳ期に相当する土器群であると考えられる。

加曽利ＥⅣ式土器については、前述したように筆者は下半部が鋸歯状となる吉井城山類の加曽利ＥⅣ式土器を、称名寺１ａ式段階並行に位置づけたことがある（上野1999）。今回、日高市寺脇遺跡、狭山市森の上遺跡など、称名寺１ａ式段階（１段階）と考えられる土器と加曽利ＥⅣ式土器の伴出例を、大木戸遺跡第Ⅲ期を並行させたことで、称名寺式土器が伴わないさいたま市指扇下戸遺跡第４号住居跡出土土器が、それに先行する加曽利ＥⅣ式古段階に位置付けることが可能となり、金子・細田氏の見解（金子2004・細田2008）ともおおまかには合致したことになる。しかしながら、加曽利ＥⅣ式土器古段階、新段階の区分を明確にすることができず、また加曽利ＥⅣ式古段階の土器もＥⅢ式新段階の土器との相違を明確にしえない部分がある。加曽利ＥⅣ式新段階以降の加曽利Ｅ式系土器群の状況も同様である。今回は大木戸遺跡の第Ⅲ期を、加曽利ＥⅣ式新段階として後期初頭に位置づけたが、今後も検討を重ねていく必要性があると考えている。

（２）縄文時代の大木戸遺跡の様相

（第369・370図）

前項では、出土土器の時期について検討した。ここではその結果を踏まえて、縄文時代の大木戸遺跡の様相について考えて行きたい。

第369・370図は第１地点から第11地点および、第１次調査から検出された縄文時代の遺構の分布状況である。

遺跡は谷が入りこむため、平面的にはほぼ中央が凹む形状となっている。現状の地形では、西側、東側それぞれに、標高15～16mの等高線が南北方向に細長い楕円形状に巡っており、谷を中心に東側と西側に独立したエリアを持っている。

遺構の分布も中央の谷による凹みを挟み、中央部分は希薄となり、西側のエリアと東側のエリアとに分かれて分布している。

第Ⅰ期とした早期後葉段階の住居跡は確認されておらず、炉穴や土壙が遺跡の西端と東端に分布していた。炉穴に明確に伴う土器は少なく、第366図１のみが復元可能な出土土器であった。

その後、大木戸遺跡では土壙や、集石土壙などが検出されているが、住居跡は検出されていない。そのため、第Ⅱ期以降に大木戸遺跡では集落が営まれ始めたと考えられる。

住居跡の分布状況からすると、中央の谷部部分を挟んで、西側エリアと東側エリアにそれぞれ独立した集落が営まれていたと考えられる。

西側エリアの集落（第369図）

西側エリアにおいて、住居跡は、北西方向に張り出す台地の縁辺の形状に沿って、長さ200m、幅100m前後の細長い範囲に分布している（第369図）。西側エリアの集落域も、おそらくはその範囲内に収まると考えられる。

住居跡は第Ⅴ期から第Ⅶ期にかけて検出されている。第Ⅴ期の住居跡は集落域の南端に分布し、遺物量もごく少ないものであった。

西側エリアの集落の中心となる時期は、第Ⅵ期である。現在の大宮バイパスから北側が分布の中心となっている。また第Ⅶ期の住居跡は第１次調査で１軒検出されている。第４地点のグリッド内からは、第Ⅵ・Ⅶ期の土器が多量に出土していることから、第Ⅶ期の住居跡が今回報告した調査区以外に存在している可能性が考えられる。遺構出土の土器などから、西側の集落の中心となる時期は後期前葉から中葉と考えられる。

その状況は、第４地点の北側にあたる平成20年度調査中の第13地点でも同様で、第Ⅵ～Ⅶ期の遺構や遺物が確認されている。今後、第13地点の調査が進めば、西側の集落の様相が明確になっていくと考えられる。

東側エリアの集落（第370図）

東側エリアにおいて、住居跡の分布は中央の谷を挟んだ長さ250m、幅200m前後の、南北に細長い東側部分ほぼ全域に及んでいる（第370図）。

集落域も、おそらくその範囲内に収まると考えられる。

集落域のほぼ中央にあたる第11地点からは、第Ⅱ期の土器が土壙から検出されている。土器の出土状況から、墓壙の可能性が高い土壙群である。その状況からすれば、第Ⅱ期に相当する住居跡は検出されていないが、周辺の未調査部分に土壙と同時期の第Ⅱ期の住居跡の存在が推定される。

西側と比較し広範囲に調査された東側ではあるが、今回検出された住居跡は17軒であった。出土土器から時期が確定できる住居跡については、その半分にも満たなかった。時期は、第Ⅴ期の第９－２号住居跡以外は第Ⅲ･Ⅳ期に属するもので、検出された住居跡からは、後期初頭の集落が営まれていたといえる。

また、第Ⅳ期の第５－３号住居跡については、炉跡の北側に最大長1.42m、最大幅0.75m、重さ71.7kgの紅簾石片岩製の一枚岩が敷設されており、敷石住居であったことがわかっている。使用された結晶片岩は、三波川帯の分布域から産出されるもので、県内では長瀞町周辺や小川町の採石場が知られている。また、大木戸遺跡第５－３号住居跡と同様に、大型の結晶片岩を使用している敷石住居は川越市牛原遺跡第４号住居跡の例が挙げられる（黒坂2007）。両遺跡ともに、大型の敷石は遠距離から運ばれていることとなる。荒川低地を挟む台地の東西の縁辺部に立地する遺跡の敷石住居跡の関連性については、規格の比較や、他の敷石住居跡の類例とも比較した上で考えていくこととし、今後の課題としたい。

第Ⅱ期とした中期後半の加曽利ＥⅢ式新段階から始まると考えられる東側エリアだが、中期後半の大宮台地上の環状集落については、金子直行氏が検討を行っている（金子2006・2007）。

それによれば、加曽利ＥⅢ式新段階以降、中期型環状集落は解体し、分散化、分村化するとある。

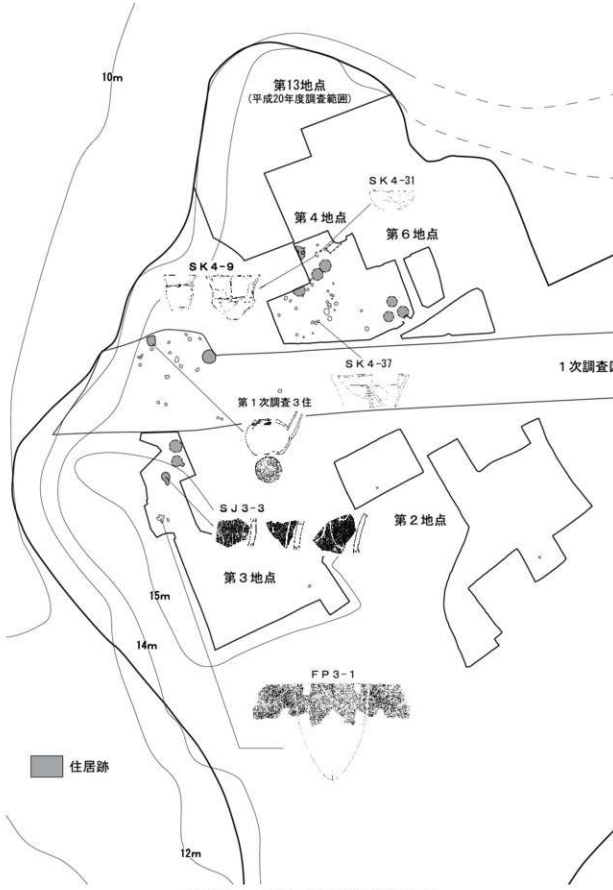
また、台地の縁辺部に遺跡は移動する傾向にあり、後期型集落が形成されていくとしている。

大木戸遺跡の東側の集落も、同時期存在の住居跡は数軒で、周辺にも小規模の後期初頭の遺跡が点在する状況がうかがわれる。それからすれば、金子氏の指摘する大宮台地における後期初頭集落の実態に近い遺跡であると言えよう。

大木戸遺跡の縄文時代の集落の様相

以上のことから、大木戸遺跡の縄文時代の状況についてまとめていくと、拠点的集落が解体していく段階で、大木戸遺跡東側エリアに中期後半の加曽利ＥⅢ式新段階から集落が始まったと考えられる。調査結果から、東側エリアの集落は大規模なものではなく小規模なものであることから、拠点的集落から分散化や分村化したものとも考えられる。東側エリアから検出された住居跡は後期初頭の範囲内に収まるもので、その時期が主体となる集落を形成していたと考えられる。東側エリアの集落は後期初頭で途絶え、それ以降の遺構や遺物は検出されていない。

大木戸遺跡西側エリアは、後期初頭の終末段階に住居跡の形成が始まっている。後期初頭以降途絶えた東側エリアとの関連性は不明である。その後、集落の主体となるのは後期前葉の堀之内２式、後期中葉の加曽利Ｂ１式期である。集落の様相は、平成20年度調査中の第13地点の結果によって、明らかになっていくと考えられる。



第369図　大木戸遺跡縄文時代遺構分布図（１）

第370図　大木戸遺跡縄文時代遺構分布図（２）

3．弥生時代

弥生時代の遺構は第４地点において、竪穴住居跡11軒を検出している。しかしながら、調査区内で完全に検出できた住居跡が少なく、また全体的に遺存状況が悪い。出土遺物もSJ４－２以外からは良好に認められなかった。本遺跡における弥生時代の集落は、調査区外に多く延びている。集落が発見されている第４地点は、台地縁辺部からやや奥まったところに立地しており、集落域は確実に北側、西側へと続いていくことが予想される。また、第４地点南側の１次調査では、当該期の遺構が検出されていないので、南側へ展開することはないと考えられる。

本節では、弥生時代の出土遺物・遺構・集落構成を分析・検討を加えて、周辺遺跡との様相を概観していく。

（１）出土遺物について

出土遺物については、SJ４－２から多く出土しているものの、他の住居跡からは僅かしか検出されていない。本遺跡の出土遺物についてはSJ４－２を中心に構成することになる。なお、特徴的な土器について説明を加えていく。

本遺跡出土土器の器種構成は、壺、小型壺、無頸壺、甕、高坏、鉢がある。また、瓢形をした壺も見られるが、東海系のヒサゴ壺とは全く異なるものである。

壺形土器は単口縁と複合口縁のものがある。単口縁壺（第371図５）は中型で、口縁部の長さが短く、頸部もあまり締まらないような、広口壺の一種である。小型壺は器壁が厚く、作りは雑である（第371図６）。

複合口縁壺は、複合部に文様を施すものと施さないもの（第371図４）がある。

第371図１の複合部には、原体下端にＳ字状結節文をもつLR単節縄文が施文され、複合部下端にはハケ状工具による刻みが認められる。また、肩部にも同様の縄文原体によって３段施文され、その下部に山形沈線文が描かれている。さらに、複合部と肩部には等間隔に円形朱文が施される。第371図２の複合口縁壺は、内外面に文様が施されているものである。複合部外面はLR単節縄文、内面はＳ字状結節文をもつLR単節縄文である。

頸部のみの個体について、有文と無文（第229図４、第235図５）がある。第240図２にはLR単節縄文が施される。第371図３は頸部に横方向の回転施文が見られる。原体は植物繊維質を用いたものであるが、撚りは明確でない。

大型壺の器形は、頸部の屈曲が緩やかで胴部最大径は胴下半に認められる。中型壺は球形胴に近くなる。

第371図７の無頸壺は、口縁部にLR単節縄文を施している。

続いて、甕形土器では、台付甕が３種類認められる。一つ目（第371図９）は胴部がハケ調整で、口唇部に刻み目をもつものである。二つ目は胴部が板状工具による調整で、口唇部に刻み目をもつものである（第230図17・18）。第371図10は折返口縁であるが、同じグループに含めておきたい。この口縁部は輪積み甕、または壺の折返口縁の影響を受けて作出されたと考えられる。三つ目（第371図11）は胴部がハケ調整で、口唇部に刻み目を施さないものである（第230図13・14）。

台付甕の器形は、頸部の屈曲が緩やかなものから少し屈曲が強くなるものまであるが、明確にくの字状を呈するものは見られない。胴部は球形に近くなっている。

また、小型甕形土器（第371図12）があり、口唇部に刻み目をもち、肩部の膨らみが弱く、頸部の屈曲が強い傾向にある。

次は、高坏形土器である（第371図13～16）。口縁部外面に縄文を施文するもの（第371図13・14）と、無文のもの（第371図15）がある。第371図13

の口縁部外面には羽状縄文が施される。原体は上段が細いRL単節縄文で、下段は太いLR単節縄文であり、異なる原体を使用している。なお、第371図13はSD４－１出土であるが、SD４－１がSJ４－５を壊しているために、第371図13がSJ４－５に所属する遺物として考えられる。そのため、第371図13と14は同一個体だと考える。第371図15は高坏の坏部で、内外面ともに丁寧にミガキ調整が施されており、縄文施文は認められない。第371図16は高坏の脚部で、外面はミガキ調整、内面はハケ調整が施されている。15は在地系の高坏で、縄文が消失したものとして捉えられる。しかし、裾広がりになる16の脚部は、在地系の高坏の中に見出し難く、東海系の小型高坏形土器の範疇に入るものと思われる。類例を挙げると、さいたま市（旧大宮市）吉野原遺跡７号住出土例（笹森1986）になる。

最後に、鉢形土器は第371図17･18である。底部は平底で僅かに脚部が張らみ、口縁部は短く外側開く形態を呈する。屈曲部は内外面ともに緩やかである。17は内外面ともにミガキ調整で赤彩が施される。18は外面がミガキ調整で、内面はヘラナデ調整である。周辺遺跡の類例としては、さいたま市（旧大宮市）鎌倉公園遺跡の27号住出土例（立木ほか1984）を挙げられる。この鉢形土器は在地系の中に見られず、東海系の系譜からも追うことができない。笹森紀己子氏は、鎌倉公園遺跡例をもとに「在地の系譜のなかでは、捉えられない器形」であると述べ、庄内式段階の鉢形土器に類似するとして畿内からの系譜を考えている（笹森1990）。

本遺跡の出土土器を概観してきたが、本遺跡の出土土器は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての土器群と考えられる。出土量が少ない本遺跡内において、編年案を導き出すことは非常に難しい。また、当該期の土器編年は南関東において未だに確立していないのが現状である。その中でも、笹森氏は大宮台地周辺における当該期の編年研究を精力的行っている（笹森1984・1993・笹森ほか1996）。そこで、本遺跡出土土器を笹森氏の編年案（笹森1993）を援用して編年的位置づけを行いたいと思う。器種別、系統別にⅠ～Ⅵ期に段階設定をし、Ⅰ～Ⅲ期を「弥生町式」、Ⅳ～Ⅴ期を「前野町式」、Ⅵ期を古墳時代初頭に相当するとしている。

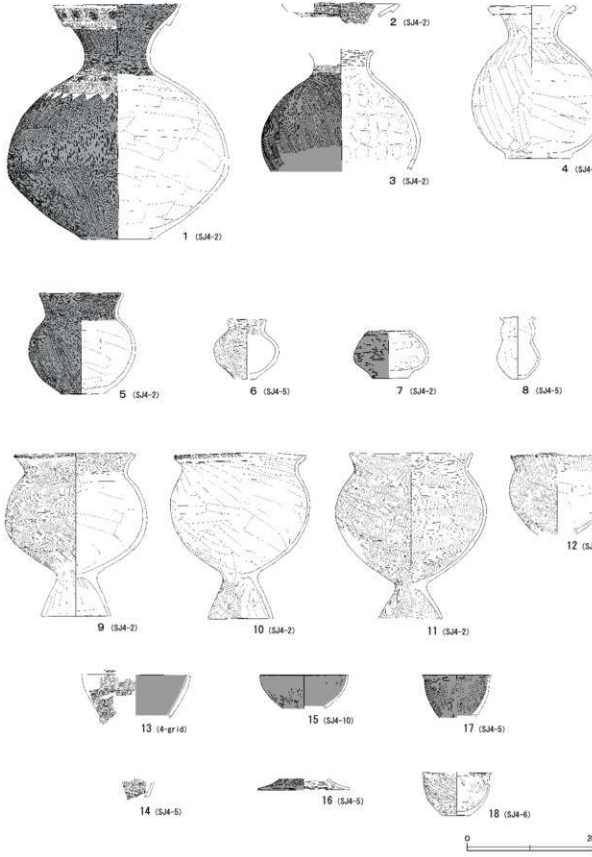
壺形土器（第371図１）は、胴下半に接合部分の屈曲部が認められる。甕形土器（第371図９～12）は、頸部がCの字状を呈するものや、くの字状に近くなるものが混在する様相が見受けられる。また口縁部の刻み目は残存する。高坏形土器（第371図13～16）では、口縁に羽状縄文を施すものと無文のものが存在する。また東海系の小型高坏形土器が入ってきている。

上記の諸特徴と笹森編年案を照らし合わせてみると、Ⅳ期の様相と合致すると考えられる。また、他の器種を見ると、無頸壺や甑形をした特異な壺、また第371図３のような特異な文様を施す頸部文様帯などを合わせて考えると、笹森編年案と同様に弥生時代後期後半に収まってくると考えられる。東海系の小型高坏を考慮に入れると、全体を弥生時代後期終末まで引き下げてもいいが、後期後半～終末という時間幅をもたせて、本遺跡の集落存続期間の幅として捉えておくこととする。

（２）住居の形態について

住居跡全体が把握できていないものが多いため、集落の様相を完全に把握しきれないが、住居跡について、各施設の特徴をまとめていきたいと思う。

住居の形態については、ほぼ隅丸長方形でまとまっていると言える。規模は６ｍを超えるものは存在せず、大型の住居は現在のところ確認できない。各施設について、柱穴は主柱穴４本と入り口の柱穴の合計５本で構成されている。炉は地床炉



第371図　大木戸遺跡出土弥生土器

で、中心より奥側に寄る傾向がある。貯蔵穴は3軒に認められる。すべて入り口から入ったすぐ右側に設けられ、貯蔵穴の周りには土手状の高まりが見られる。壁溝はあまり見られなく、全周するものはない。

（3）集落の構成について

集落の構成は、主軸方位から大きく2つに分けられる。一つは南西側のSJ 4 -1～5のグループと、もう一つは北側のSJ 4 -10•11のグループである。SJ 4 -1・2・3・4がほぼ主軸方位が一致する。またSJ 4 -5の主軸方位は異なるが、SJ-2・3と住居の方向性が一致していることが言える。その5軒のグループを一つのまとまりと考えると、SJ 4 -1・4と、SJ 4 -2・3・5の間に約10mの空間がある。また、北側のSJ 4 -10と11の間にも20m近い空間が存在することになる。

2つのグループの中間に存在するSJ 4 -6～9は全体像が判然とせず、位置づけることが難しい。しかしながら、SJ 4 -6と9は主軸方位が正反対を示し、その方向性からSJ 4 -6は南西側に、SJ 4 -9は北側のまとまりに入ると思われる。

出土遺物は僅かしかないために、住居間及びグループ間の時間差を指し示すことは難しいが、前述したように、出土遺物からはほとんど時間差が認められない。そのため、本遺跡の集落構成は、数軒ごとにまとまりを作り、そのまとまりの中央に空間を有して一つの集落として成り立っていたと想定しておきたい。

最後に、周辺遺跡における弥生時代後期の集落の様相について述べてまとめにかえたい。

本遺跡が立地する指扇支台（第2図）において、その縁辺部には点々と弥生時代後期後半の遺跡が見つかってはいるが、後期後半の大規模な集落遺跡は現在のところ発見されていない。しかしながら、指扇支台東側の自然堤防上には、環濠をもつ土星下遺跡が形成されている。

やはり今までは、後期集落の濃密な分布を示すのは、鴻沼川流域、芝川流域、綾瀬川流域であった。それらの河川で挟まれる日進与野支台、浦和支台、大和田片柳支台、鳩ヶ谷支台の縁辺部に数多くの遺跡が立地しているのである。

日進与野支台には札ノ辻遺跡、須黒神社遺跡、浦和支台には吉野原遺跡、中里前原北遺跡、中里前原遺跡、上太寺遺跡、大和田片柳支台には鎌倉公園遺跡、三崎台遺跡、染谷遺跡群、鳩ヶ谷支台には上野田西台遺跡、下田稲荷原遺跡などの多くの集落遺跡が認められている。

弥生時代後期の遺跡は、台地の縁辺部からやや奥まった場所に立地しているのが通例である。本遺跡も滝沼川の低地からやや奥まった台地上に立地しているため、周辺遺跡と同じ傾向によって形成されていたと言える。

さらに、上記の遺跡にも多く含まれるが、後期集落の特徴として、環濠をそなえている点が挙げられる。埼玉県内における弥生時代後期の環濠集落は、23遺跡を数える（菊池2007）。本遺跡において、現在までのところ、環濠らしき溝跡は検出されていない。また本遺跡第4地点の南側の1次調査において、環濠らしき溝跡を発見していないとなると、本遺跡は環濠が巡らない集落遺跡になる可能性が高い。

今後、濃密な分布域から離れて位置する本遺跡の歴史的背景を考えていきたい。そして、多くの資料が蓄積された今、環濠をもつ集落ともたない集落との相違などを含めた他遺跡との関係性を解明していく必要がある。そのためには、弥生時代後期土器編年を充実させることが必要であり、今後の課題としておきたい。

4．近世

大木戸遺跡第１～11地点の近世について少し検討したい。多くの地点において、近世と推定される溝跡やピットが検出されているが、調査面積が限られているため、各々の地点についての性格を推し量るのは困難である。さらに、各地点が数十メートル～百メートル単位の距離にあるため、地点間の関連性を窺い知ることも難しいといわざるを得ない。結論として、３つのグループ（３軒）が存在すると思われる。

（１）第２地点の、掘立柱建物跡と柵列跡・溝跡からなる地点。第３地点の、井戸跡と溝跡が存在する範囲にまで及ぶか否かについては判断できない。

（２）第４・６地点の、掘立柱建物跡と柵列跡・溝跡および井戸跡などからなる地点。

（３）第１・５・７地点の、掘立柱建物跡と柵列跡・溝跡および井戸跡からなる地点。

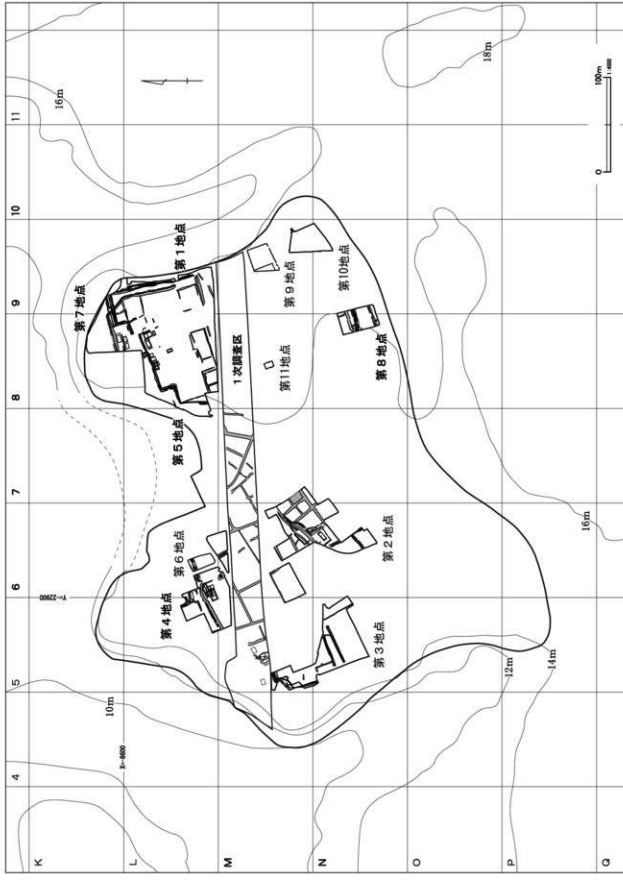
これらをまず細かく観察した後、以上の３点全体の検討をしたいと思う。まず、第１・５・７地点をみていく。第１地点の掘立柱建物跡の位置関係からみて、同時に存在したのは最大で３棟となる。第１－２号掘立柱建物跡と第１－３号掘立柱建物跡、第１－３号掘立柱建物跡と第１－４号掘立柱建物跡の同時存在はあり得ないことから、この部分については、第１－１号・第１－３号掘立柱建物跡、第１－２号・第１－４号掘立柱建物跡の組合せであった可能性が考えられる。第１－１号柵列跡は第１－１号掘立柱建物跡、第１－２号柵列跡は第１－３号掘立柱建物跡に対応すると考えられる。掘立柱建物跡からの遺物の出土は無く、周辺の遺構から検討してみたい。第１－４号掘立柱建物跡から東約６ｍの位置にある第１-28号土壙では、17C前葉の瀬戸・美濃系の陶器菊皿や、肥前系の17C末～18C前半の陶器鉢、18C前～中葉の時期碗ほかが出土している。第１－９号土壙からは18C代と思われる瀬戸・美濃系の陶器碗の小破片が出土した。第１－１号掘立柱建物跡から８ｍの位置にある第１－１号井戸跡では、17C後半と考えられる瀬戸・美濃系の天目碗の破片が、北２ｍの位置にある第１-14号溝跡からは、17C末～18C前半の肥前系陶器鉢が出土している。４～５ｍ程隔てて、第５－５号掘立柱建物跡があり、その西側には第５－１～４・６号掘立柱建物跡が、南13mには第５－７～９号掘立柱建物跡が存在している。この一群は、最大で東西方向に３棟、南に１棟が同時に存在した可能性がある、と指摘するにとどめておきたい。第５－１～３号掘立柱建物跡については、母屋的性格が想定される。

第５地点の掘立柱建物跡には出土遺物がなく、周辺遺構の遺物をみていきたい。第５-30号土壙からは16C末～17C初頭の瀬戸・美濃系の陶器皿（志野）が、第５-21号土壙からは18C前～中葉の肥前系の磁器碗が出土している。

第１・５地点の掘立柱建物跡群は、西に凸形に張るように巡る溝（第１-14・28溝跡・第５－８・２・１号溝跡）に囲まれているが、この溝内全体が屋敷地と考えたい。但し、東側については溝跡の遺存度が低いため確証はない。

第１－１号溝跡からは、志野皿をはじめ、16C末～17C初頭、さらに17C後半までの時期に収まる瀬戸・美濃系の陶器皿が計４点出土している。その他には、18C代に収まる肥前系の磁器碗４点、瀬戸・美濃系の天目碗１点・擂鉢１点ほかがあるが、肥前系の仏飯具は19Cにまで降る可能性がある。

この２つの掘立柱建物跡群からみれば奥まった位置に、３棟の掘立柱建物跡が、重複することなく主軸を揃えて存在している。そして、最も奥まった第７－１号掘立柱建物跡は東側に柵をもっていたと推定される。この掘立柱建物跡の北側にある第７-17号溝跡は、台地の地形に沿った根切り溝だと考えられ、その北側には集落は続かないとい



第372図　大木戸遺跡近世遺構分布図

える。この３棟は、第７-17・14・２・１号溝跡・第１-14号溝跡・第５-17～19号溝跡、および第７-17号溝跡に区画された屋敷地といえよう。第７-１・２号溝跡の中間部分が出入り口と推定される。

遺物としては、第７-２号溝跡から瀬戸・美濃系と肥前系の陶器皿（共に17C後半～18C前半）や、18C代と思われる肥前系の磁器碗が出土している。第７-17号溝跡からは京・信楽系の脚付灯火受皿（陶器18C代）・瀬戸・美濃系の磁器碗（19C代）、第７-11号溝跡からは瀬戸・美濃系の陶器花瓶（18C前半）、第７-10号溝跡からは肥前系の磁器碗（18C前葉～中葉）や瀬戸・美濃系の陶器碗（19C代）などが出土している。

以上、第１・５・７地点における３つの掘立柱建物跡群をみると、17C前葉以降、舌状台地の先端部に設けられた屋敷地に、一族ともいうべき近親者が最終的に３軒の家（または家族）となっていった結果とも思われるが、あくまでも推定の域を出ない。多くの溝跡は、その過程で掘り直されたり、付け替えられていったのではないだろうか。続いて第４・６地点をみていきたいと思う。

第４・６地点では、合わせて10棟の掘立柱建物跡と６基の柵列跡が検出されている（但し、第４-８号掘立柱建物跡は縄文時代と考えられる）。重複関係にある例があるが、可能性の一つとして最大３棟が共存し、第４-１号溝跡が南北を区切る区画溝であったと思われる。第４-１号掘立柱建物跡のみが、溝の北側に存在し主軸方向も異なっている。この１棟は他の掘立柱建物跡と共伴したか否か、その位置づけについては試案が無い。第４-３号掘立柱建物跡が建っている時期には、第６-１～３号掘立柱建物跡のいずれかと２棟で存在していた可能性が考えられる。その他の掘立柱建物跡については、その位置関係・重複関係から推して同時に存在したのは最高で３棟であり、第４-１・２号柵列跡は第４-４号掘立柱建物跡に対応し、第４-３号柵列跡は第４-４号掘立柱建物跡に対応すると考えられる。第４-１号掘立柱建物跡からは瀬戸・美濃系陶器の小坏（17C後半）が、第４-２号掘立柱建物跡からは瀬戸・美濃系陶器の碗（17C代か・18C代）や、肥前系の磁器碗（18C前～中葉）のほか、かわらけや古銭・砥石などが出土している。かわらけについては第４-４・６号掘立柱建物跡でも確認されているが、これらは地鎮行為に伴うものであろうか。可能性の１つとして、指摘しておきたい。

続いて、掘立柱建物跡群周辺の遺構からの出土遺物をみていく。第４-１号井戸跡からは瀬戸・美濃系の陶器碗・皿が出土しているが、18C前～中葉のものから18C末～19C前半と、時期に幅がある。第４-12号土壙では、瀬戸・美濃系の陶器として、17C初頭の志野の瓶や18C後半～19C前半の擂鉢が、肥前系では17C代や18C代の磁器碗など出土している。第６-29号土壙からは瀬戸・美濃系と肥前系の陶器皿１点ずつが出土しているが、ともに17C後半～18C前半のものである。第６-29号土壙では、17C後半～18C前半の瀬戸・美濃系と肥前系の陶器皿が出土している。

第４-１号溝跡からは、17C代の瀬戸・美濃系の陶器皿や擂鉢、18C代の陶器碗ほかが、第４-４号溝跡からは肥前系の17C中葉～後葉の陶器碗や18C前葉～中葉の磁器碗ほかが出土している。第６-３～６号溝跡からは、瀬戸・美濃系の陶器の碗・皿・香炉・向付が、肥前系では陶器の鉢、磁器の碗などが確認されているが、時期的には17C初頭～18C前半と幅がある。また、第６-１号溝跡からは、17C後半～18C前半と思われる肥前系磁器碗と瀬戸・美濃系の陶器の小坏が出土している。

第４・６地点の様相をみると、舌状台地の先端部分に２棟ないしは３棟の掘立柱建物が並存する１軒の屋敷であるとの想定が出来るのではないか。

第２地点では、２棟の掘立柱建物跡が重複する

形で検出されている。しかし、多数のピットが存在するため、それ以上の掘立柱建物跡があった可能性は否定できない。この一画の三方を取り囲むようにして、柵列跡が認められた。西側の柵列は２基存在しており、掘立柱建物を建て替えた際に柵列も造り直した結果と推定される。東側については、ピット列の方位の違いから、別個の柵（第２－４・５号柵列跡）が時期を異にして存在していた可能性も考えられる。第２－５号溝跡に近い側の柵（第２－４号柵列跡）が存在している時期には、東西方向の柵（第２－３号柵列跡）との間は出入り口と推定される。逆に、この部分に柵が設けられている時期には、この柵と第２－５号溝跡との間が出入り口であったと考えられる。北側では柵列跡は検出されておらず、第２－５号溝跡が区画していた可能性が高い。逆の表現をするならば、溝に区画されていない部分を柵で区画したと思われる。

まず、柵と溝に区画された範囲内での出土遺物からみていくことにする。第２－２号掘立柱建物跡に切られている第２－１号掘立柱建物跡では、18Ｃ前～中葉の瀬戸・美濃系の香炉の破片が別々のピットから1点ずつ出土している。また別のピットからは古銭やかわらけが出土している。これについても、他の地点の場合と同様に地鎮の可能性が考えられる。第２－１号井戸跡からの出土遺物は、瀬戸・美濃系の陶器皿（17Ｃ代）・磁器碗（19Ｃ前～中葉）、肥前系の磁器碗（18Ｃ代）、京・信楽系の陶器碗など（17Ｃ末～18Ｃ初・18Ｃ末～19Ｃ初）であり、時期幅が大きいといえる。

第２－71号土壙からは、17Ｃ中葉と思われる瀬戸・美濃系の陶器皿をはじめとして、18Ｃ後葉～19Ｃ中葉の範疇に入る瀬戸・美濃系の碗・仏飯具・徳利など多数の陶磁器類が出土している。磁器はいずれも肥前系で、陶器は大部分が瀬戸・美濃系のものが占めるが、京・信楽系と肥前系のものも少数ではあるが含まれている。

柵外の、ピットが集中する範囲内に目を移してみる。第２－５号溝跡出土の遺物では、17Ｃ代と思われる肥前系の磁器皿がもっとも古く、18Ｃ末～19Ｃ初の京・信楽系陶器碗が新しい部類となる。

また、この溝跡からは頭部を欠損した、猿を模った土人形が出土している。「猿は庚申信仰や「難がサル」という語呂合わせ、馬の病気を癒す守護神などの意味から、厩に祀った」といわれる（安芸2001）。そこでこの溝跡近辺に、厩が存在した可能性を提示しておきたい。

第４・６地点から100mほど南に位置する第２・３地点は、台地上でもやや奥まった部分に当たる。ここでは掘立柱建物跡２棟が重複した状態で検出された。基本的には、北に溝を設け、残る３方を「コ」字状に柵によって区画された東西約18m、南北約12mの敷地内に１棟の掘立柱建物と井戸が存在していたという状況が考えられる。井戸跡は２基検出されているが、並存か掘り替えかについては判断材料がない。

大木戸遺跡第１～11地点の近世関係の遺構を概観してみた結果、第１・５・７地点、第４・６地点、第２・３地点と、大きく３つのグループの存在を仮定した。このグループには、少なからぬ溝跡が伴っていると考えられるが、多くの溝跡については、どれが区画溝でありどれが根切り溝であるかを特定するには至らず、また区画溝に囲まれた屋敷地の特定にも及ばなかった。さらに第８・９地点に存在する溝跡やピットについては言及できなかった。

しかし、この３つのグループの特徴の１つとして、各グループとも近世初頭に始まり、18Ｃ代に至って遺構や遺物が次第に増加していき近代以降へと続いていった、と推定されることであろう。その過程で建物の立て替えや増築、区画溝の浚渫や付け替えなどが行われた結果が第１～11地点の姿であると考えたい。

引用・参考文献

安芸毬子　2001　「遊・玩具１　やきもの製人形類」『図説　江戸考古学事典』柏書房

石井　寛　1992　「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第９冊　横浜市ふるさと歴史財団

石塚和則　2005　『森ノ上遺跡』狭山市遺跡調査会報告書　第14集

稲村晃嗣　1990　「加曽利Ｅ系列の土器群」『調査研究集録』第７冊　横浜市埋蔵文化財センター

岩田明広　1999　『中里前原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第228集

上野真由美　1999　『宿北Ｖ遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第214集

大宮市役所　1973　『大宮市史　第三巻下　近世地誌編』大宮市

大矢雅彦・高山　一・久保純子編著　1996　『荒川流域地形分類図解説書』建設省関東地方整備局荒川上流工事事務所

大村　直　1982　「前野町式・五領式の再評価」『神谷原Ⅲ』八王子市椚田遺跡調査会

金子直行　2004　『浅間東遺跡Ⅳ』町内遺跡発掘調査報告書　第４集　埼玉県松伏町教育委員会

金子直行　2006　「縄文中期型環状集落解体への序章―「時（クロノス）」としての土器からみた「場（トポス）」としての集落変遷―」『ムラと地域の考古学』同成社

金子直行　2007「縄紋中期型環状集落の解体過程からみた縄紋社会―複雑系科学の視点から―」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅤ　縄紋社会の変動を読み解く　予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所

菊池有希子　2007　「３　遺構研究　住居と集落」『埼玉の弥生時代』六一書房

黒坂禎二　2008　『牛原/御新田/番匠・下道/横沼新田/北谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第353集

剱持和夫　1991　「関東地方の環濠集落(覚書)」『埼玉考古学論集』設立10周年記念論文集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県　1987　『新編埼玉県史　通史編１』

埼玉弥生土器観会編　2007　『埼玉の弥生時代』六一書房

笹森紀己子　1984　「久ヶ原式から弥生町式へ―壺形土器の文様を中心に―」『土曜考古』第９号

笹森紀己子　1986　『吉野原遺跡　下加幡遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊３

笹森紀己子　1990　「大宮市内出土の外来系土器について」「大宮市立博物館研究紀要」第２号

笹森紀己子　1993　「大宮台地における弥生後期土器―変遷の素描―」『二十一世紀への考古学』雄山閣出版

笹森紀己子・小川岳人・田代　治　1996　『三崎台遺跡―第３次調査―』大宮市遺跡調査会報告　第56集

シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編　2005　『南関東の弥生土器』考古学リーダー５　六一書房

鈴木徳雄　1990　「称名寺式土器」『調査研究集録』第７冊　横浜市埋蔵文化財センター

鈴木徳雄　2007　「称名寺式土器研究の諸問題」『中期終末から後期初頭の再検討』第20回縄文セミナー

田代　治　1997　「大宮台地の概要」『埼玉考古　別冊第５号―特集号　埼玉の旧石器時代―』埼玉考古学会

谷井　彪・細田　勝　1995　『関東の大木式・東北の加曽利Ｅ式土器』日本考古学第２号

谷井　彪　2003　「縄文時代中期終末と後期初頭の接点―梶山類をめぐって―」『埼玉県立博物館紀要』28　埼玉県立博物館

立木新一郎他　1984　『鎌倉公園遺跡』大宮市遺跡調査会報告第９集

立木新一郎他編　1986　『染谷遺跡群発掘調査報告』大宮市文化財調査報告　第20集

田中英司　1987　「埼玉県の先土器文化」『埼玉の文化財』第二七号　埼玉県文化財保護協会

中平　薫他　2006　『寺脇』日高市埋蔵文化財調査報告書　第32集

西井幸雄　2004　「大宮台地における石器群の変遷」『山下秀樹氏追悼考古論集』山下秀樹氏追悼考古論集刊行会

細田　勝　2002　『浅間東遺跡Ⅱ』町内東部遺跡群発掘調査報告書第４集　埼玉県松伏町教育委員会

細田　勝　2008　「加曽利Ｅ式土器」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション

松本　完　1993　「南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性」『翔古論聚』真陽社

山形洋一他　1992　『下加遺跡』大宮市遺跡調査会報告　第35集

山形洋一・田代　治他　1989　『西大宮バイパスNo.５遺跡』大宮市遺跡調査会報告　第24集

山形洋一・田代　治他　1995　『西大宮バイパスNo.６遺跡』大宮市遺跡調査会報告　第48集

山口康行他1992　『指扇下戸遺跡』大宮市遺跡調査会報告　第39集

山口康行・笹森紀己子　1994　『土屋下遺跡』大宮市遺跡調査会報告　第47集